

多賀城市文化財調査報告書第87集

多賀城市内の遺跡 2

— 平成18年度発掘調査報告書 —

平成19年3月

多賀城市教育委員会



環頭大刀柄頭 (左：A面 右：B面)
卷頭写真1



S X 3260南 1 道路 (S X 3262整地層上面・東より)

巻頭写真 2



S X 2135・2139整地層及びS D 3257 a・3259出土土器



竈形土器（手前）・製塩土器（奥）



S D13溝跡 (西より)



S D13溝跡出土遺物

巻頭写真4

- | | | | |
|-----|-------|-----|--------|
| 1・5 | 無釉陶器甕 | 2・3 | 瓦質土器火鉢 |
| 4 | 白磁皿 | 6 | 瓦質土器挿鉢 |

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの埋蔵文化財は、本市の歴史が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきた歴史のまちであることを物語っております。これら貴重な「文化遺産」という名の祖先からの預かりものを、後世に守り伝えていくことは、我々の重要な責務のひとつであります。このため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、本書は平成18年度に国庫補助事業として実施した市川橋遺跡、新田遺跡、西沢遺跡、八幡館跡等4遺跡12件の調査成果を収録したものです。そのうち市川橋遺跡第56次調査では、南1道路を発見し、さらにその建設に伴う整地層から古墳時代後期の所産である環頭大刀の柄頭が出土しました。この遺物は、多賀城創建以前においてもこの地が重要な場所であったことを窺わせるもので、大変貴重な発見となりました。また、山王遺跡の南側では包蔵地の範囲を確認する目的で試掘調査を行いました。これまでの調査は、開発計画の後を追うように行ってきたものがほとんどですが、このような試掘調査が開発事業との円滑な調整のためには非常に有効であり、今後も必要に応じて行っていきたいと考えております。

この報告書が、市民の皆様をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成19年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例 言

1. 本書は、平成18年度に実施した12件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡の調査区基準線については、 $X = -189, 200.000$ 、 $Y = 13, 850.000$ （南北・東西大路交差点の中央付近）を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに東西方向はE1・E2・・・、W1・W2・・・、南北方向はN1・N2・・・、S1・S2・・・と表示している。なお、山王字山王五区・高崎字花の木地区試掘調査については、遺跡の範囲を確認する際に市川橋遺跡と同じ原点を用いて南北道路の推定延長線を割り出し、そこに調査区を設定していることから、同様の表示方法をとった。
4. 挿図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6. 環頭大刀については、穴沢啄光氏、岩原 剛氏（豊橋市美術博物館）、菊地芳朗氏（福島大学）、橋本英将氏（元興寺文化財研究所）、松尾充晶氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）からご教示を得た。また、X線写真撮影は及川 規氏（東北歴史博物館）に依頼した。
7. 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、Iを村松稔、相澤清利、IIを石川俊英（3 千葉孝弥）、III・V・IXを村松稔、IV・XI・XIIを相澤清利、VI・VII・VIII・XIIIを武田健市、Xを島田敬が担当し、編集は村松が行った。遺構・遺物の図版作成では各担当者と廣瀬真理子・大友貴晴が、遺構の写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は村松稔が担当した。
8. 本書の作成に関しては次の方々からご指導・ご協力を賜った。
生田和宏（宮城県教育委員会） 奥山誠義（奈良県立橿原考古学研究所）
北野博司・東郷加奈子（東北芸術工科大学） 小井川和夫（宮城県多賀城跡調査研究所）
小林 啓（福島県文化振興事業団） 手代木美穂（東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター）
藤沢 敦（東北大学埋蔵文化財調査室） 藤澤良祐（愛知学院大学） 松井敏也（筑波大学）
増澤文武（元興寺文化財研究所） 村上 隆（奈良文化財研究所）
9. 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1	X. 新田遺跡第35次調査	53
II. 市川橋遺跡第55次調査	3	附章1 多賀城市新田遺跡第34次調査に おけるプラント・オパール分析	58
III. 市川橋遺跡第56次調査	8	附章2 多賀城市新田遺跡第35次調査に おけるプラント・オパール分析	61
IV. 市川橋遺跡第57次調査	33	XI. 西沢遺跡第14次調査	64
V. 市川橋遺跡第58次調査	37	XII. 八幡館跡第3次調査	68
VI. 市川橋遺跡第59次調査	39	XIII. 山王字山王五区・ 高崎字花の木地区試掘調査	74
VII. 市川橋遺跡第60次調査	40		
VIII. 市川橋遺跡第61次調査	45		
IX. 新田遺跡第34次調査	49		

調査要項

1. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
2. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤慶輝
3. 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 係長 千葉孝弥
 研究員 石川俊英 島田 敬
 相澤清利 武田健市
 技師 村松 稔
 発掘調査員 廣瀬真理子 大友貴晴
4. 調査協力者 板橋恵一 大江廣郎 小幡 茂 小原宏記 加藤 修 加藤りん 亀本光輝
 川澄 仁 久田治伸 後藤 學 佐藤忠一 佐藤悦雄 佐藤 誠 澤田義文・陽子
 高橋 寿 高橋英之 新沼七夫
5. 調査従事者 赤間かつ子 浅野喜久男 井口幸男 遠藤一代 大場勝喜 大場孝也 大江かおり
 岡本典子 小野玉乃 小野寺恵子 小幡 武 小松まり 久保田厚生 今野和子
 佐藤十五 清水 亮 鈴木政義 塩井一征 下山功咲 土屋利通 平山節子
 藤沢拓司 松田正樹 宮川ハルミ 柳 裕順 渡辺ゆき子
6. 整理従事者 小野寺雪子 坂本英美 中村千恵子 村上和恵 横山佳織

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	市川橋遺跡第55次調査	城南二丁目20-1	4月10日～4月19日	19m ²	石川
2	市川橋遺跡第56次調査	城南二丁目5-2	5月10日～6月7日	26m ²	村松・大友
3	市川橋遺跡第57次調査	城南一丁目2-4	5月17日～5月26日	33m ²	相澤
4	市川橋遺跡第58次調査	城南二丁目20-10	7月3日～7月7日	20m ²	村松・大友
5	市川橋遺跡第59次調査	城南一丁目8-8	9月11日	18m ²	武田・大友
6	市川橋遺跡第60次調査	城南一丁目3-1	10月4日～10月16日	24m ²	武田・大友
7	市川橋遺跡第61次調査	城南一丁目6-8	11月13日～11月25日	74m ²	武田・廣瀬
8	新田遺跡第34次調査	新田字新後14番7	4月6日～4月25日	58m ²	村松・大友
9	新田遺跡第35次調査	山王字北寿福寺53-7	10月12日～11月9日	36m ²	島田・廣瀬
10	西沢遺跡第14次調査	浮島字沢前20番2	6月20日～6月30日	31m ²	相澤
11	八幡館跡第3次調査	八幡二丁目378-6	11月30日～12月13日	58m ²	相澤・大友
12	山王字山王五区・高崎 字花の木地区試掘調査	高崎字花の木 山王字山王五区	12月14日～12月20日	7 m ²	石川・武田・大友

凡 例

1. 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
 SB：建物 SA：柱列 SD：溝 SK：土壙 Pit (P)：柱穴及び小穴 SX：その他の遺構
2. 層序の表記については、一つの層を細分する際に上下関係が把握できたものについては算用数字を、また把握できなかったものや、更なる細分を行ったものは小文字のアルファベットを、それぞれ枝番号として用いた。
3. 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会 2003）に従った。
4. 瓦の分類は『多賀城跡 政庁跡 図録編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、『多賀城跡 政庁跡 本文編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）に従った。
5. 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解と（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）、『扶桑略記』延喜15年(915)7月13日条にみえる「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、100頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I. 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 市川橋遺跡

本遺跡は、市中央部を流れる砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に立地し、東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。北東側に接する低丘陵上には、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関係する古代の遺跡として知られている。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施され貴重な成果を得ているが、特に注目されるのが多賀城南面に施工された古代の方格地割の発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておおよそ1町を基準とした地割を形成するものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡にまで及んでいる。本遺跡中央部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地域であると考えられる。

2. 新田遺跡

本遺跡は、市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川東岸に形成された、標高5～6mの微高地上に立地し、東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では、溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、遺跡東部にあたる寿福寺地区では、12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。近年の調査では、この屋敷群がさらに南の北地区まで広がりを持つことが明らかになってきている。西側に隣接する仙台市宮城野区岩切から本遺跡一帯は、留守氏が支配する「高用名」に含まれる地域であることから、これら武士層は留守氏と深く関係のあるものと想定されている。

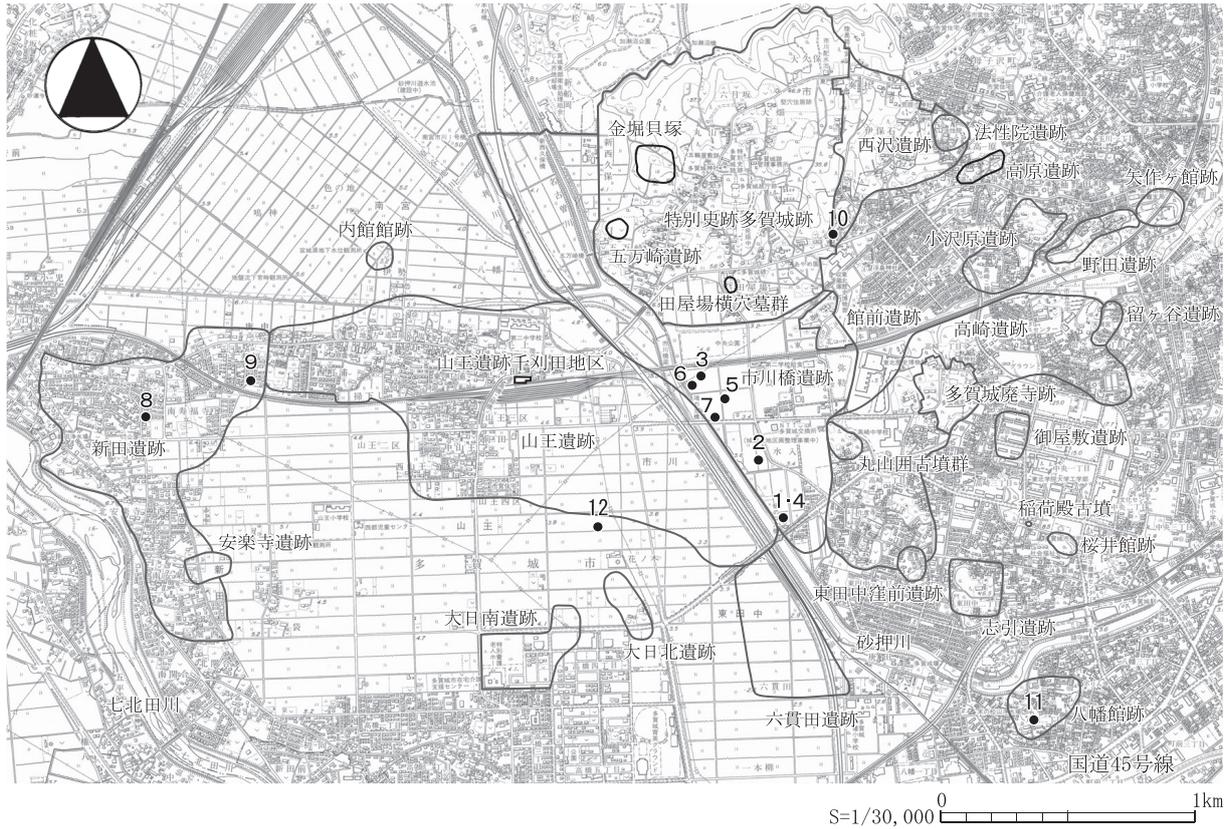
3. 西沢遺跡

本遺跡は、多賀城市市川・浮島地区に所在し、東西約450m、南北約700mの広さを有する。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって派生した低丘陵の南西端部に位置する。標高は北側の丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約5mであり、全体としては斜面の合間に大小の谷が入り込んだ景観を呈している。

本遺跡の西側には、特別史跡多賀城跡が隣接し、東側には奈良・平安時代の散布地及び集落跡である法性院遺跡と高原遺跡が所在する。本遺跡については、これまで13次にわたる発掘調査を実施しており、縄文時代と古代～近世にかけての遺構・遺物を多数発見している。とりわけ平安時代に入ると、近接する伊保石地区においては、城内の大畑地区官衙域とおおよそ同時期の鍛冶工房を含む竪穴住居や掘立柱建物が整備される傾向にあり、国府多賀城の強い影響下にあった地域として認識されている。なお、これまでのところ沖積地（湿地）においては、明確な遺構は発見されていない。

4. 八幡館跡

本遺跡は、国道45号線と砂押川に挟まれた八幡地区に所在し、東西約300m×南北約200mの広さを有する。遺跡が立地する低丘陵は、松島丘陵から塩釜方面に派生した平坦な低丘陵の最南端に位置する。北側は砂押川が東流し、南側は仙台平野、太平洋を望む。周囲は宅地化が著しく、館跡のある丘陵もかなり地形が改変されている。



- 1：市川橋遺跡第55次調査 2：市川橋遺跡第56次調査 3：市川橋遺跡第57次調査 4：市川橋遺跡第58次調査
 5：市川橋遺跡第59次調査 6：市川橋遺跡第60次調査 7：市川橋遺跡第61次調査 8：新田遺跡第34次調査
 9：新田遺跡第35次調査 10：西沢遺跡第14次調査 11：八幡館跡第3次調査 12：山王字山王五区・高崎字花の木地区試掘調査

第1図 調査地の位置

八幡館は、末の松山浄水場がある50m×60mほどの平坦な台地上にあり、地域住民からは「本丸」と呼ばれている。この「本丸」の西南部に土取りされた残丘があるが、ここが館の南端部と見られている。その周辺には土塁状の高まりも存在したとされているが、現状では確認できない。本遺跡については、平成15年に初めて発掘調査（第1・2次調査）を実施した。平安時代の竪穴住居跡、中世の堀跡を発見し、八幡館関連遺構の存在を確認するに至った。なお、平成18年11月に残丘頂部を踏査した際に、表土（黒色土）より古瀬戸の瓶子・折縁深皿、染付碗（中国産・明）を採集している。

八幡館の城主は、『仙台領古城書立之覚』『八幡村風土記御用書出』に伊沢四郎家景家臣「八幡兵庫」とされている。八幡氏は、室町時代には八幡介と称し、宮城郡内では一時留守氏をしのぐ勢力を持っていたが、戦国時代に入ると留守氏に屈しその家臣となっている。

II. 市川橋遺跡第55次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成18年3月に地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについて協議書が提出された。建築計画では、住宅の基礎工法に直径114.3mm、長さ9mの鋼管杭を29本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施されることが決定した。その後、3月27日に地権者より発掘調査についての依頼を受け第55次調査の実施に至ったものである。

調査は4月10日より開始し、重機を使用してI1～II層（盛土～現代以前の水田土層）を全て除去する。掘削土は調査対象地内の安全と調査面積確保のため、全て場外へ搬出した。12日には平面図作成に必要な基準点の設定を行う。遺構検出作業は13日から着手し、調査区内の土層観察と排水を兼ねた側溝を掘る。遺構はIV層上面で土壌2基を発見した。これらは、検出状況の写真撮影後完掘した。17・18日の2日間で平面・断面図を作成する。19日の午前中には、調査区の全景写真撮影と土層注記、午後からは埋め戻しと器材の撤収を行って、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序

調査区内の層序はおおよそ次の7層に大別できる。

I1層：整理に伴う現代の盛土で、厚さは最大約2mである。

I2層：現代の水田耕作土で、厚さは最大約60cmである。

II層：現代以前の水田耕作土で、厚さは20cm前後である。

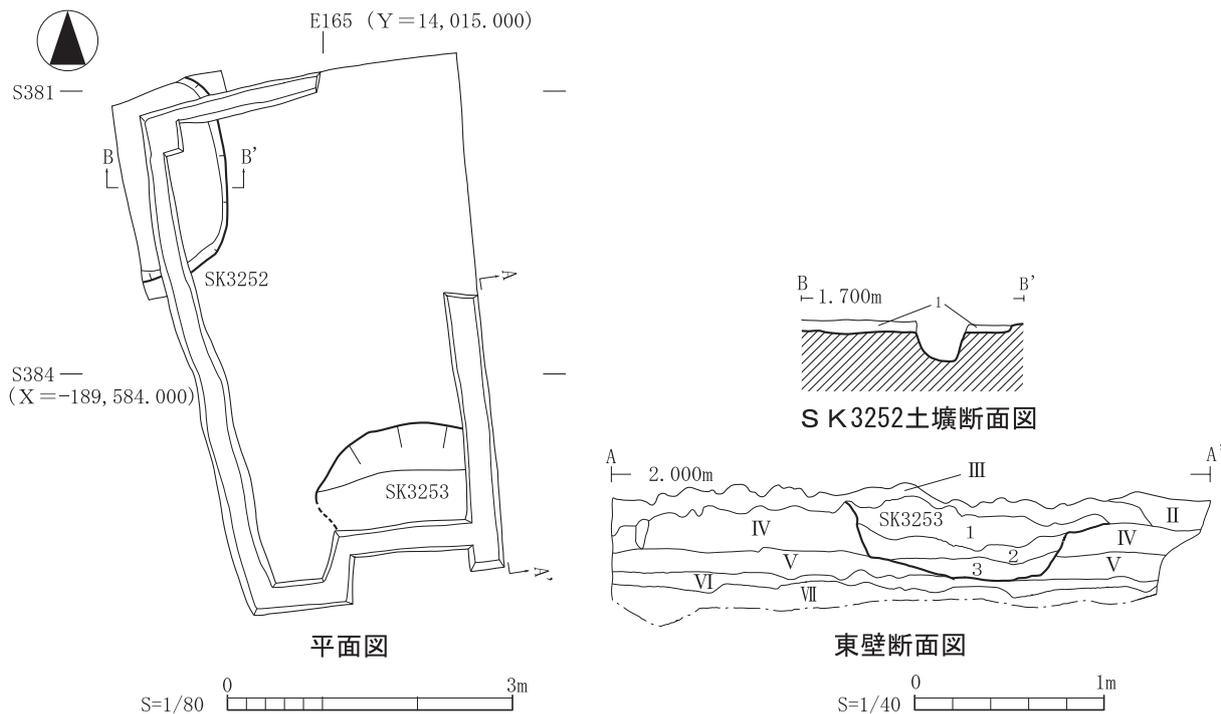
III層：調査区のほぼ全域に堆積する黒褐色粘土で、灰白色火山灰の小粒を含む。

IV層：黄褐色粘土。遺構検出面。厚さは10～25cm。厚さ2～4cmの黒色粘土を間層に含む。

V層：暗灰黄色粘土で、厚さは10～15cm前後である。

VI層：暗オリーブ褐色粘土で、厚さは2～12cm前後である。

VII層：黒褐色粘土である。



第2図 遺構平面図・断面図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、IV層上面で土壇2基を発見した。

S K 3252土壇 (第2図)

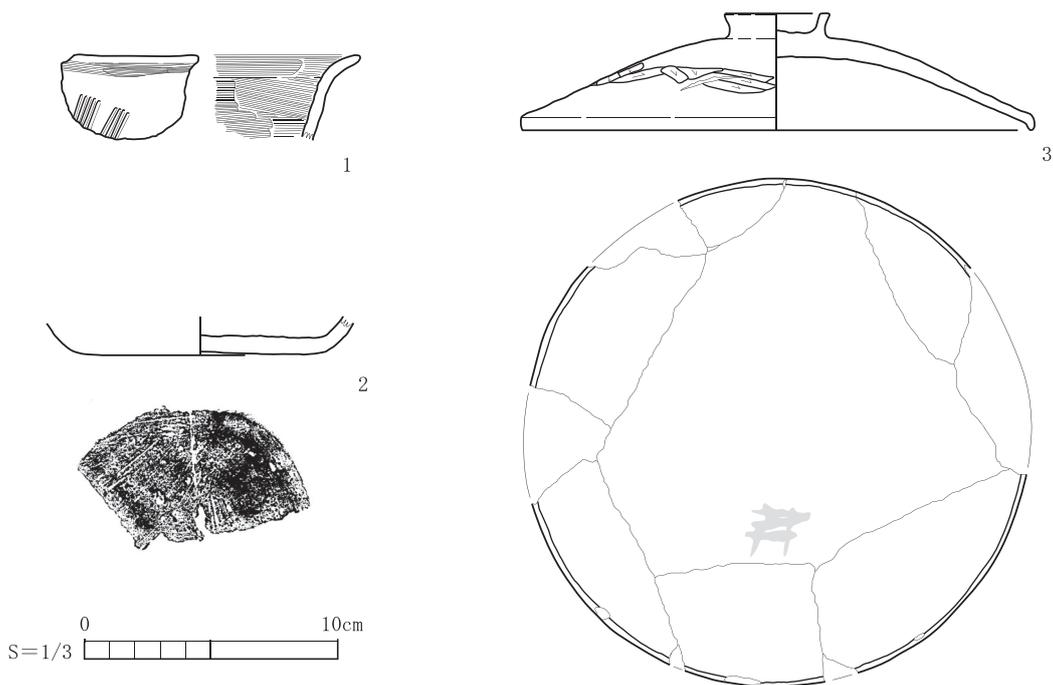
調査区北西隅で発見した。平面形は、遺構の西側は調査区外に延びて行くため不明である。規模は、東西1m以上、南北2.2m以上、深さは4～8cmである。底面は平坦で、壁は底面より垂直気味に立ち上がる。埋土は黄褐色土のブロック、植物遺存体、灰を含んだ黒褐色土である。

遺物は土師器甕 (A類)、須恵器杯 (II類)・蓋が出土している。土師器甕は口縁部2点、体部6点、底部1点の破片資料である。すべて非ロクロ調整であり、体部がハケメ調整されたものがある。須恵器杯は底部の破片資料が1点あり、全体が手持ちヘラケズリされている。須恵器蓋はおおよそ完全な状態で1点出土している。リング状のつまみを有し、天井部はつまみの周囲がやや丸みを帯びているが、それ以外は直線的に外傾し、口縁部は内側に短く折れ曲がっている。天井部の中位には微調整程度の軽い手持ちヘラケズリが施されている。内面に墨書があるが判読できない。

S K 3253土壇 (第2図)

調査区南東隅で発見した。平面形は、遺構の北半部を検出したのみで、全体の様相は不明である。規模は、東壁を参考にすると南北1.4m、東西1.8m以上、深さは最大38cmである。底面は平坦で、壁は底面より垂直気味に立ち上がる。埋土は3層に分けることができる。1～2層は地山ブロック、酸化鉄を含む黒褐色土。3層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土である。

遺物は出土していない。



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 真版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・甕	S K 3252 埋土	ナデ・ハケ目	ナデ					R1	A類
2	須恵器・杯	S K 3252 埋土	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		(8.2) 6/24			R2	II類
3	須恵器・蓋	S K 3252 埋土	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	20.2 20/24		4.65	2	R3	墨書「口」

第3図 S K 3252土壙出土遺物

3. 遺構の年代

今回の調査で発見した土壙2基の内、遺物が出土したS K 3252の年代について検討する。S K 3252からは土師器甕、須恵器杯・蓋が出土しており、土師器甕と須恵器杯は破片資料であるが、須恵器蓋はおおよそ完形である。

須恵器蓋については扁平なものから器高が高いものへ変化するとされているが^(註1)、8世紀前葉から9世紀前葉にかけての県内の窯跡出土資料を中心として、口径/器高(内面)の値を比較すると、概ねその傾向を確認することができる(第4図)。その中で、8世紀前葉から中葉に位置づけられるものが、10~20の領域に中心を置くのに対し、8世紀末から9世紀前葉に位置づけられるものは10未満の領域に分布しており、S K 3252出土の蓋は後者のグループに属している^(註2)。次に天井部の調整についてみると、回転ヘラケズリ調整は8世紀前葉から9世紀前葉にかけての各時期の資料にあり、蓋の一般的な調整手法と見られるが、8世紀前葉から中葉に位置づけられるものの多くが、頂部付近から中ごろまで丁寧に行っているのに対し、8世紀末から9世紀前葉に位置づけられるものの中には頂部付近のみ行っているものが見られる。これを調整の簡略化と評価するならば、本資料のような軽い手持ちヘラケズリ調整は後者のグルー

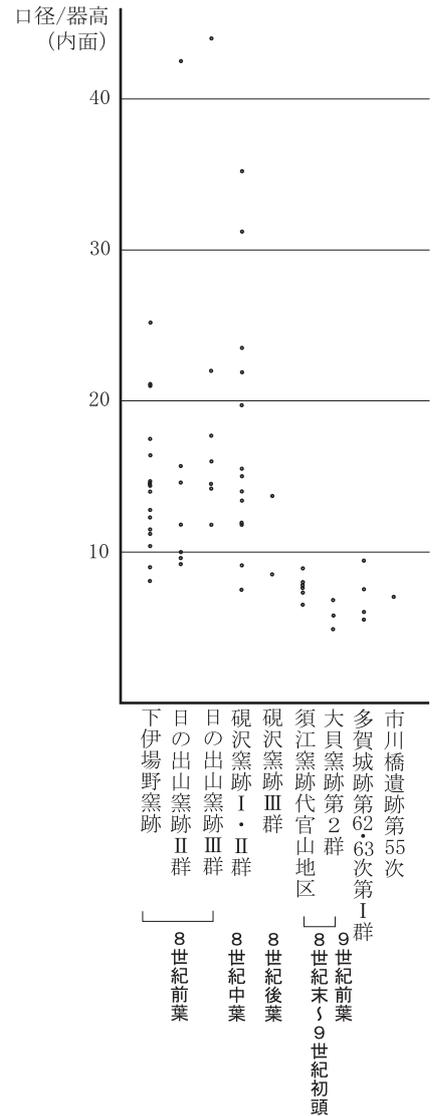
ブに近いと見ることができよう。

須恵器杯は底部全面に手持ちヘラケズリが施され、ロクロからの切り離しは不明である。このような調整を施す杯は日の出山窯跡で生産されており、養老・神亀年間（717～728）以前のものや、養老・神亀年間前後もしくはそれ以降に位置づけられる一群の特徴とされているが^(註3)、天平宝字7年（763）の具注歴と供伴した山王遺跡S D 180 B出土土器にも、少数ながら同様の調整を行った須恵器杯が確認されている^(註4)。また、外面にハケメ調整を施した土師器甕は7世紀から8世紀前半にかけて普遍的に見られるものであるが、延暦9年（790）から同24年（805）の間に収まる市川橋遺跡S X 1351 Cの段階までは確実に存在することを確認している^(註5)。

以上のことから、須恵器蓋は8世紀前葉から中葉に位置づけられるものよりも、8世紀末から9世紀前葉に位置づけられるものに類似した特徴を持つものであり、土師器甕と須恵器杯はそれよりやや古い要素を持つという結果が得られた。この相違が、一方はおおよそ完形、もう一方は破片資料という出土状況に起因する可能性があるが、対象となる資料が量的に少ないという制約もあり、ここではおおよそ8世紀後半を中心とした年代幅の中で捉えておきたい。なお、8世紀代の遺構については、当該区周辺では第18次と27次で大規模な溝跡を発見したのみである。

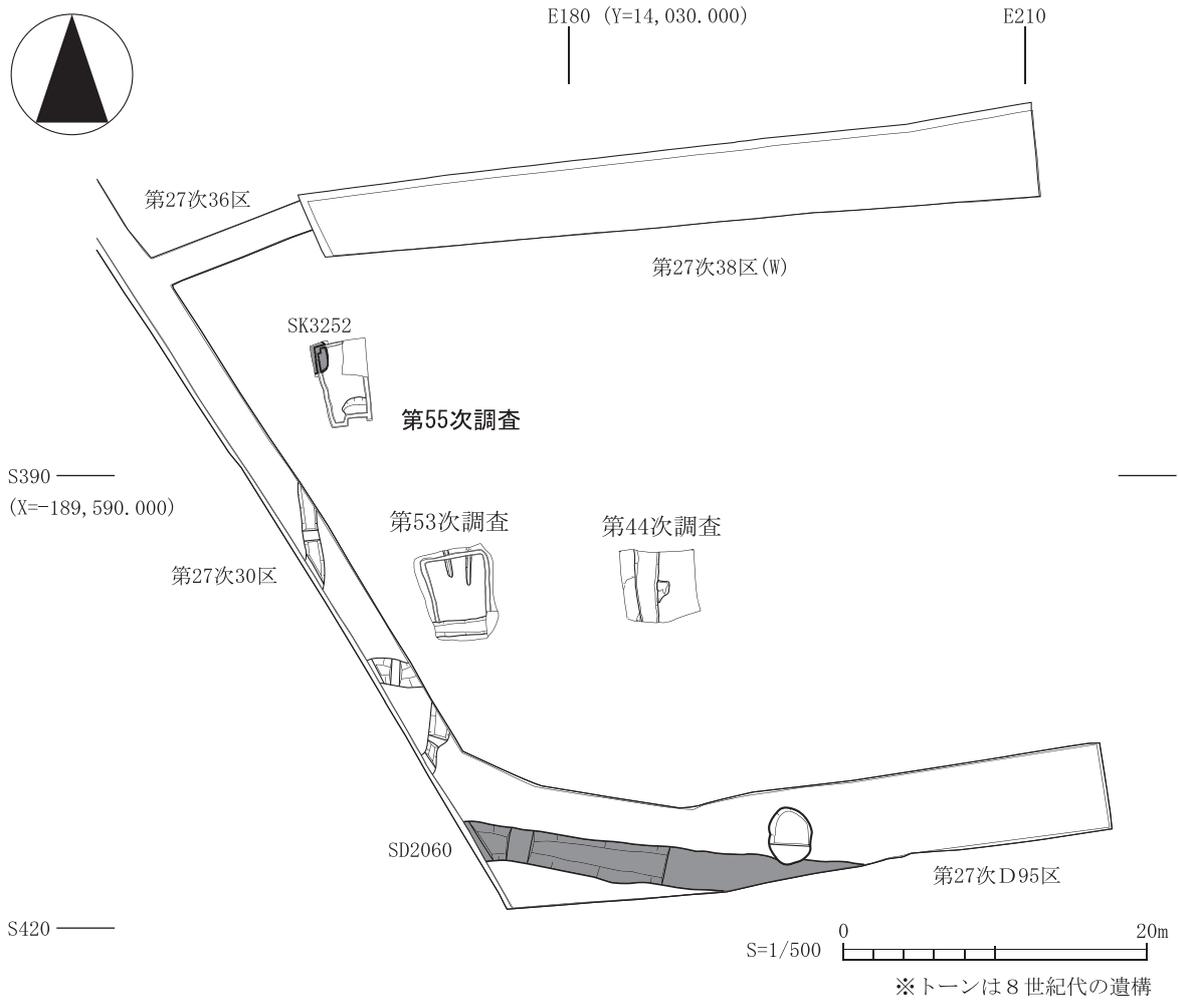
4. まとめ

- (1) 今回の調査では、土壇2基を発見した。
- (2) 年代は、S K 3252については8世紀後半を中心とした年代と考えられる。S K 3253は不明である。



第4図 須恵器蓋口高比分布図

(註1) 村田晃一「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会 1992
(註2) 第4図において分析の対象としたものは下記の窯跡出土資料である。
宮城県多賀城跡調査研究所『下伊場野窯跡群』多賀城関連発掘調査報告書第19冊 1994
宮城県教育委員会『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集 1987
河南町教育委員会『須江窯跡群代官山遺跡-奈良, 平安時代の須恵器生産遺跡-』河南町文化財調査報告書第6集 1993
利府町教育委員会『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書第12集 2004
宮城県多賀城跡調査研究所「II 第62・63次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993
(註3) 色麻町教育委員会『日の出山窯跡群-詳細分布調査とC地点西部の発掘調査-』色麻町文化財調査報告書第1集 1993
(註4) 多賀城市埋蔵文化財調査センター 建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡-第10次発掘調査概報(仙塩道路建設に伴う八幡地区調査)-』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991
(註5) 多賀城市教育委員会 多賀城市城南土地区画整理組合『市川橋遺跡-城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II-』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003



第5図 第55次調査区と周辺地区遺構配置図



1 IV層上面全景 (北より)



2 須恵器蓋 (第3図3 R3)

写真図版

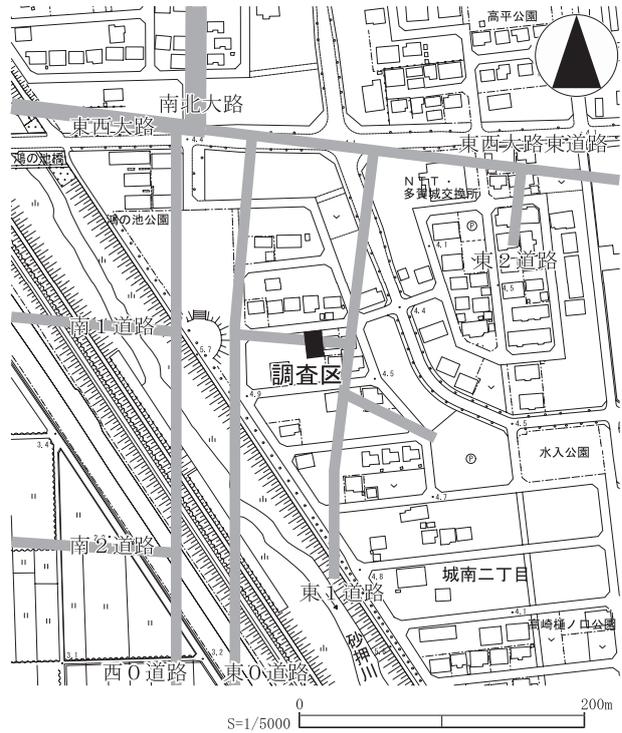
Ⅲ. 市川橋遺跡第56次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、城南地区における個人住宅建設に伴うものである。平成18年2月23日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。その計画では、基礎工事の際に直径20cmのRCパイル杭を、現地表下8.5～9.5mまで39本打ち込む工法を採ることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。その後、平成18年4月27日に、地権者より発掘調査の依頼を受け、5月10日から調査を開始した。

調査は重機によって表土（Ⅰ層）の除去から取りかかった。調査面積と安全を確保するため掘削した土は場外へ搬出した。なお、本調査区の位置

は南1道路にあたり、これまでの調査成果によれば、この道路には複数の時期変遷をもつことと、10世紀前葉以降に道路を北に4～5m位置を移してつくられていることが判明しており、今回の調査でもこの道路跡の存在が想定された。11日より遺構検出作業を開始し、12日にはⅢ層上面で南側溝にあたるSD3257b・cを発見した。また、調査区西側で設けたサブトレンチを観察したところ、Ⅲ層をはさんで複数の時期変遷があることと、道路建設時の整地であるSX3262整地層の存在を確認した。15日にⅢ層上面の遺構検出状況を撮影した後、16日に調査区内に基準点を設置し、実測図作成を行った。17日にⅢ層上面における遺構の完掘状況の写真撮影を行った後、Ⅲ層の除去を開始した。なお、写真撮影にはカラーとモノクロのフィルムを使用した。22日にSX3262整地層上面で遺構検出作業を行ったところ、整地層から環頭大刀柄頭の破片が出土した。23日には、北側溝にあたるSD3258a・bを発見した。24日には道路位置を北に移す以前の南側溝を確認するため、可能な限り調査区を南側へ拡げたところ、SD3257aを発見した。また、同時にSD3259を発見し、これが南側溝のSD3257aと接続していることを確認した。6月1日にはSX3262整地層上面における調査区全体の写真撮影を行った。2日からSX3262整地層を除去したところ、Ⅳ層上面でSD3261と柱穴を発見した。5日にはⅣ層上面において調査区全体の写真撮影を行った。6日に道路跡の断面図を作成した後、器材の撤収を行った。7日に重機による埋め戻しを行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

I1層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは約1.9mである。

I2層：現代の水田耕作土層で、厚さは5～23cmである。

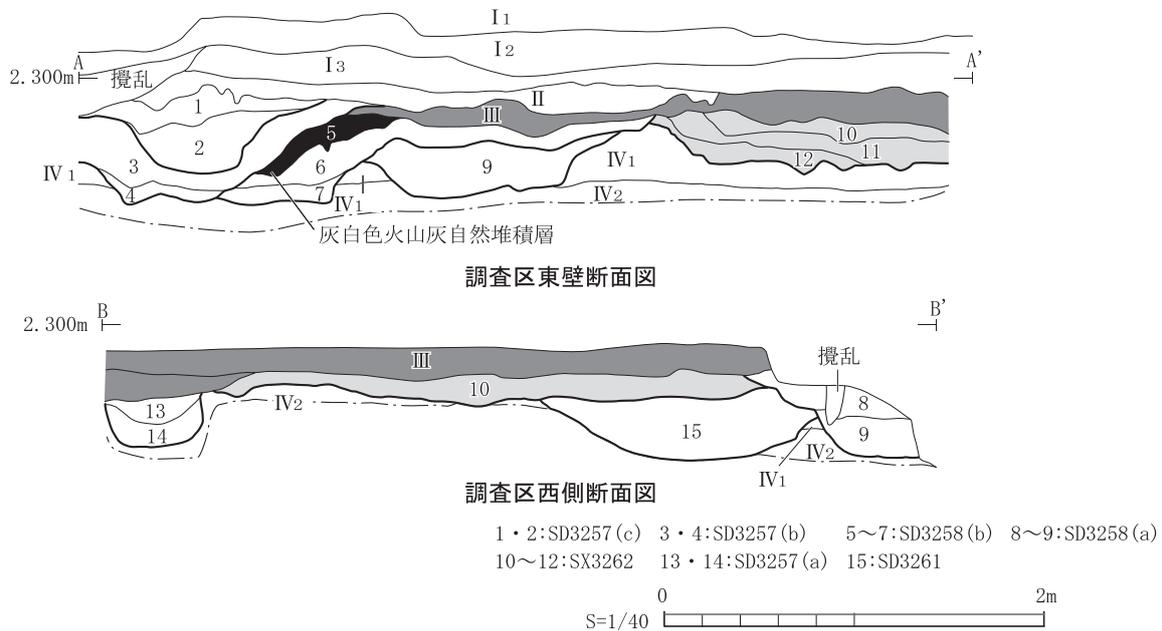
I3層：現代の水田耕作土層で、厚さは6～19cmである。

II層：黒褐色粘土層で、灰白色火山灰をブロック状に少量含む。厚さは4～17cmである。

III層：灰オリーブ色土層で、灰白色火山灰をブロック状に含む。古代の遺構検出面で、厚さは5～18cmである。

IV1層：黄色砂層で、厚さは9～30cmである。この上面が古代の最終遺構検出面となる。

IV2層：にぶい黄橙色粘土である。



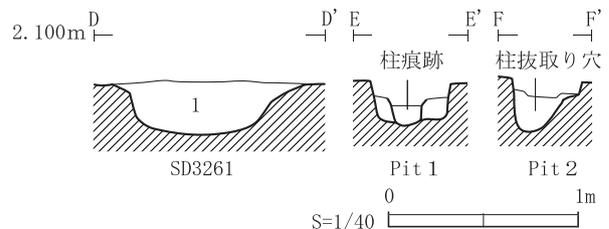
第2図 調査区東壁・S X 3260南1道路断面図

(2) 発見した遺構・遺物

今回の調査ではIII層上面とS X 3262整地層上面にて南1道路を、IV層上面で溝跡と柱穴を発見した。以下、古い順に説明する。

SD3261溝跡 (第2・3・4図)

調査区の中央から南半にかけてのIV層上面で発見した北西から南東方向に延びる溝跡である。S X 3260南1道路及びPit 1と重複しておりこれらより古い。規模は長さ5.1m以上、上幅1m、下幅33～66cm、深さ19～25cmである。方向は西で39度北に偏



第3図 SD3261、Pit 1・2断面図

している。底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒色粘土にIV層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に多く含む。なお、位置関係や、層位的

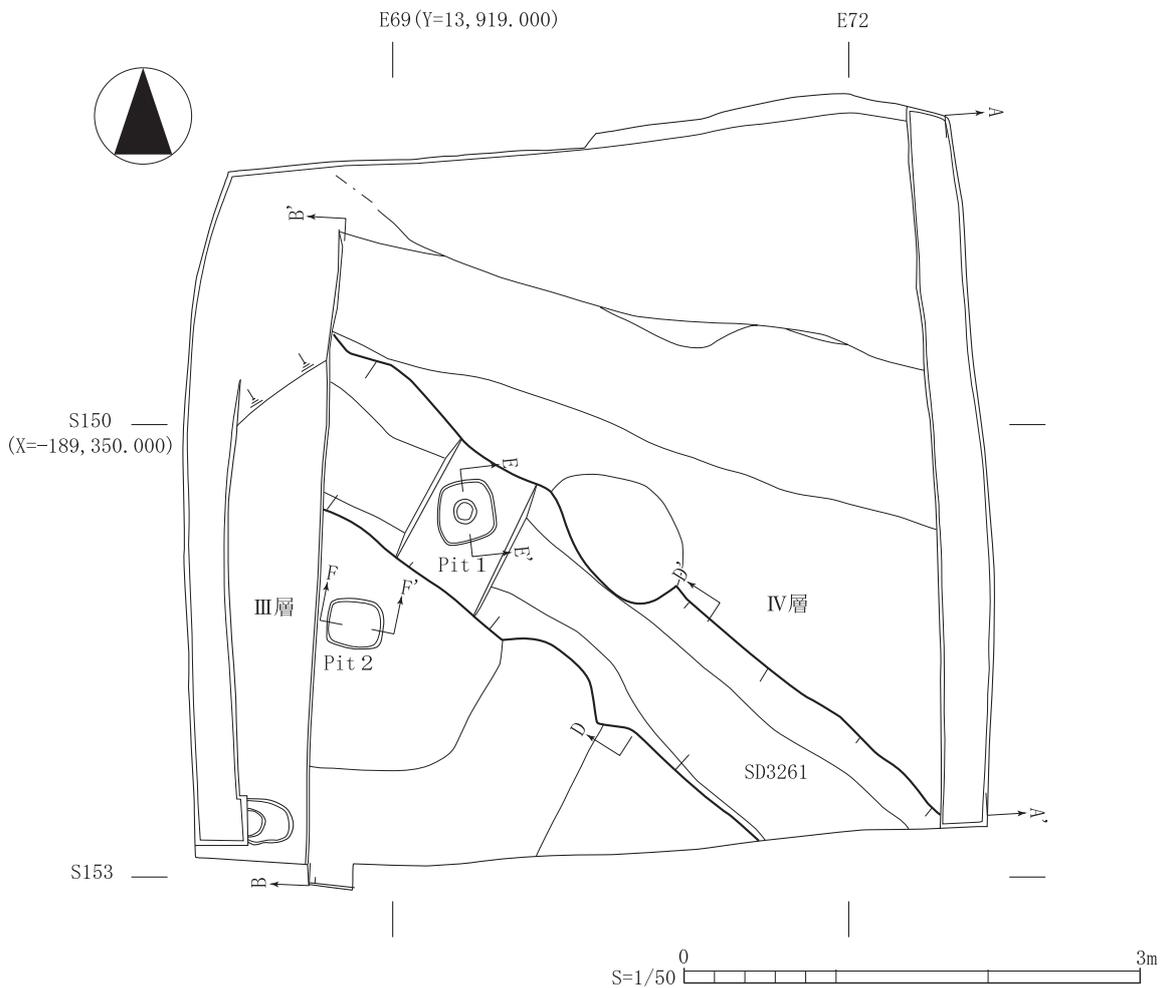
な関係から第28次調査（D102区）のSD2134と同一の可能性が考えられる（第18図）。

遺物は出土していない。

柱穴（第3・4図）

調査区西半のIV層上面で2基の柱穴を発見した。いずれもSX3260南1道路より古く、Pit2はSD3261より新しい。平面形はほぼ方形であり、長辺20~25cm、短辺17~18cmである。Pit1では柱痕跡を確認している。掘り方埋土は黒色粘土にIV層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に多く含み、柱痕跡は黒色粘土である。柱抜き穴は黒色砂質土で、IV層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。

遺物は、Pit1の掘り方から土師器杯（BIVorBV類）・甕、須恵器杯（Ⅲ類）・甕が出土している。



第4図 IV層上面検出遺構

SX3262整地層（第2・5図）

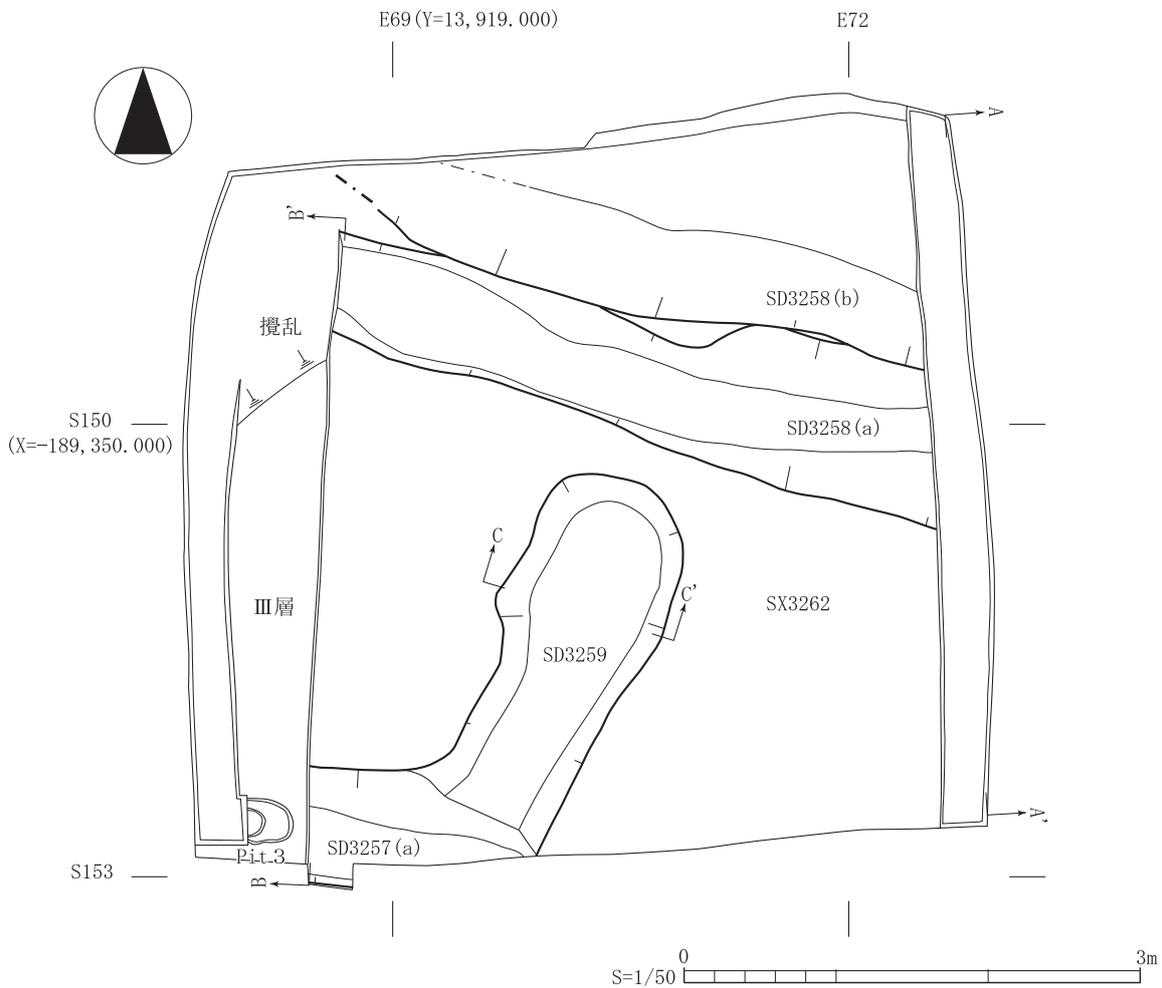
SX3260南1道路建設に伴って道路及びその周辺を整地した層である。SD3257a・3258a・3258b及びSD3259の検出面で、後述する南1道路（A~C期）の路面となっている。厚さは5~29cmで、東側ほど底面が窪んでいるため厚くなっている。埋土は3層に区分できる。いずれも灰色で下層ほど粘性が強く、

それぞれIV層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に含んでいることから、人為的な埋土である。

遺物は土師器杯（BⅡ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ類）・甕、甕形土器、砥石、環頭大刀柄頭が出土している。

S X 3260南 1 道路（第 2・5・10図）

東西方向の道路跡で、長さ約4.4m検出した。東0道路と東1道路との間での南1道路については第28次調査（D102・105区）と第43次調査において発見しており、その調査成果によると、いずれも複数の時期変遷があることと、灰白色火山灰降下以降に道路を北に4～5m位置を移してつくられていることが判明している（第18図）。今回の調査では、S X 3262整地層上面ではSD 3257 aとSD 3258 a・bを、Ⅲ層上面ではSD 3257 b・cをそれぞれ検出しており、重複関係および後述する出土遺物の検討から5時期（A→E期）の変遷として確認できた^(註)。また、位置関係からA～C期が道路を北に移す前の時期、D・



第 5 図 S X 3262整地層上面検出遺構

E期が道路を北に移した後の時期と考えられる。以下、古い順から説明する。

A期：調査区の南側で南側溝であるSD3257aを長さ約2.3m発見した。北側溝についてはB期以降の側溝に壊されているため確認できなかった。SX3262整地層を路面としている。また、この側溝は東側でSD3259と接続している。規模は上幅67cm、深さ28～42cmである。方向は、西で11度北に偏している。底面はほぼ水平で、壁は西側では垂直に、東側ほどやや緩やかになる。埋土は2層に区分できる。1層は黄灰色粘土で下層との層離面に炭化物が薄く堆積しており、2層は黒褐色粘土にIV層の砂を含む。

遺物は、土師器（A類）・甕（B類）、須恵器杯（I・Ⅲ類）・甕が出土している。

B期：調査区の北側で北側溝であるSD3258aを長さ4.4m発見した。南側溝は調整区の外にあると考えられる。SX3262整地層を路面としている。規模については、上幅0.7～1.1m、深さ35～41cmである。方向は西で16度北に偏している。底面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分できる。1層は黒色粘土で砂を含んでおり、2層は黒褐色砂質土でIV層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に多く含んでいる。

遺物は、土師器杯（BI・BII・BIVorBV類）・甕（A・B類）・高台付杯、須恵器杯（Ia・IIa・IIb・Ⅲ・V類）・甕・高台付杯・瓶、平瓦（IIC類-a）、丸瓦（II類）、竈形土器、砥石が出土している。

C期：調査区の北側で北側溝であるSD3258bを長さ3.7m発見した。南側溝は調査区の外にあると考えられる。北側をSD3257bに壊されているため、上幅等は不明である。SX3262整地層を路面としている。規模については、深さ40～46cm、方向は西で16度北に偏している。底面はほぼ水平で、壁は東側ほど緩く立ち上がっており、後述する2層は調査区の東壁では南へオーバーフローしている。埋土は3層に区分でき、1層は灰白色火山灰の自然堆積層、2層は黒褐色砂質土、3層は黄灰色土でIV層をブロック状に多く含んでいる。

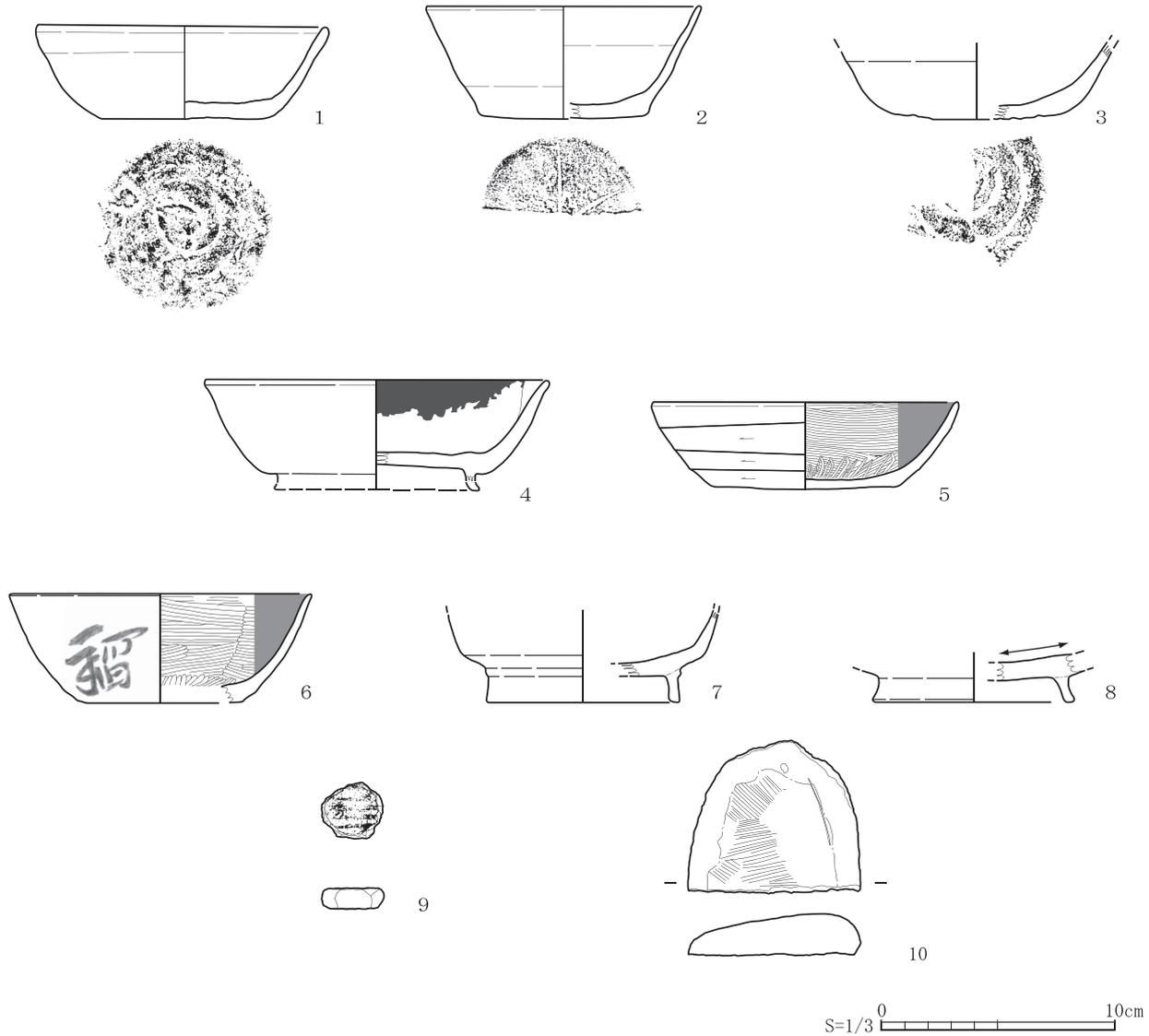
遺物は土師器杯（BI・BII・BIII・BV類）・甕（A類、B類）、須恵器杯（Ⅲ・V類）・高台付杯・蓋・甕・瓶、須恵系土器杯、平瓦（IIC類）、製塩土器が出土している。

D期：調査区の北側で南側溝であるSD3257bを長さ4.1m発見した。北側溝は調査区の外にあると考えられる。北側の大部分は調査区の外にあるため、上幅等は不明である。Ⅲ層を路面としている。規模については、深さ43～52cm、方向は西で7度北に偏している。底面はほぼ水平で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は2層に区分できる。1層は灰黄色粘質土で砂を多く含み、灰白色火山灰をブロック状に少量含む。2層は黄灰色粘質土である。

遺物は、土師器杯（BI・BV類）・甕（B類）、須恵器杯（I・Ⅲ・V・IVorV類）・甕・高台付杯・蓋・瓶、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦（IA類-a）、丸瓦（II類）、竈形土器、製塩土器、砥石が出土している。

E期：調査区北側で南側溝であるSD3257cを長さ3.6m発見した。北側溝は調査区の外にあると考えられる。Ⅲ層を路面としている。規模については、上幅80～86cm、深さ31～40cm、方向は西で11度北に偏している。底面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に区分でき、1層は黒色粘土、2層は黄灰色粘土で砂を少量含んでいる。

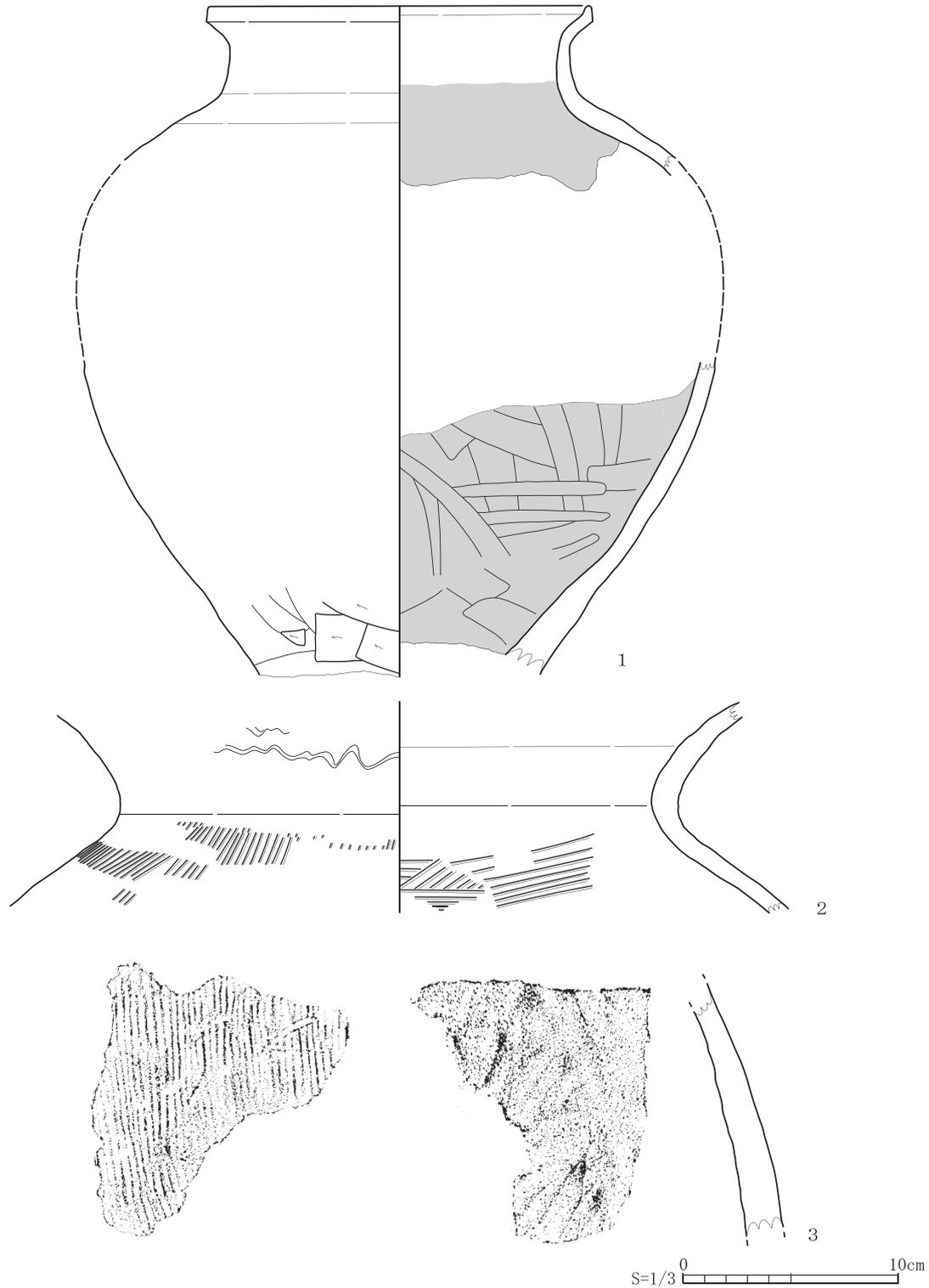
（註）ここで記載する5時期（A→E期）の変遷は第56次調査での変遷であり、過去に報告した時期（A→E期）とは必ずしも一致したものではない。



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・杯	SD3257a 1-1	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.3) 12/24	7.3 24/24	4.0	3-2	R1	Ⅲ類
2	須恵器・杯	SD3257a 1-1	ロクロナデ、底部：ヘラ切り・ヘラガキ	ロクロナデ	(11.3) 3/24	(7.25) 12/24	5.0		R2	Ⅰ類
3	須恵器・杯	SD3259 1-1	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	-	(8.0) 5/24	-		R124	Ⅲ類
4	転用碗	SD3259 1-1	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ・墨付着	(14.8) 4/24	(8.6) 8/24	3.7		R4	須恵器・高台付杯転用
5	土師器・杯	SD3259 1-1	ロクロナデ→回転ヘラケズリ、底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.0) 12/24	(8.1) 16/24	3.8	3-1	R7	BⅠ類
6	土師器・杯	SD3258a 1-1	ロクロナデ、底部：糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.0) 8/24	(6.4) 4/24	4.7	3-5-1	R8	BⅣorBⅤ類 墨書「稻」
7	須恵器・高台付杯	SD3258a 1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(8.4) 3/24	-		R126	
8	転用碗	SD3258a 1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(8.7) 6/24	-		R99	須恵器・高台付杯転用
9	土器片製円板	SD3258a 1-1	最大幅：2.6 厚さ：0.9						R97	須恵器・甕転用
10	砥石	SD3258a 1-1	長さ：8.7 幅：7.5 厚さ：1.8						R44	

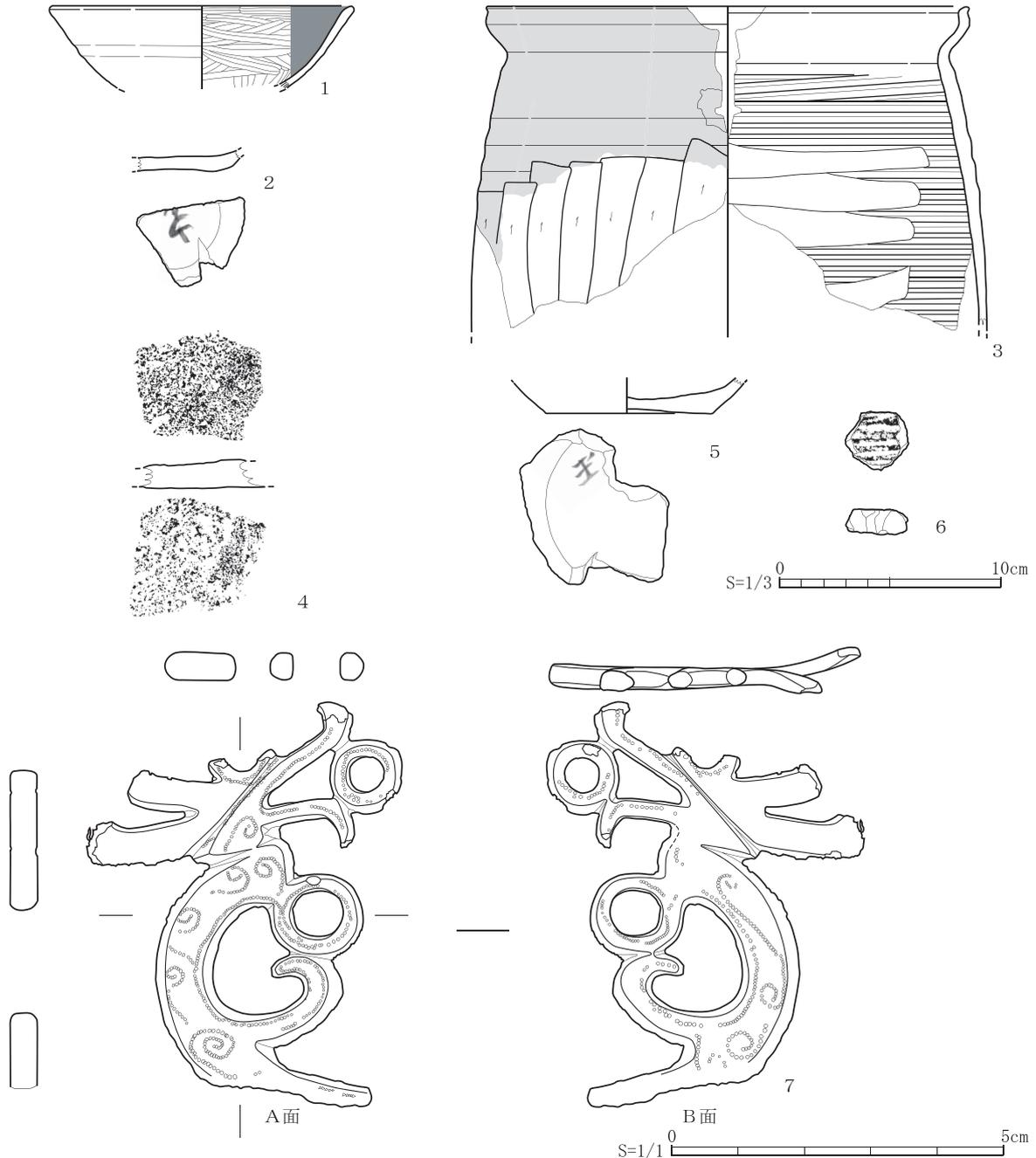
第7図 S D 3257 a ・ 3259 ・ 3258 a 出土遺物



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・甕	SD3259 1-1	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ→ナデ	(17.5) 1/24	-	-		R211	B類 内面に煤付着
2	須恵器・甕	SD3259 1-1	平行叩き→ロクロナデ・単線 波状文	平行叩き→ナデ・ロ クロナデ	-	-	-		R49	
3	甕形土器	SD3259 1-1	平行叩き→ナデ	ナデ	-	-	-		R38	

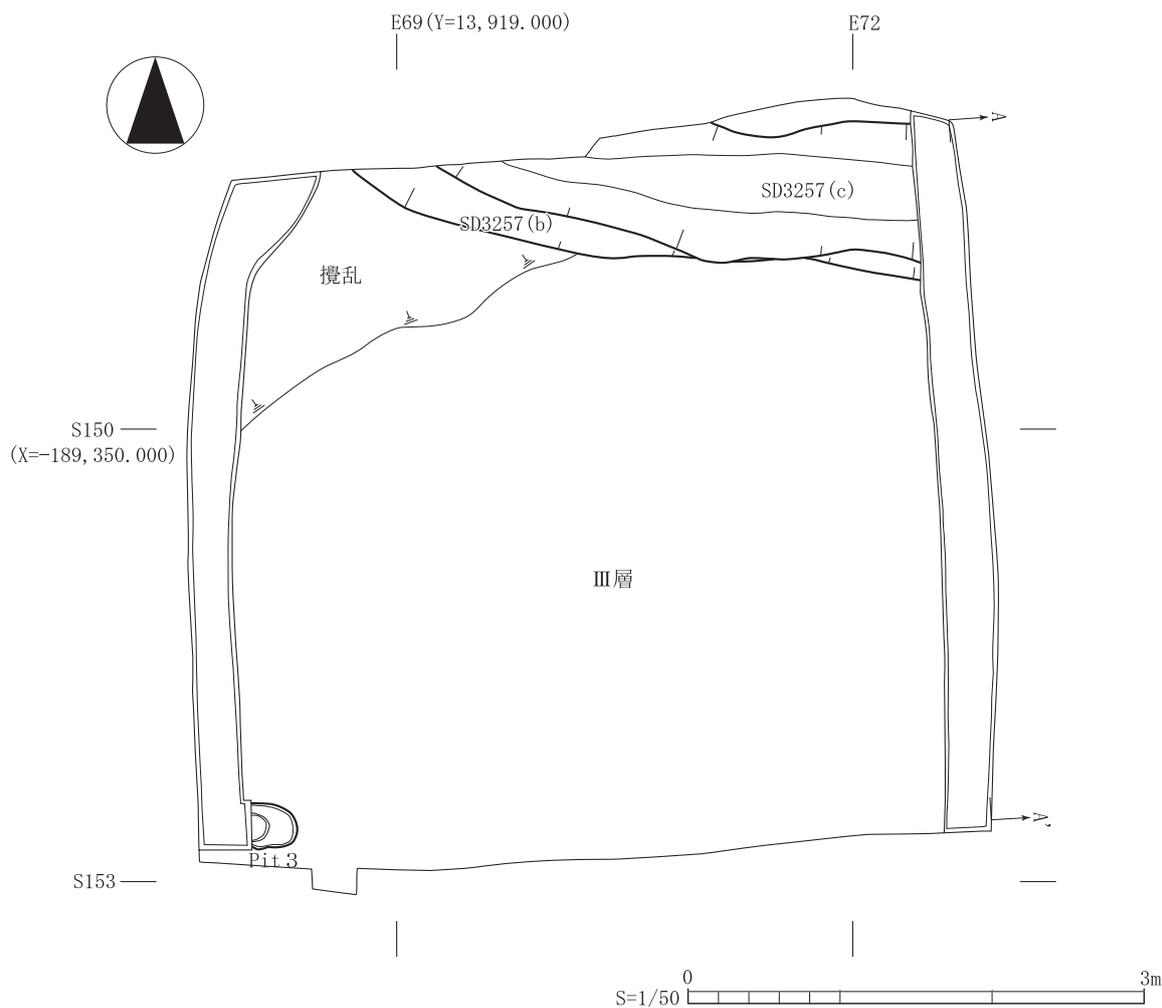
第8図 S D 3259出土遺物



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 真版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	SD3258b 1-1	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.7) 6/24	-	-		R51	B類
2	須恵器・杯	SD3258b 1-1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	-	-	-	3-5-3	R11	V類 墨書
3	土師器・甕	SD3258b 1-1	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ・スス付着	回転刷毛目→ロクロナデ・ナデ	(21.6) 10/24	-	-		R191	B類
4	製塩土器	SD3258b 1-1	-	-	-	-	-		R93	
5	須恵器・杯	SX3262	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	-	(8.4) 6/24	-	3-5-6	R10	Ⅲ類 墨書「玉」
6	土器片製 円板	SX3262	最大幅：2.8 厚さ：1.2						R91	須恵器・甕転 用
7	環頭大刀	SX3262	A・B両面に渦巻状などの文様		縦：6.15cm、横：4.7cm、 厚さ：0.35cm			4-6-7・ 8	R1	双竜式 柄頭のみ

第9図 S D 3258 b ・ S X 3262出土遺物



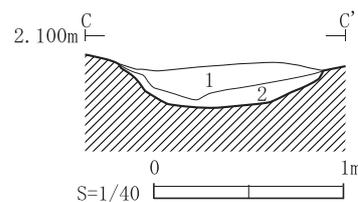
第10図 III層上面検出遺構

遺物は、土師器杯（B I・B V類）・甕（A・B類）・高台付杯、須恵器杯（Ⅲ・V類）・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯・耳皿、灰釉陶器椀、平瓦（ⅡA・ⅡB・ⅡB-a・ⅡC類）、丸瓦（Ⅱ類）、竈形土器、製塩土器、砥石が出土している。

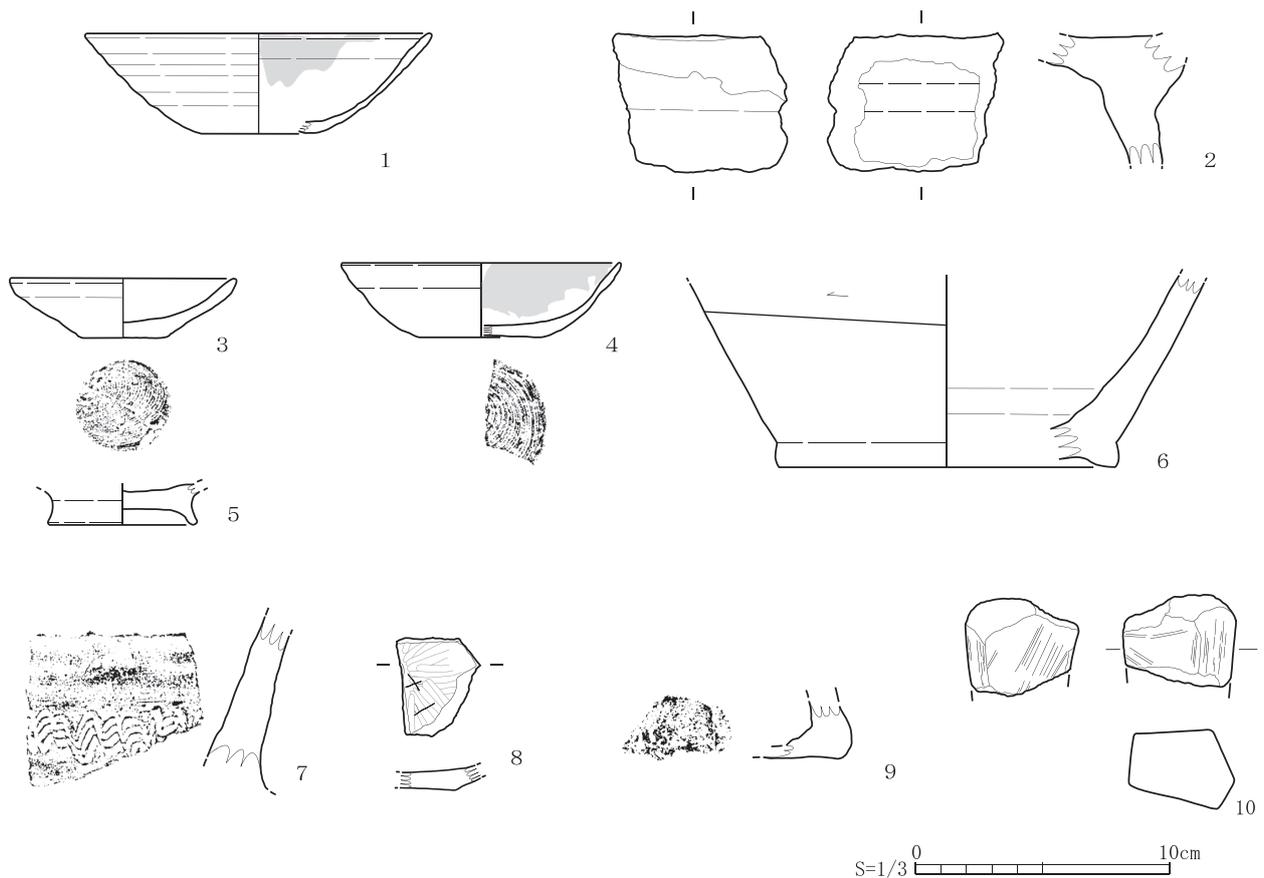
S D 3259溝跡（第5・6図）

S X 3262整地層上面で発見したS X 3260南1道路の路面を横切るように延びる溝跡である。南側でS D 3257 aと接続しているが、その他の道路側溝とは接続しない。規模は、長さ2.5m、上幅0.8~1.1m、下幅48~74cm、深さ9~18cmである。方向は北で27度東に偏している。埋土は2層に区分でき、1層は黒色粘土で炭化物を少量含む。2層は黒褐色粘土でⅣ層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に少量含む。

遺物は、土師器杯（B I類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕・高台付杯・瓶、丸瓦（Ⅱ類）、竈形土器が出土している。



第6図 S D 3259断面図



単位：cm

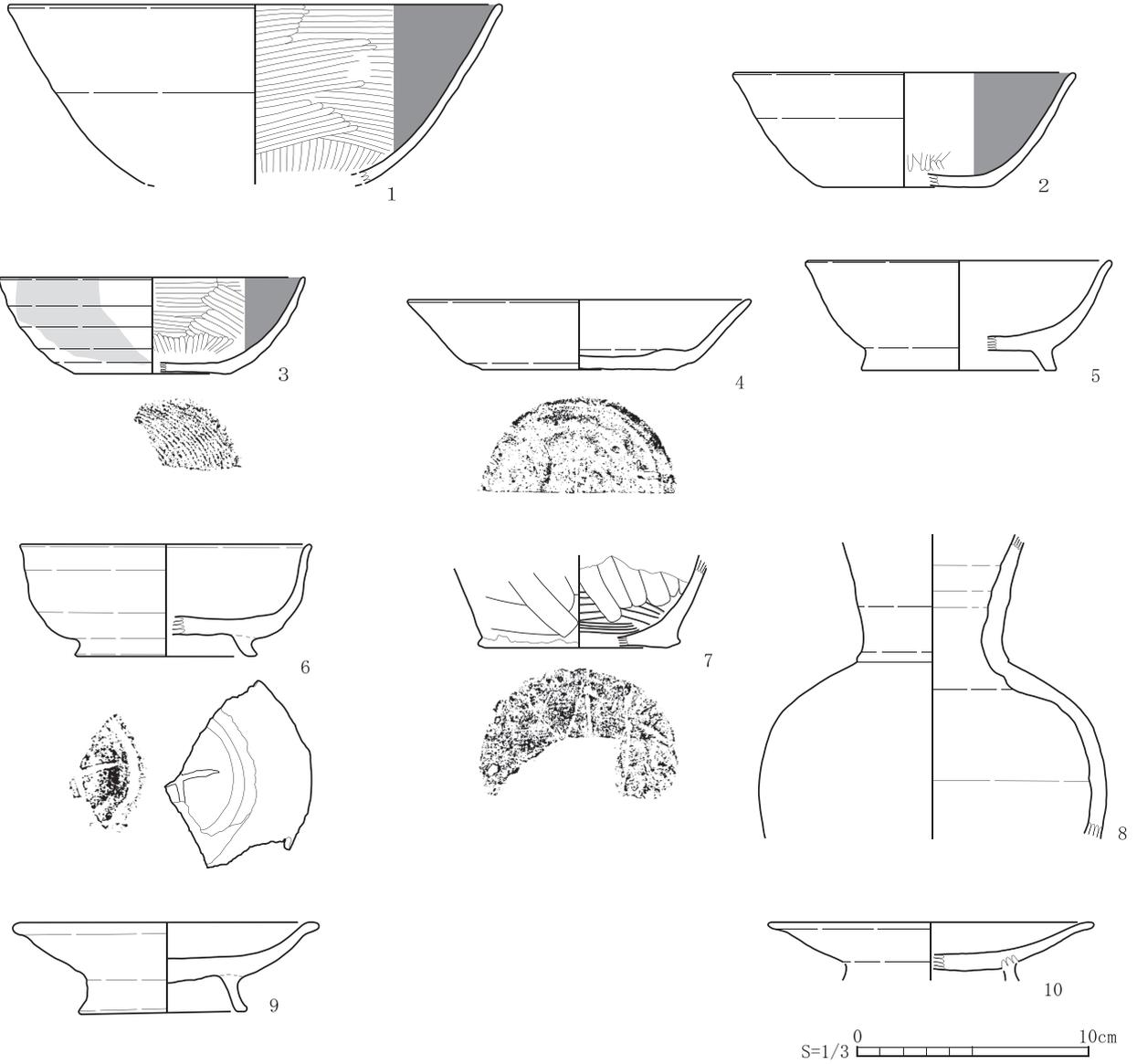
番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・杯	SD3257b 1-2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ・油煙付着	(13.6) 16/24	(4.6) 4/24	4.0		R3	V類
2	須恵系土器 ・台付鉢	SD3257b 1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-		R31	
3	須恵系土器 ・杯	SD3257c 1-1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(8.9) 14/24	3.4 24/24	2.4	3-3	R5	
4	須恵系土器 ・杯	SD3257c 1-1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ・油煙付着	(11.1) 4/24	(4.8) 8/24	3.0		R43	
5	須恵系土器 ・高台付杯	SD3257c 1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5.9 24/24	-		R60	
6	須恵器・瓶	SD3257c 1-1	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	(13.2) 5/12	-		R59	
7	須恵器・甕	SD3257c 1-1	ロクロナデ・複線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R58	
8	土師器・杯	SD3257c 1-1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	-	-	-		R12	BV類 刻書「X」
9	製塩土器	SD3257c 1-1	-	-	-	-	-		R61	
10	砥石	SD3257c 1-1	長さ：-、幅：4.4cm、厚さ、 3.1cm						R63	

第11図 S D 3257 b ・ 3257 c 出土遺物

柱穴（第10図）

調査区の南西隅のⅢ層上面でPit 3を発見した。調査範囲も狭く、またⅢ層上面で発見した柱穴がこの1基のみのため、建物等として確認することができなかった。平面形は楕円形であり、短辺18cmである。柱は抜き取られており、埋土は黒色粘質土に灰白色火山灰をブロック状に少量含む。掘り方埋土は、暗灰黄色土で灰白色火山灰をブロック状に少量含む。

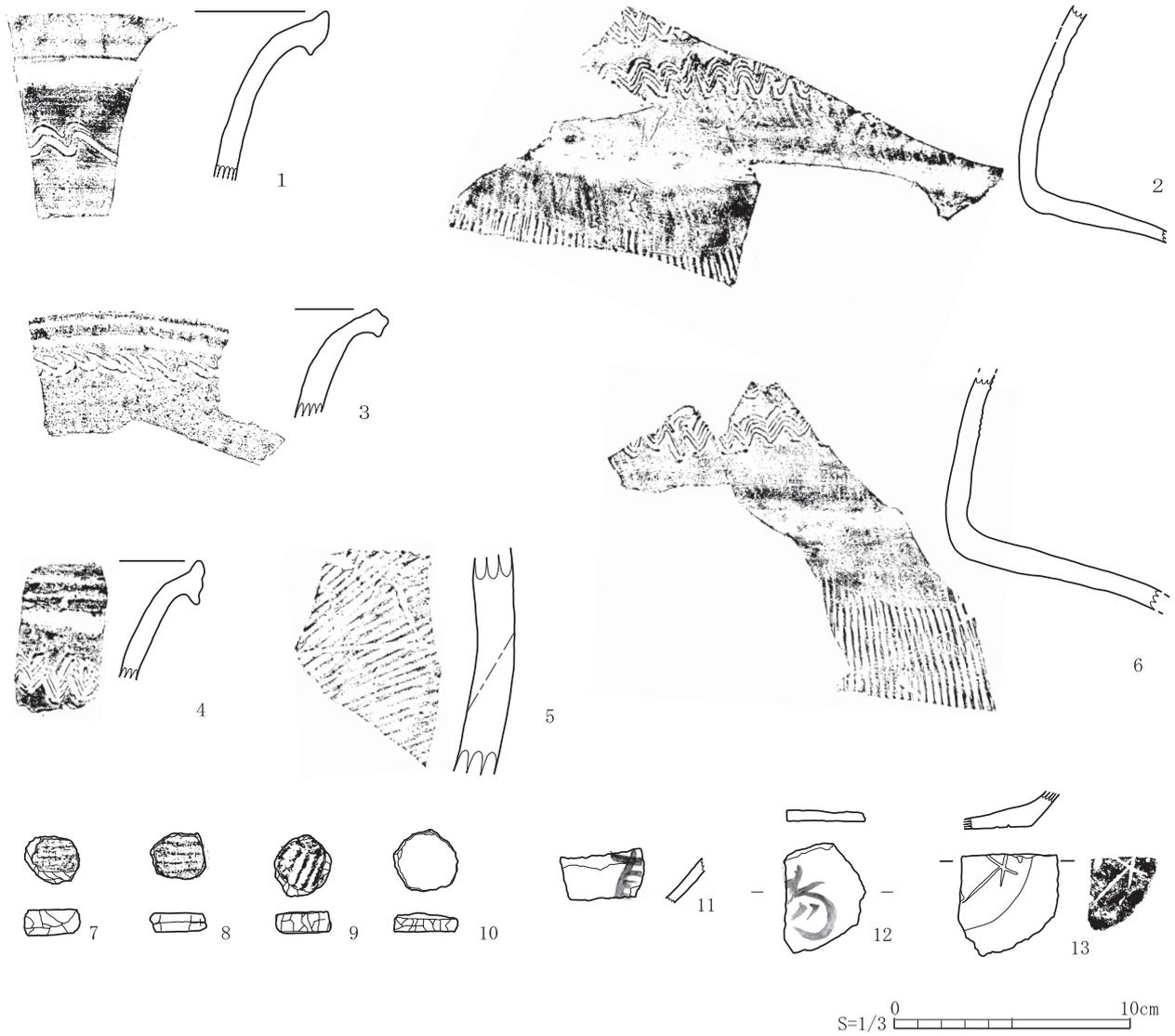
遺物は出土していない。



単位：cm

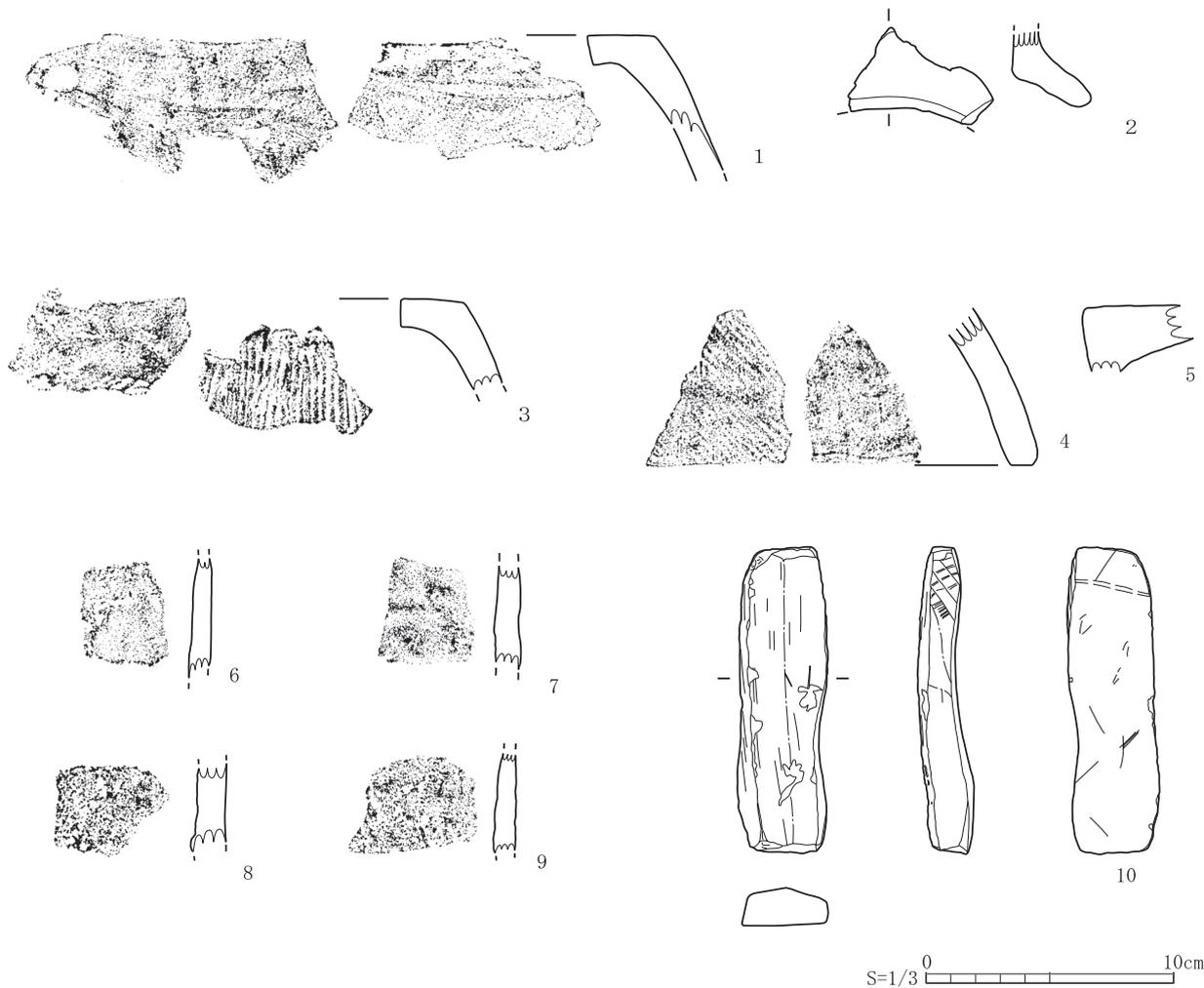
番号	種類	層序	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	(11.2) 6/24	-	-		R102	B類
2	土師器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ヘラミガキ・黒色処理	(14.8) 4/24	(7.6) 8/24	-		R144	BⅢ類
3	土師器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ・付着物あり、底部：糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.1) 2/24	(6.8) 8/24	-		R103	BⅣor BⅤ類
4	須恵器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.0) 6/24	(8.4) 12/24	-		R89	Ⅲ類
5	須恵器・高台付杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.3) 2/24	(8.5) 10/24	4.8		R164	
6	須恵器・高台付杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.8) 2/24	(8.0) 6/24	5.0		R13	ヘラガキ「×」
7	土師器・甕	Ⅲ層	ナデ、底部：木葉痕	ハゲ→ナデ	-	(8.7) 14/24	-		R140	A類
8	須恵器・長頸瓶	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-		R34	
9	須恵系土器・高台付杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.7) 14/24	(7.2) 12/24	4.0	3-4	R6	
10	須恵系土器・高台付杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.2) 2/24	-	-		R145	

第12図 Ⅲ層出土遺物



番号	種類	層序	特 徴		口 径 残存率	底 径 残存率	器 高	写 真 版	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	須恵器・甕	Ⅲ層	ロクロナデ、複線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R146	
2	須恵器・甕	Ⅲ層	平行叩き→ロクロナデ・複線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R48	
3	須恵器・甕	Ⅲ層	ロクロナデ・単線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R161	
4	須恵器・甕	Ⅲ層	ロクロナデ・複線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R104	
5	須恵器・甕	Ⅲ層	平行叩き→ナデ	ナデ→カキ目	-	-	-		R14	体部外面にヘラガキ
6	須恵器・甕	Ⅲ層	平行叩き→ロクロナデ・複線波状文	ロクロナデ	-	-	-		R47	
7	土器片製 円板	I層	最大幅：2.0 厚さ：1.1						R192	須恵器・甕転用
8	土器片製 円板	Ⅲ層	最大幅：2.4 厚さ：0.8						R127	須恵器・甕転用
9	土器片製 円板	Ⅲ層	最大幅：2.7 厚さ：0.9						R188	須恵器・甕転用
10	土器片製 円板	I層	最大幅：2.7 厚さ：0.8						R174	土師器・杯(B I類)転用
11	須恵器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	3-5-11	R32	墨書
12	須恵器・杯	Ⅲ層	回転糸切り		-	-	-	3-5-5	R9	V類 墨書「物」
13	土師器・甕	Ⅲ層	ナデ	ヘラミガキ	-	-	-	3-5-2	R36	ヘラガキ「大」

第13図 I・Ⅲ層出土遺物



S=1/3 0 10cm

単位：cm

番号	種類	層序	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	竈形土器	Ⅲ層	ナデ	ナデ	-	-	-		R158	
2	竈形土器	I層	ナデ	ナデ	-	-	-		R175	
3	竈形土器	Ⅲ層	平行叩き→ヘラケズリ	刷毛目	-	-	-		R131	
4	竈形土器	Ⅲ層	平行叩き→ナデ	ナデ	-	-	-		R130	
5	竈形土器	Ⅲ層	ヘラケズリ	刷毛目	-	-	-		R105	
6	製塩土器	Ⅲ層	-	-	-	-	-		R114	
7	製塩土器	Ⅲ層	-	-	-	-	-		R106	
8	製塩土器	Ⅲ層	-	-	-	-	-		R75	
9	製塩土器	I層	-	-	-	-	-		R166	
10	砥石	I層	長さ：12.5cm、幅：3.5cm、厚さ：1.9cm					4-9	R16	

第14図 I・Ⅲ層出土遺物

堆積層出土遺物

I～Ⅲ層から土師器杯（B類）・甕（A・B類）・高台付杯、須恵器杯・甕・高台付杯・蓋・瓶、須恵系土器杯・高台付杯・双耳杯、灰釉陶器碗、平瓦、丸瓦、竈形土器、製塩土器、砥石が出土している。なお、全て破片であるが竈形土器が15点、製塩土器が81点と多く出土している。

3. 考察

今回の調査では、南1道路、溝跡、柱穴を発見した。南1道路については、第28次調査（D102・105区）と第43次調査において検出しており、5時期（A→E期）の変遷として捉えられている。ここでは本調査

区の成果と周辺の調査成果と対比させながら、南1道路の変遷と年代について考えてみる。

また、SX3262整地層から出土した環頭大刀柄頭は断片であるが、この地域における古墳時代後期の情勢を考える際に重要な資料と考えられることから、形態や年代等について、検討を加えることとする。

(1) 南1道路の変遷と年代について

①調査区の層序と周辺の調査区との対応関係

はじめに、各調査区の層序について対応関係を整理する。

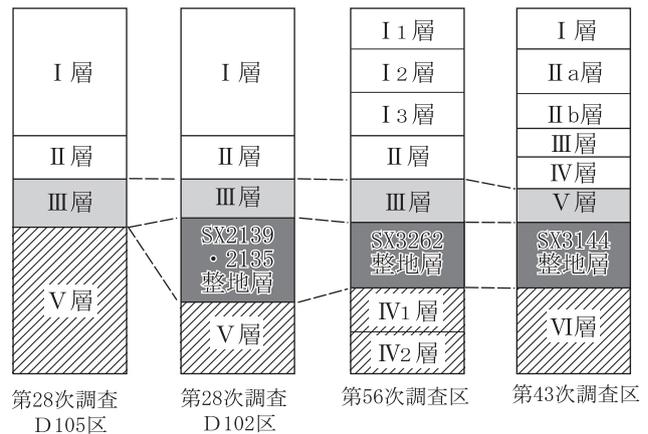
第56次調査では、現代の盛土と水田耕作土の下にⅢ層・SX3262整地層・Ⅳ層があり、それぞれの上面が遺構検出面となっている。Ⅲ層は、灰白色火山灰が自然堆積する側溝を直接覆っており、出土遺物の中に須恵系土器を含んでいることから、10世紀前葉以降に堆積したものである。SX3262整地層はⅣ層に起因する黄色砂やにぶい黄橙色粘土をブロック状に含むものであり、Ⅳ層は河川の沖積作用によって形成された自然堆積層で、その上面が古代の最終遺構検出面（地山）となっている。

本調査区と第28・43次調査区の層序の関係は、南1道路側溝と灰白色火山灰とを媒介とすることによっておおよそ整理することが可能である。第28次調査（D102・105区）のⅢ層と第43次調査のⅤ層はともに黒～黒褐色土で灰白色火山灰をブロック状に含んでいることから、10世紀前葉以降のものであり、この上面が最も新しい時期の南1道路検出面となっている。第28次（D102区）のSX2139整地層は古代の基盤層である砂層上にあり、最も古い側溝の検出面となっている。したがって、第28次（D102区）のⅡ・Ⅲ層と整地層は本調査区のそれと対応関係にあると見ることができる。第28次（D102区）の北側で検出したSX2135整地層は、南1道路の最も古い時期の側溝と直接的な重複関係はないが、層位的にはⅢ層とⅤ層との間に存在していることや、SD3262と同一の溝であるSD2134を覆っていることから、SX2139と同一の整地層と考えられる。また、第43次調査においては、南1道路との関係は不明であるが、Ⅴ層とⅥ層の間にSX3144整地層があり、これも一連の整地層の可能性が考えられる（第18図）。第28次調査（D105区）では、明確に整地層は確認していない^(註)。古代の最終遺構検出面（地山）となっているものは、それぞれ第28次調査（D102・105区）のⅤ層、第43次調査のⅥ層、第56次調査のⅣ層である。これらはいずれも河川の沖積作用によって形成されたものである。

以上、各調査区の層序の対応関係をまとめると第15図のとおりである。これをみると、第28次調査（D105区）において整地層を確認できなかった点を除けば、各調査区においておおよそ同様であることが窺われる。

②遺構の年代

ここでは前項の検討結果を踏まえて、出土遺物を中心に遺構の年代を考えていきたい。



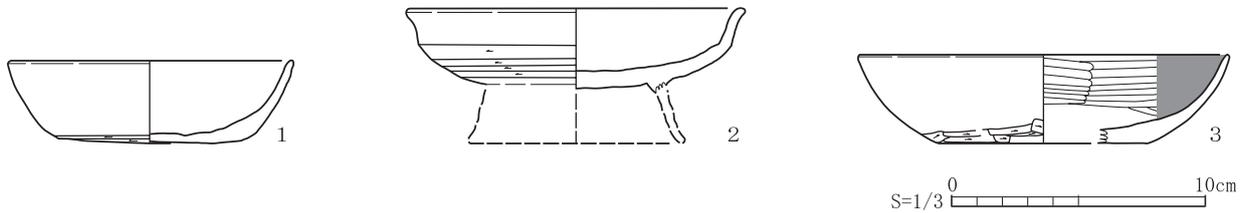
第15図 層序対応関係模式図

(註) 第28次調査（D105区）の南1道路南側に、Ⅴ層に起因する土をブロック状に含んでいる層が確認できるが、Ⅲ層や南1道路との重複関係がないことから、これら整地層と同一かどうか判断できなかった。

a. 土器群の概要

S D 3257 a・3259出土土器：これらの遺構からは、今回の調査の中では比較的まとまった数の土師器杯・甕、須恵器杯・甕・高台付杯などが出土している。これらは接続する溝跡であることから、一括して取り扱うこととする。土師器杯は9点出土しており、全てB類である。これらのうち、底部の切り離しや再調整が明確なものとしては、B I類が1点（第7図5）あり、底径/口径比は0.62で、器高/口径比は0.29である。内面のヘラミガキは横方向である。甕は74点出土しており、摩滅した3点を除き全てB類である。その内外部外面に叩き成形痕を残すものが1点、内面に回転刷毛目を施すものが3点ある。須恵器杯は30点出土している。底部の切り離しや再調整が確認できるものが7点あり、全てⅢ類である。全体の器形がわかるものは2点あり（第7図1・2）、底径/口径比は0.59～0.64で、器高/口径比は0.33～0.44である。

S X 3262整地層出土土器：今回ここから出土した遺物には器形がわかるような良好な資料がないことから、第28次調査のS X 2135・2139整地層出土遺物を参考資料として検討する（第16図）。これらの層からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕・高台付杯、丸瓦、竈形土器、砥石が出土している。土師器杯は40点出土しており、摩滅した2点を除き全てB類である。底部の切り離しや再調整が明確なものでは、B II類が6点出土している。器形がわかるものは1点あり（第16図3）、底径/口径比が0.58、器高/口径比は0.24である。ヘラミガキは内面体部が横方向、底部が一定方向である。この他ロクロ調整の有無を識別できないものが1点あり、手持ちヘラケズリが施されている。甕は98点出土しており、A類が3点、B類が95点である。須恵器杯は39点出土しており、底部の切り離しや再調整が確認できるものとしてI類が4点、Ⅲ類が12点、V類が1点ある。器形がわかるものは1点あり（第16図1）、底径/口径比が0.64で、器高/口径比が0.29である。



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・杯	SX2139	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	11.3 15/24	7.25 13/24	3.3		R7918	Ⅱa類
2	須恵器・高台付杯	SX2139	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.4) 10/24	-	-		R7925	
3	土師器・杯	SX2135	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、底部：ヘラ切り	ヘラミガキ・黒色処理	(14.8) 3/24	(8.3) 8/24	3.6		R7923	BⅡa類

第16図 S X 2135・2139出土遺物

S D 3258 a 出土土器：土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕・高台付杯・瓶、平瓦、丸瓦、竈形土器、砥石が出土している。土師器杯は11点出土しており、摩滅している2点を除いて全てB類である。底部の切り離しが明確なものは3点あり、B I類が1点、B II類が1点、B IVもしくはB V類が1点である。器形が明らかなのは1点あり（第7図6）、底径/口径比は0.49、器高/口径比は0.36である。甕は43点出土しており、A類は1点で他は全てB類である。須恵器杯は29点出土している。底部の切り離しが確認できるものでは、I類が1点、II類が4点、Ⅲ類が6点、V類が3点出土している。

以上、これらの遺構から出土した遺物を集計したものが第1表である。

		第56次調査			第28次調査		
		SD3258 a	SD3257 a ・3259	SX3262 整地層	SX2135 ・2139 整地層	整地層 合 計	
土 師 器	杯	A					
		B I	1	1			
		B II	1		2	4	6
		B III					
		B IV	1				
		B V					
		底径/口径比	0.49	0.62	-	0.57	-
	器高/口径比	0.36	0.29	-	0.24	-	
甕	A	1			3	3	
	B	42	71	78	17	95	
須 恵 器	杯	I	1		3	1	4
		II	4				
		III	6	7	9	3	12
		IV					
		V	3		1		1
	底径/口径比	-	0.59~0.64	-	0.64	-	
器高/口径比	-	0.33~0.44	-	0.29	-		

第1表 主要遺構出土遺物集計表

b. 土器群の年代

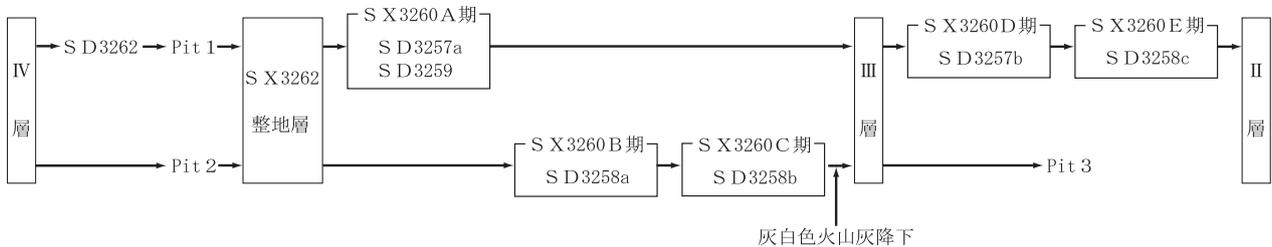
S X 2135・2139とS D 3257 a・3259出土土器：S X 2135・2139・3262整地層とS D 3257 a・3259出土遺物を比較すると、須恵器杯の器高/口径比にやや違いが見られる点を除けば、杯の器形を示す値はおおよそ近い数値を示している。また、土師器甕（A類）を少数含み、土師器杯（B V類）を含まないこと、須恵器杯（III類）を主体としてV類はほとんど含まないことなど共通する点が多く、年代的には近似したものと見ることができる。

本調査区周辺でこれらと類似した特徴をもつものは、多賀城跡S I 2153出土土器、同S I 2160出土土器、市川橋遺跡S X 1351C期出土土器がある。その年代については、多賀城跡S I 2153・2160は9世紀初頭以降、9世紀前半でも古い頃（9世紀前葉頃）のもの、市川橋遺跡S X 1351C期は木簡との共伴関係から延暦9年（790）以降延暦24年（805）以前に位置づけている。土師器についてはA類を少数含むこと、杯B V類は含まず、含んでも少数であること、須恵器杯はIII類が主体となっていることなどが共通する要素としてあげられる。器形的に見ても共通性が窺われ、多賀城跡S I 2153・2160出土土器と市川橋遺跡S X 1351C期の中でもやや底径が大きめのものは、整地層及びS D 3257 a・3259出土資料と類似している。したがって、S D 3257 a・3259と整地層はこれらとほぼ同じ年代と考えられ、8世紀末から9世紀前葉頃に位置づけることができる。

S D 3258 a 出土土器：S D 3258 a 遺物は、土師器杯の糸切り無調整（B IV or B V類）を含んでおり、底径/口径比が0.49とS D 3257 a・3259および整地層出土資料と比較して、底部がやや小さくなっている。また、須恵器杯についてはV類の割合が2割強を占めている。これらはいずれも9世紀第2四半期に位置づけられている多賀城跡S E 2101B第III層や、9世紀中葉頃に位置づけられている同S K 2167に認められる要素である。したがって、S D 3258 aの年代は9世紀第2四半期から中葉頃と考えておきたい。

以上、重複関係と出土遺物から本調査で発見した遺構の変遷を整理すると、第17図のようになる。年代

については、S X3262整地層が8世紀末から9世紀前葉である。それに後続するS D3258aは9世紀中葉頃と推定される。S D3258bには上層に灰白色火山灰が自然堆積していることから10世紀前葉頃にはほぼ埋没していたと考えられる。S D3257b・cは10世紀前葉以降に堆積したⅢ層上面で検出していることから、10世紀前葉以降である。



第17図 第56次調査遺構変遷図

③南1道路の変遷について

南1道路については、本調査を含めて3回の調査が行われている。過去の調査成果によれば、この道路は、灰白色火山灰降下以降に道路を北に4～5m位置を移していることが明らかとなっている。今回の調査区では、範囲が狭く、同時期の南北側溝を把握することはできなかったことから、周辺の調査区まで分布しているⅢ層との層位的な関係および火山灰との前後関係、さらに側溝の位置関係に着目してその変遷をつかむことにする。

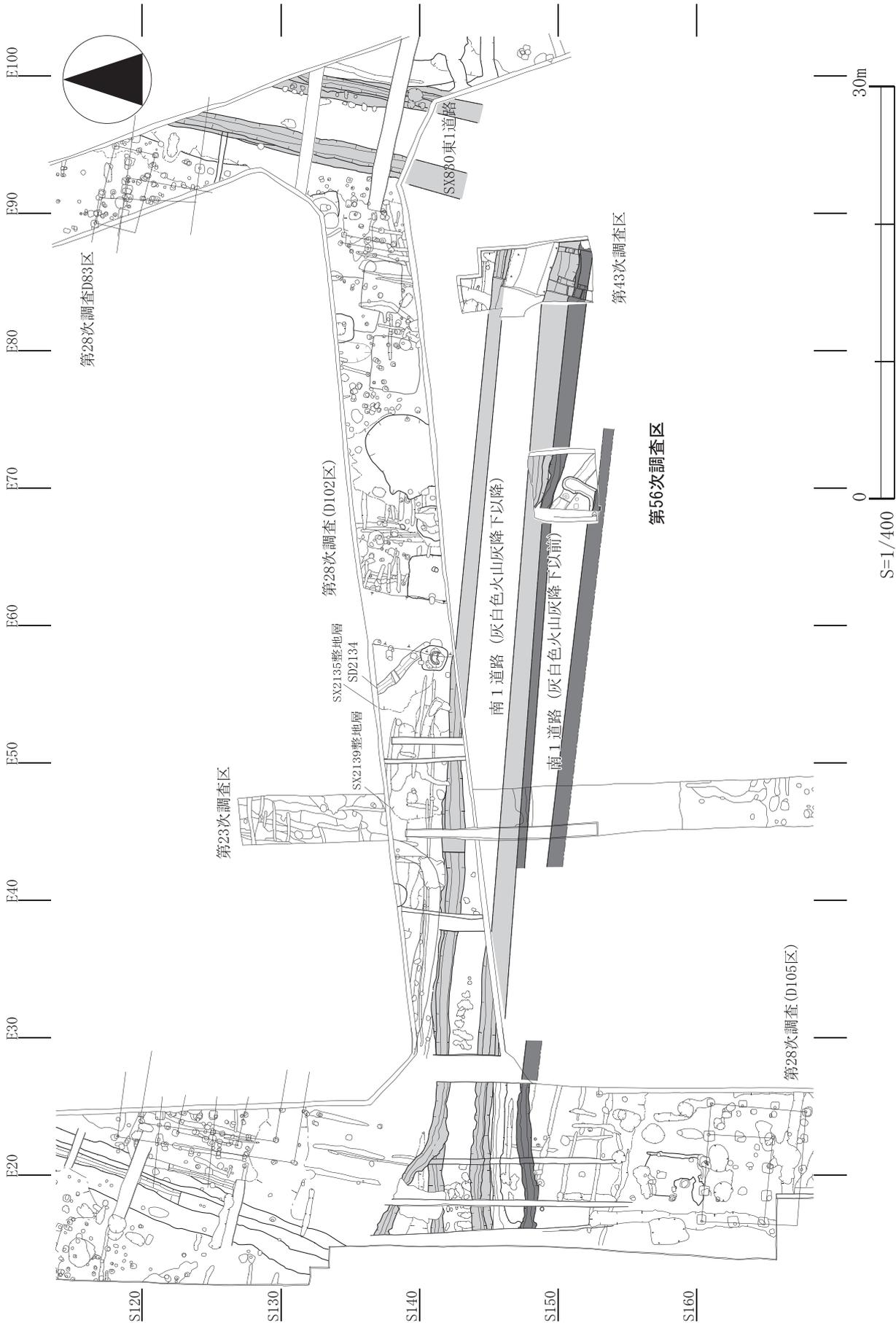
今回の調査において火山灰降下以降に該当するのはD・E期である。これらはⅢ層上面で検出していることや2時期分の変遷があることが、これまでの調査で発見した火山灰降下以降のものと共通している。したがって、それぞれD・E期に該当するS D3257b・cはその位置から北に移動した後の南側溝にあたる。また、今回の調査で発見したS D3258bは火山灰を埋土の最上層に自然堆積する点で、第28次調査(D102区)において発見した南側溝のS D921cと共通している。その位置関係をみると、S D921cが南側溝、S D3258bが北側溝と考えられることから、C期の道路は北側に移動する前のものと判断できる。これより古いものに関しては、C期とほぼ同位置で確認していることから、A・B期についてはそれと同様に南に位置していたと考えられる。

以上のことから、過去の調査と同様に、今回の調査において火山灰降下以前のA～C期は南に位置し、降下以降のD・E期は北に位置を移していることが確認できた。

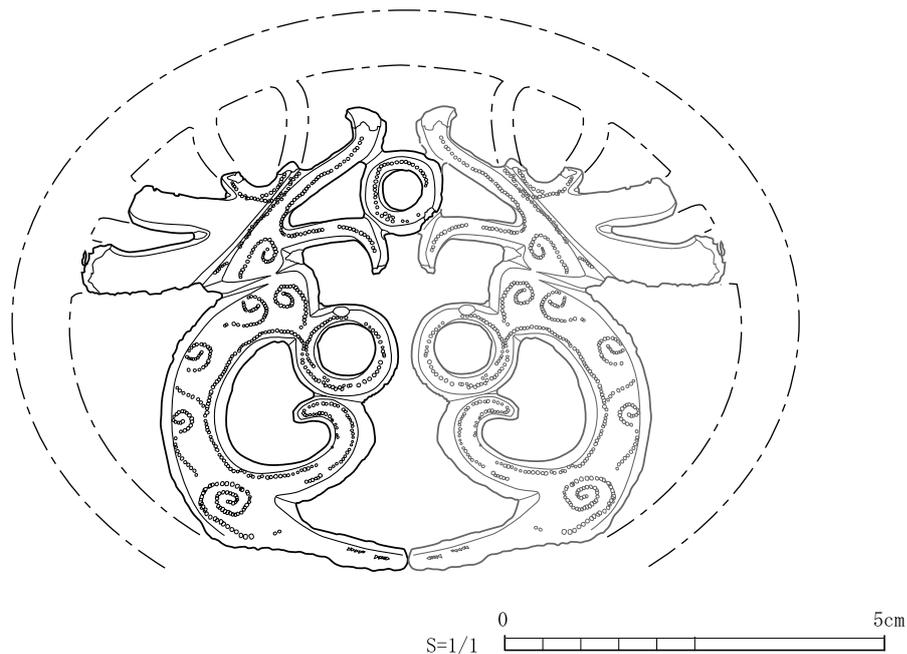
(2) 環頭大刀について

S X3262整地層から出土した環頭大刀について年代を検討し、その意義について若干の考察を行う。出土したのは、双竜環頭大刀の柄頭で、本来環内に配された二体の竜のうち一体分の竜と中央の玉のみが残存している。環をはじめ他に大刀に付随する遺物はない。玉の一つは竜が啞えた状態であり、玉が竜の上顎と下顎とに接合されている。この玉を中心として左右対称に折り返すものと考えられ、また玉の外側には、片方の竜の顎部が剥離した痕跡があり、その位置を手がかりに復元を試みると第19図のようになる。そこから判断すれば玉は口に1箇所、頸毛と尾部に挟まれた部分に2箇所の計3箇所に存在したと考えられ^(註)、外側の環はおおよそ縦約7.4cm、横約10.4cmとみられる。遺存状態については、A面は比較的良好

(註) 胴部にある玉については、体部の列点を追うと胴部から玉の下方に入り1回転しており、上向きの頸毛が回転して上につながったものが玉状を呈したものと考えられる。



であるが、B面はサビによりその状態は悪い。全面に鍍金されている。頭部前から1本目が角、残り3本が冠毛とみられ、うち頭部前寄りの2本はいずれも基部から欠損している。頭部後方の2本は何らかの力が加えられたことにより、互いに反対方向にやや曲がっている。竜の角と冠毛は環と接続していたものと考えられる。玉と接続する部分は立体的に表現されている。また断面形は扁平ではなく、やや丸みをおびている。首の部分と顔の部分に幅0.4~3.4mmの溝があるが、目の表現は確認できない。表面には鑿によると見られる直径0.2~0.5mmの穴が連続する文様がある。文様は、竜と玉の形に沿うものと、竜の体の中央に渦巻きをなすものがある。文様はA・B両面でほぼ同じような構成をとるが、完全には一致しない。



第19図 環頭大刀柄頭（復元図）

次に、装飾付大刀の年代については新納泉の研究がある。新納氏は装飾付大刀を10段階の変遷として理解し、双竜についてはⅠ～Ⅶ型式に分類し編年を行っている。その分類に従えば、今回の出土資料はおおよそⅣ式に相当する特徴が多く見受けられ、それを抽出すると次のとおりである。

- ①竜の形が保たれており、双竜Ⅴ式以降のものほど崩れていない。
- ②一部に立体的な箇所があり、扁平化が進んでいない。
- ③竜の大きさが双竜Ⅰ式よりも大きく、双竜Ⅲ式よりも小さい。
- ④鑿による文様がある。

新納氏の編年では、Ⅳ式には580年を中心とする年代を想定しており、10段階の各時期の年代幅は約10年間とされている。本資料については、Ⅳ式を中心とする時期と考え、おおよそ6世紀後葉頃と見ておきたい。なお、この年代は製作年代を示していることから、使用年代はこれ以降と考えられる。

ところで、今回の調査区および周辺の区画整理事業に伴う発掘調査では古墳時代後期頃の遺構・遺物はほとんど確認していない。ところがその隣接地に目を転じると、自然堤防上に立地する山王遺跡では集落跡が発見され、多賀城や多賀城廃寺が立地する丘陵部では古墳や横穴墓など同時代の遺跡の存在が知られ

ている。

多賀城南門の西側には田屋場横穴墓群があり、5基の横穴墓が確認されている。そのうち遺物が出土したS P 1559・1556は7世紀後葉から8世紀前葉、S P 2661は6世紀後葉から7世紀前葉の年代が考えられている。これらは多賀城造営に伴って埋められたものと考えられている。丘陵部にある稲荷殿古墳はその出土遺物から7世紀前半頃の年代が考えられている。現存しているのは1基のみであるが、本来は複数の古墳が群集していた可能性があると考えられている。一方、山王遺跡では6世紀後半から7世紀代にかけての集落跡が発見されている。この集落では材木堀と溝からなる区画施設が発見されており、仏具である柄香炉など特殊な遺物の出土を考え合わせて一般の集落とは異なる性格が指摘されている。集落内の河川跡からは多数の土器や木製品が出土しており、同時代の他の集落と比較して須恵器が多数出土していることが注意される。また、館前遺跡の調査においても、湿地部分において7世紀頃の土師器を包含する堆積層が確認されており、近隣に同時代の遺構の存在が想定される。東北地方における環頭大刀の出土例は少なく、双竜式に限れば福迫横穴墓群（福島県相馬市）に次いで2例目^(註)となる。このような装飾付大刀は古墳時代・飛鳥時代の身分制や階層性に関わるものであり、地方の有力者層と中央政権との結びつきを示す資料となり得る。今回の発見は、多賀城創建以前における社会情勢を考える上で貴重な資料と言うことができよう。

4. まとめ

- ①南1道路とそれに伴う整地層を発見した。造営年代は8世紀末頃と推定できる。
- ②今回の調査で発見した南1道路には5時期の変遷があり、10世紀前葉以降北へ位置を移動している。
- ③南1道路建設に伴う整地層から、6世紀後葉頃の環頭大刀の柄頭が出土した。

(註) 山形県最上郡鮭川村出土と伝えられる双竜I式に該当する環頭大刀がある。これは奥羽鉄道工事の際に出土とも、豊里の金光寺出土とも伝えられているが、出土状況は明確ではない。さらに、最上郡には古墳が確認されていないことから、この地からの出土かどうか疑問が残る点がある。したがって、ここでは除外して検討することとした。また、柄頭は出土していないが、出土した金銅装大刀の装具の特徴から双竜式の環頭が伴う可能性があるものとして、白穴横穴墓群（いわき市）と八幡横穴墓群（いわき市）、五松山洞窟（石巻市）がある。

参考文献

- (1) 多賀城市教育委員会『館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告－』多賀城市文化財調査報告書第1集 1980
- (2) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- (3) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1－平成15年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第77集 2003
- (4) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書－ 第一～三分冊』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004
- (5) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅳ－ 縄文・弥生・古墳時代・中世以降の考察編1』多賀城市文化財調査報告書第85集 2006
- (6) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成11年度－』 2000
- (7) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成12年度－』 2001
- (8) 多賀城市『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』 1997
- (9) 多賀城市『多賀城市史 第4巻 考古資料』 1991
- (10) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992
- (11) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993
- (12) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報2001』 2002
- (13) 東北学院大学東北文化研究所『東北文化研究所紀要 第13号』 1982
- (14) 久美浜町教育委員会『湯舟坂2号墳』京都府久美浜町文化財調査報告第7集 1983
- (15) 新納泉「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 1982
- (16) 新納泉「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号 1984
- (17) 新納泉「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号 1987
- (18) 新納泉「武器」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 1991
- (19) 大阪府立近つ飛鳥博物館『金の大刀と銀の大刀－古墳・飛鳥の貴人と階層－』 1996
- (20) 奥山重蔵「豊里出土の白鳳文化」『羽陽文化』 1961
- (21) 新谷武夫「環状柄頭研究序説」『考古論集-慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集-』 1977
- (22) 穴沢味光・馬目順一「東北地方出土の環頭大刀の諸問題」『福島考古』第19号 1978
- (23) 穴沢味光・馬目順一「金銅双龍環把頭」『福島考古』第24号 1983
- (24) 穴沢味光・馬目順一「武器・武具と馬具」『古代を考える 古墳』吉川弘文館 1990
- (25) いわき市『いわき市史第8巻 原始・古代・中世資料』 1986
- (26) 橋本英将「外装からみる装飾付大刀」『鉄器研究の方向性を探る－刀剣研究をケーススタディとして』第9回鉄器文化研究集会 2003



S D 3261 溝跡 (南東より)



S X 3260 南 1 道路 (S X 3262 整地層上面・東より)



環頭大刀柄頭出土状況 (北西より)



S D 3258 a 北側溝墨書土器出土状況



S D 3259遺物出土状況（北西より）



S D 3259溝跡遺物出土状況（北西より）



S X 3260南道路 1 道路（Ⅲ層上面・北西より）



S D 3257b 南 1 道路南側溝（西より）

写真図版 2



1 土師器杯 (第7図5 R7)



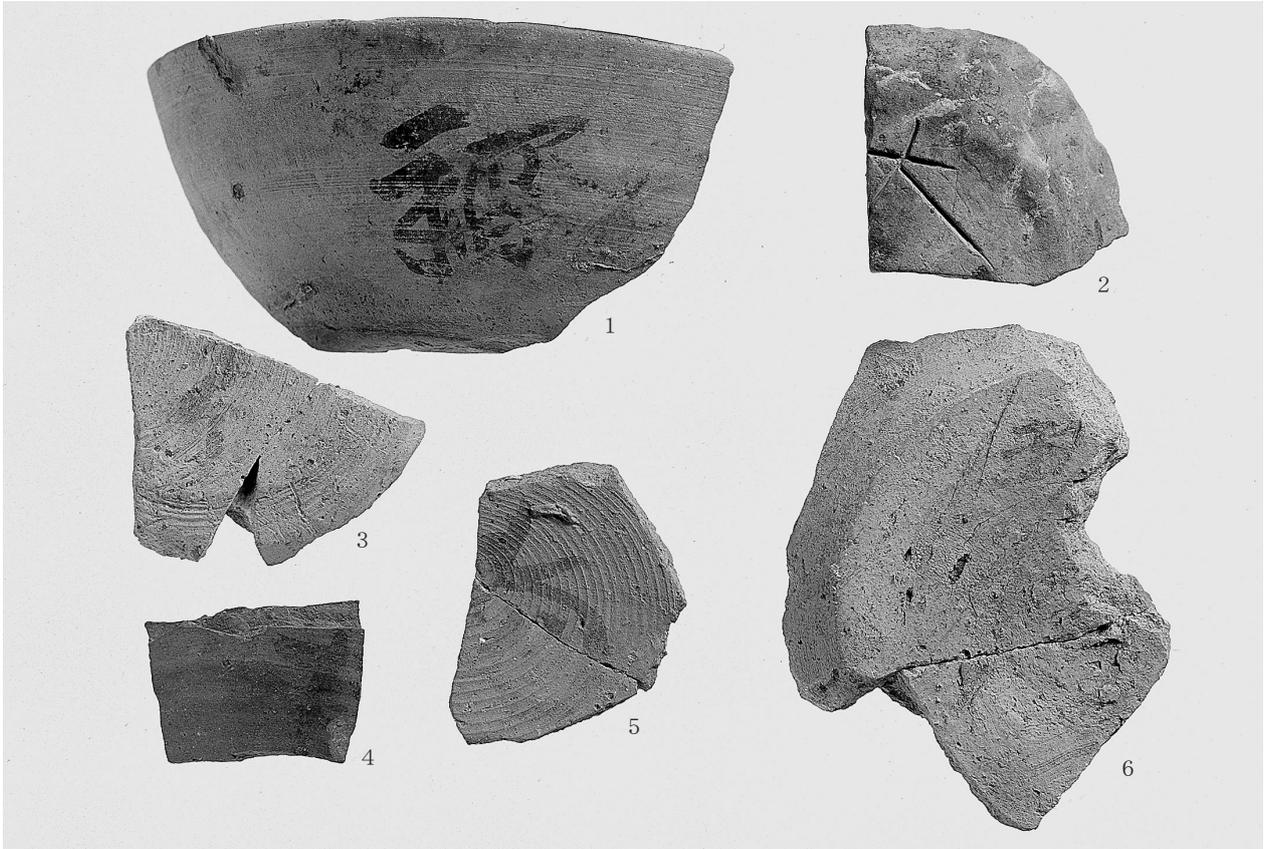
2 須恵器杯 (第7図1 R1)



3 須恵系土器杯 (第11図3 R5)



4 須恵系土器高台付杯 (第12図9 R6)



5 墨書・ヘラガキ土器

1 : 土師器杯 (第7図6 R8)

2 : 土師器甕 (第13図13 R36)

3 : 須恵器杯 (第9図2 R11)

4 : 須恵器杯 (第13図11 R32)

5 : 須恵器杯 (第13図12 R9)

6 : 須恵器杯 (第9図5 R10)

写真図版 3



6 環頭大刀柄頭 A面 (第9図7 R1)



7 環頭大刀柄頭 B面 (第9図7 R1)



8 環頭大刀柄頭 (X線写真)



9 砥石 (第14図10 R16)

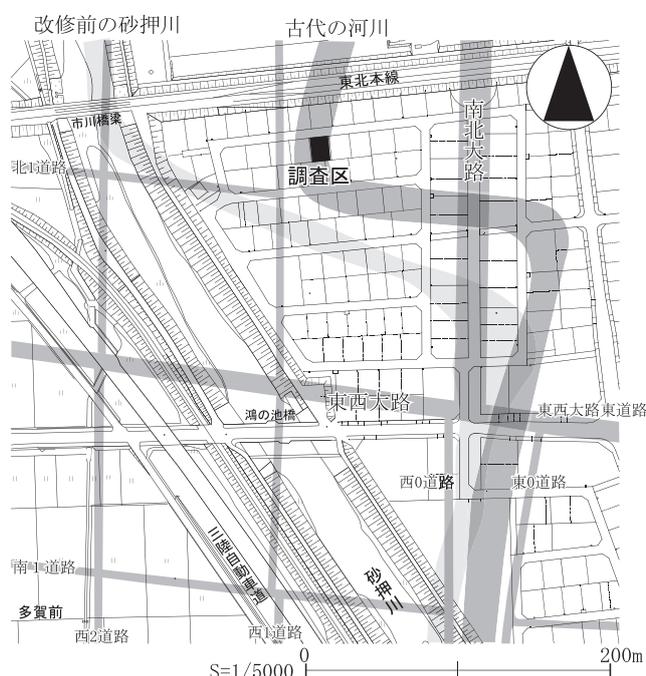
写真図版 4

IV. 市川橋遺跡第57次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年3月24日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財の係りについての協議書が提出された。今回の開発計画は基礎工事にパイル杭を32本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、申請された工法で実施することに決定した。これにより、平成18年5月9日、地権者より依頼書及び承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

なお、本調査地点は、城南土地区画整理事業に伴う第25次調査A1区に隣接していることから、古代及びそれ以降の河川跡の存在が予想された。調査は5月17日から開始し、はじめに重機を使用して土地区画整理事業に伴う盛土(I1層)・現代の水田層(I2a・2b層)、古代以降の堆積層(II・III層)の除去を行い、河川堆積土上面を検出した。18日からは作業員を動員して平面プランの把握を行い、新旧2時期(SX3254A・B)であることを確認した。22日からは河川堆積土の掘り下げと並行して調査区際に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。平面・断面での土層観察の結果、北東から南西方向に流れる河川の一部であることが判明した。SX3254A堆積土中には灰白色火山灰粒が含まれていることから、概ね平安時代以降のものと考えられた。河川堆積土は約50cm掘り下げたが、この時点で現地表面から約3mの深度に達し、湧水が激しくなったことから安全確保のため、これ以上の調査は実施しなかった。25日までには、調査区全景および土層断面の写真撮影、平面・断面図を作成し、翌26日には埋め戻しを行って一切の調査を完了した。



第1図 調査区位置図

はじめに重機を使用して土地区画整理事業に伴う盛土(I1層)・現代の水田層(I2a・2b層)、古代以降の堆積層(II・III層)の除去を行い、河川堆積土上面を検出した。18日からは作業員を動員して平面プランの把握を行い、新旧2時期(SX3254A・B)であることを確認した。22日からは河川堆積土の掘り下げと並行して調査区際に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。平面・断面での土層観察の結果、北東から南西方向に流れる河川の一部であることが判明した。SX3254A堆積土中には灰白色火山灰粒が含まれていることから、概ね平安時代以降のものと考えられた。河川堆積土は約50cm掘り下げたが、この時点で現地表面から約3mの深度に達し、湧水が激しくなったことから安全確保のため、これ以上の調査は実施しなかった。25日までには、調査区全景および土層断面の写真撮影、平面・断面図を作成し、翌26日には埋め戻しを行って一切の調査を完了した。

2. 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。いずれの層もほぼ水平に堆積している。

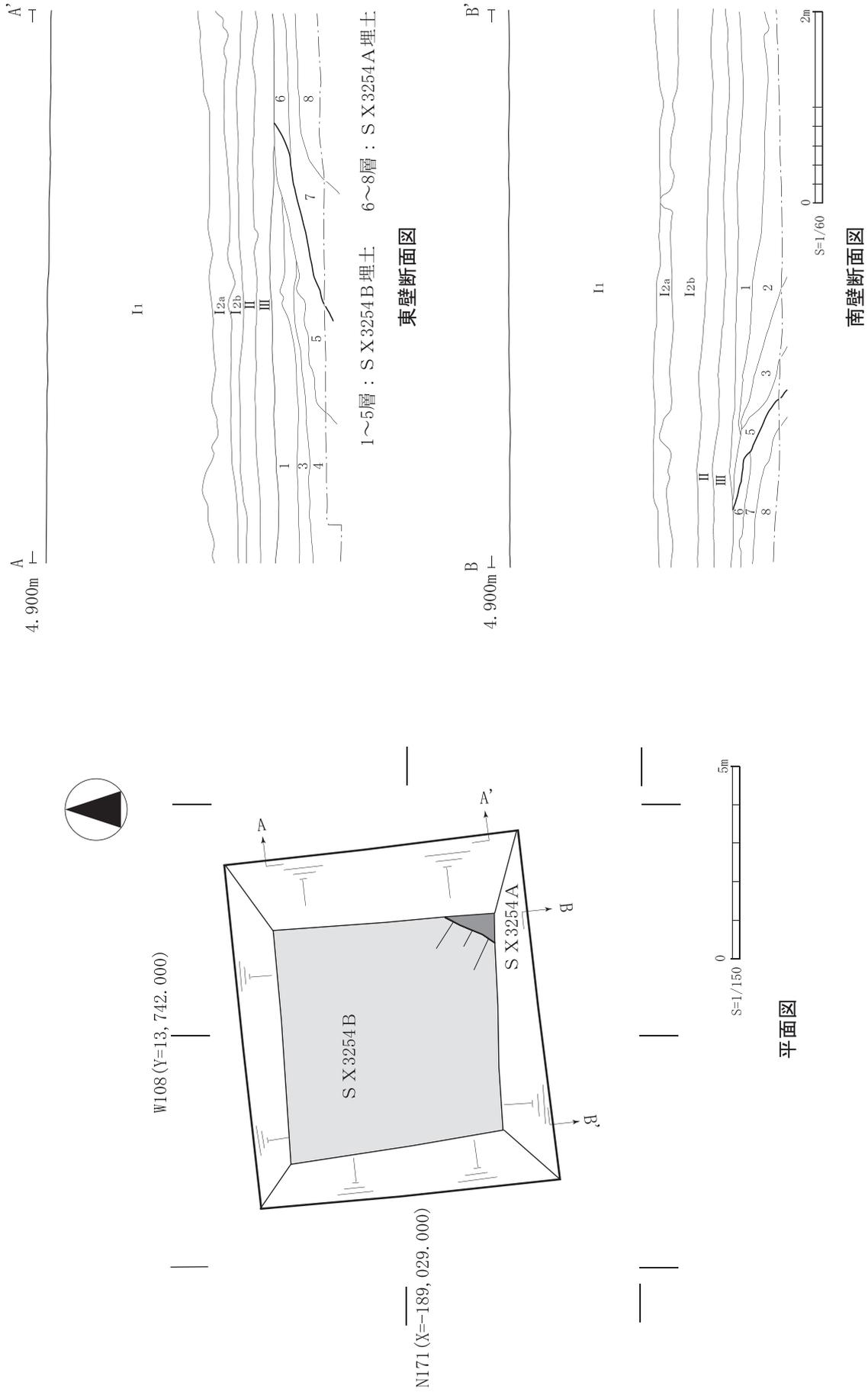
I1層：区画整理に伴う盛土層で、厚さは約1.7mである。

I2a・2b層：現代の水田耕作土・床土層で、厚さは20～50cmである。

II層：灰色粘質土で、厚さは15cm前後である。調査区全域に分布する。

III層：灰オリーブ色粘土で、厚さは15～20cmである。調査区全域に分布する。河川堆積土を直接覆う。

土師器、須恵器の細片が3点出土した。



第2図 遺構平面・断面図

(2) 発見遺構

S X 3254河川跡

調査区全域で検出した南北方向の河川跡である。Ⅲ層によって全面を覆われている。2時期（A→B期）の変遷を確認した。

S X 3254 A：B期に壊されているため全容は不明であるが、調査区の南東隅、東西約1.7m、南北約3mの範囲で確認した。深さは0.6m以上、埋土は3層に分けられ、6～7層が灰黄色砂質土、8層が灰オリーブ色の細かい砂層である。6層にはわずかに灰白色火山灰粒が混入していた。遺物は出土していない。

S X 3254 B：調査区のほぼ全域、南東隅においては東岸の緩やかな立ち上がりを検出した。深さは0.7m以上、埋土は5層に分けられ、1～2層が暗オリーブ灰～灰オリーブ色粘質土、3～4層が灰～黄灰色粘土（ラミナ状堆積）、5層が灰色粘質土である。遺物は出土していない。

3. まとめ

今回の調査地点は、第25次調査A 1区の南側、A42区の北側に隣接していることから、古代及びそれ以降の河川跡の存在が予想されていた。調査の結果、S X 3254 Bについては、第3図に示したような河川流路を想定した。年代については、10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰が混入するS X 3254 Aよりは新しいので、それ以降の時期と推定されるが、出土遺物もないため特定はできなかった。



調査区遠景（北東より）



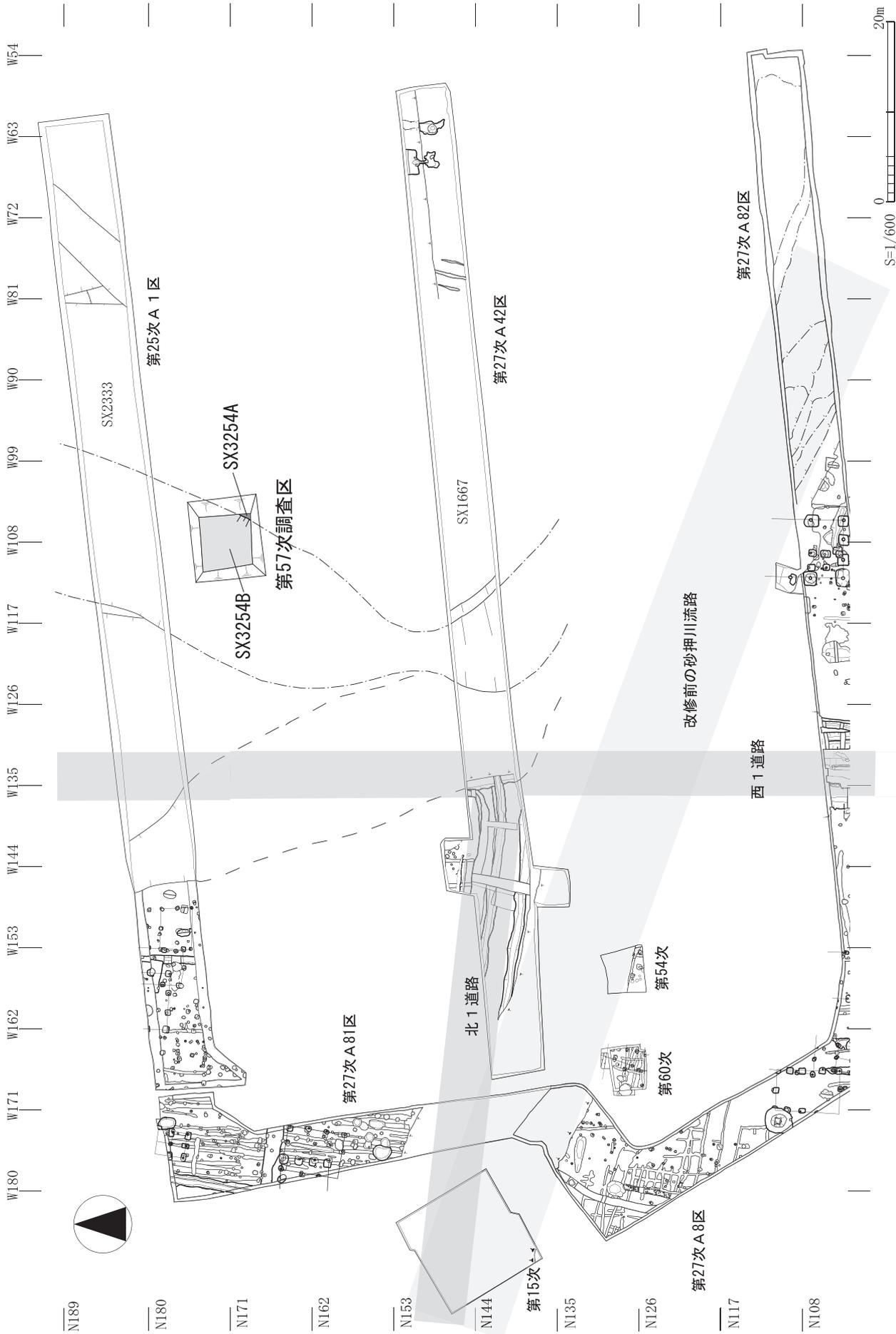
S X 3254 A・B 溝跡検出状況（南より）



調査区全景（北東より）



調査区東壁断面



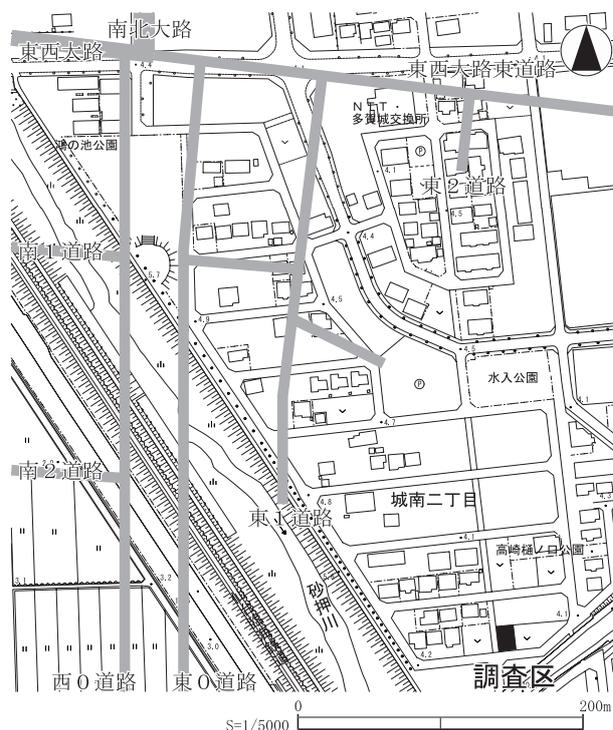
第3図 調査区の位置と河川流路推定図

V. 市川橋遺跡第58次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成18年5月29日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、基礎工事の際に直径4.86cm、長さ5.5mの細径鋼管杭を188本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、申請された工法で実施することに決定した。

これを受け平成18年6月20日、地権者より発掘調査の依頼書および承諾書の提出を受け、7月3日から重機による表土（I層）除去を行った。4日に遺構検出作業を行ったところ、Ⅲ層上面においてSD3254・3255と、Pit1を発見し、随時実測図作成と写真撮影などを行った。7日に重機による埋め戻しと器材の撤収を行い、現地発掘調査の一切を完了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序

I1層：現代の盛土層で、厚さは約70cmである。

I2層：現代の水田耕作土で、厚さは約21～25cmである。

II層：黄灰色粘土層で粒状の灰白色火山灰と炭化物を微量に含む。厚さは13～25cmである。

III層：黒褐色粘土層で炭化物とブロック状のIV層を含む。厚さは5～10cmである。古代の遺構検出面である。

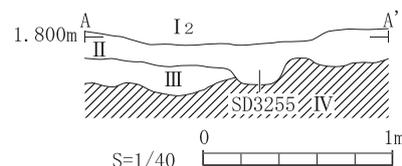
IV層：黄灰色砂層である。周辺の調査成果から古代の最終遺構検出面と考えられる。

(2) 発見した遺構・遺物

SD3254・3255溝跡（第2・4図）

調査区の中央で発見した南北方向に延びる溝跡である。Ⅲ層上面で発見し、その埋土はⅡ層によって埋まっている。規模は、上幅19～40cm、下幅15～30cm、深さ2～9cmである。方向は北で約3～6度西に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

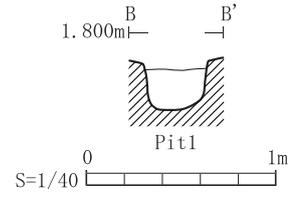


第2図 南壁断面図

その他の遺構

調査区東側のⅢ層上面でPit 1を発見した。規模は長軸38cm、短軸31cm、深さは26cmである。埋土は灰色粘土でブロック状のⅣ層を少量含む。

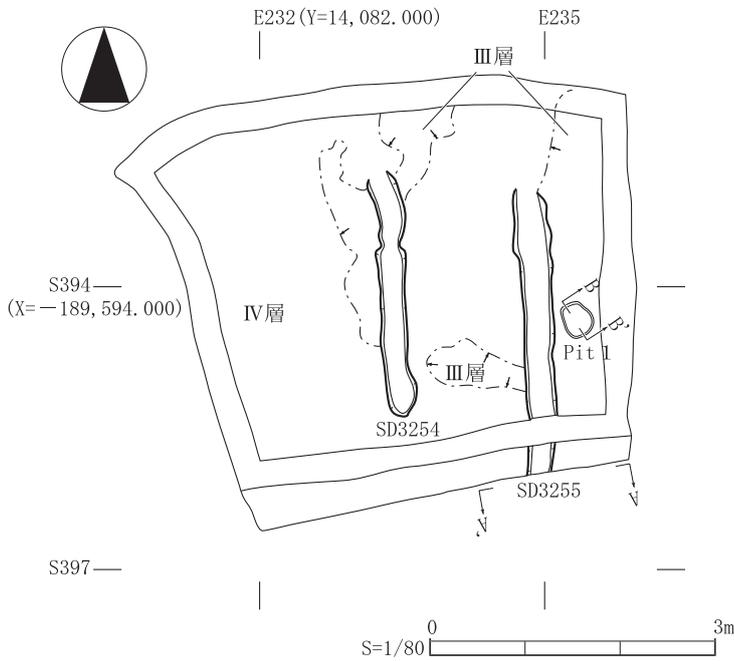
遺物は出土していない。



第3図 Pit 1断面図

3. まとめ

今回の調査では、溝跡2条とPit 1を発見した。その年代は、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰を粒状に含むことから、これ以降と考えられる。また、Pit 1については、Ⅱ層に覆われ、埋土に灰白色火山灰を含まないことから、年代の下限は10世紀前葉と考えられる。しかし、遺物が出土していないため、その上限については手がかりが得られなかったが、およそ古代と考えておきたい。



第4図 遺構平面図



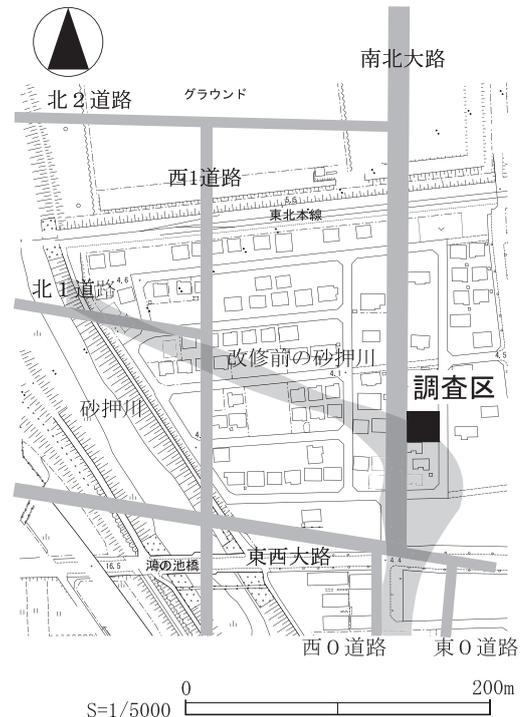
Ⅲ層上面調査区全景 (南より)

VI. 市川橋遺跡第59次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年6月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約14cm、長さ10.5mの鋼管杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。その後、9月1日に地権者から発掘調査の依頼を受け、13日より調査を開始した。

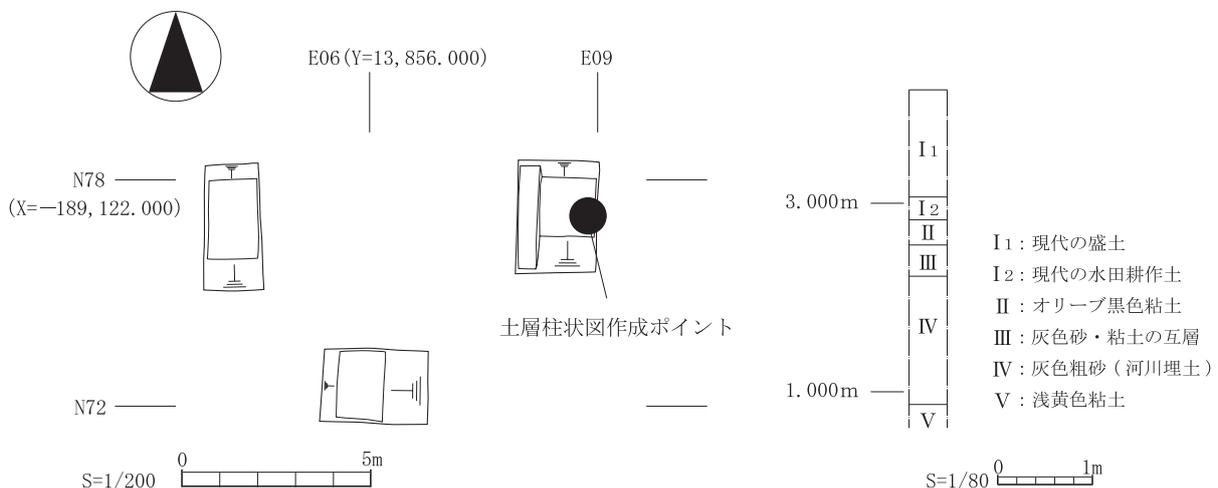
調査に際しては、当街区が昭和26年に行われた河川改修前の砂押川の流路にあたと想定されたことから、表土下での河川埋土の有無及びその下層で古代の遺構検出面が認められるかどうかを探るため、対象区北側の東西端部及び南側中央部にトレンチを設置して重機による表土除去を開始した。その結果、現代の盛土及び旧水田耕作土の下は改修前の砂押川であることが判明し、古代の遺構検出面はこれによって全て破壊されていることが明らかとなった。同日、調査区の全景写真及び北東部の土層柱状図、調査区範囲図を作成する。その後重機により調査区の埋め戻しを行い、一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

今回発見した河川は、周辺の調査成果や昭和22年に撮影された航空写真から、昭和26年に行われた河川改修以前の砂押川と判断される。河川の底面は現表土から3.3mの深さに達している。遺物は出土していない。



第2図 調査区配置図及び土層柱状図

VII. 市川橋遺跡第60次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年9月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に、直径60cm、長さ7mのコンクリート杭を打ち込むことから地下の遺構への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。その後、9月26日に地権者から発掘調査の依頼を受け、10月4日より調査を開始した。

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したものの、遺構検出面までの深さが現表土から2mと予想以上に深く、対象面積の4割弱の調査区を設定するにとどまった。5日より遺構の検出作業を行い、浅黄色砂質土

(IV層) 上面でS B 3264～3266掘立柱建物跡、S D 3268～3273溝跡、S K 3274・3275・3277土壌などを発見した。一方、これと並行して調査区の周囲に排水溝を兼ねたサブトレンチを設定し、調査区内の土層堆積状況及び下層遺構の有無を検討した。その結果、本調査区内においてはIV層が古代の最終遺構検出面であることが明らかとなった。11日、調査区内に実測図作成用の基準点を設置し、遺構の平面図・断面図の作成を行う。翌12日には調査区内の土層堆積状況を記録するため、東・南壁の断面図を作成する。13日、調査区全景の写真撮影を行い、その後各柱穴及びS K 3274の埋土完掘、調査区及び調査対象範囲の模式図作成などの補足調査を実施する。14日に重機による調査区内の埋め戻しを行い、16日に調査器材を撤収する。同日午後、施工業者への現地引き渡しを行い、本調査の一切を終了した。

2. 調査成果

(1) 層序

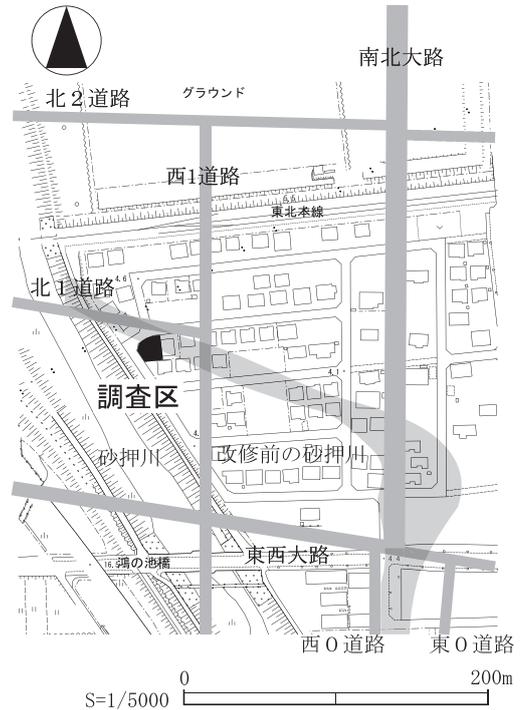
今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである

I 1 層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは約1.6mである。

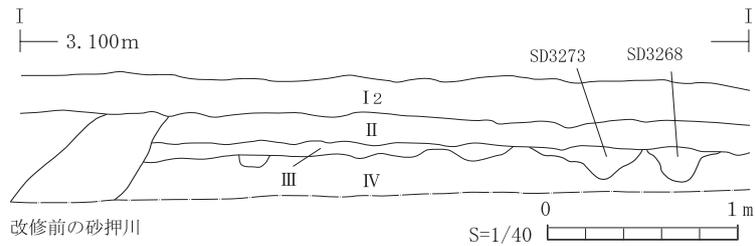
I 2 層：現代の水田耕作土で、厚さは20～25cmである。改修前（昭和26年以前）の砂押川を直接覆っている。

II 層：暗オリーブ灰色砂層であり、改修前の砂押川の検出面である。

III 層：灰白色火山灰が二次堆積する黒褐色粘質土で、厚さは5～10cmである。周辺の調査成果より10世紀前葉以降の古代の堆積層であることが明らかとなっており、本調査区では全ての遺構が直接これに覆われている。



第1図 調査区位置図



第2図 東壁断面図

IV層：黒褐色粘質土が僅かに混入する浅黄色砂質土である。厚さは20cm以上あり、上面は古代の最終遺構検出面である。

(2) 発見遺構と遺物

IV層上面で、掘立柱建物跡、溝跡、土壇を発見した。

S B 3264掘立柱建物跡

調査区東半部で発見した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡であり、検出した柱穴は南西隅柱穴と西側柱列南より1間目柱穴、南側柱列西より1間目柱穴と推測される。南西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱のあたり痕跡を残す柱抜き穴^(註)を確認した。SD3269と重複し、それよりも古い。方向は北で20度23分東に偏しており、柱間は西側柱列で2.12m、南側柱列で1.68mである。柱穴の平面形はやや崩れた方形または楕円形を基調とし、規模は最も大きい西側柱列南より1間目柱穴で長径45cm、深さ50cmである。埋土は、浅黄色砂質土が混入する黒色粘質土である。柱痕跡は直径15cmであり、埋土は黒色粘質土である。柱抜き穴はいずれも柱穴のほぼ中央にあり、埋土は浅黄色砂質土が混入する黒色粘質土である。

遺物は、柱抜き穴から土師器杯（B類）の小片が出土している。

S B 3265掘立柱建物跡

調査区東半部で発見した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡であり、検出した柱穴は北西隅柱穴と西側柱列北より1間目柱穴、北側柱列西より1間目柱穴と推測される。すべての柱穴で柱抜き穴を確認した。SD3268～3271と重複し、それよりも古い。方向は北で約4度東に偏しており、柱間は西側柱列で約1.5m、北側柱列で約2.1mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい北西隅柱穴で一辺約40cm、深さ10cmである。埋土は、黒褐色粘質土が僅かに混入する浅黄色砂質土である。柱抜き穴はいずれも柱穴のほぼ中央にあり、埋土は黒褐色粘質土が多量に混入する浅黄色砂質土である。

遺物は、柱抜き穴から須恵器杯（Ⅲ類）の小片が出土している

S B 3266掘立柱建物跡

調査区南端部で発見した東西2間以上の掘立柱建物跡であり、検出した柱穴は北東隅柱穴と北側柱列東より1間目柱穴と推測される。北東隅柱穴で柱抜き穴、北側柱列東より1間目柱穴で柱痕跡を確認した。SD3270と重複し、それよりも古い。方向は東で約4度北に偏しており、柱間は約1.6mである。柱穴の平面形はやや崩れた方形または楕円形であり、規模は北側柱列東より1間目柱穴で長径35cm、短径25cm、深さ約20cmである。埋土は、浅黄色砂質土が多量に混入する黒色粘質土である。柱痕跡は直径10cmであり、

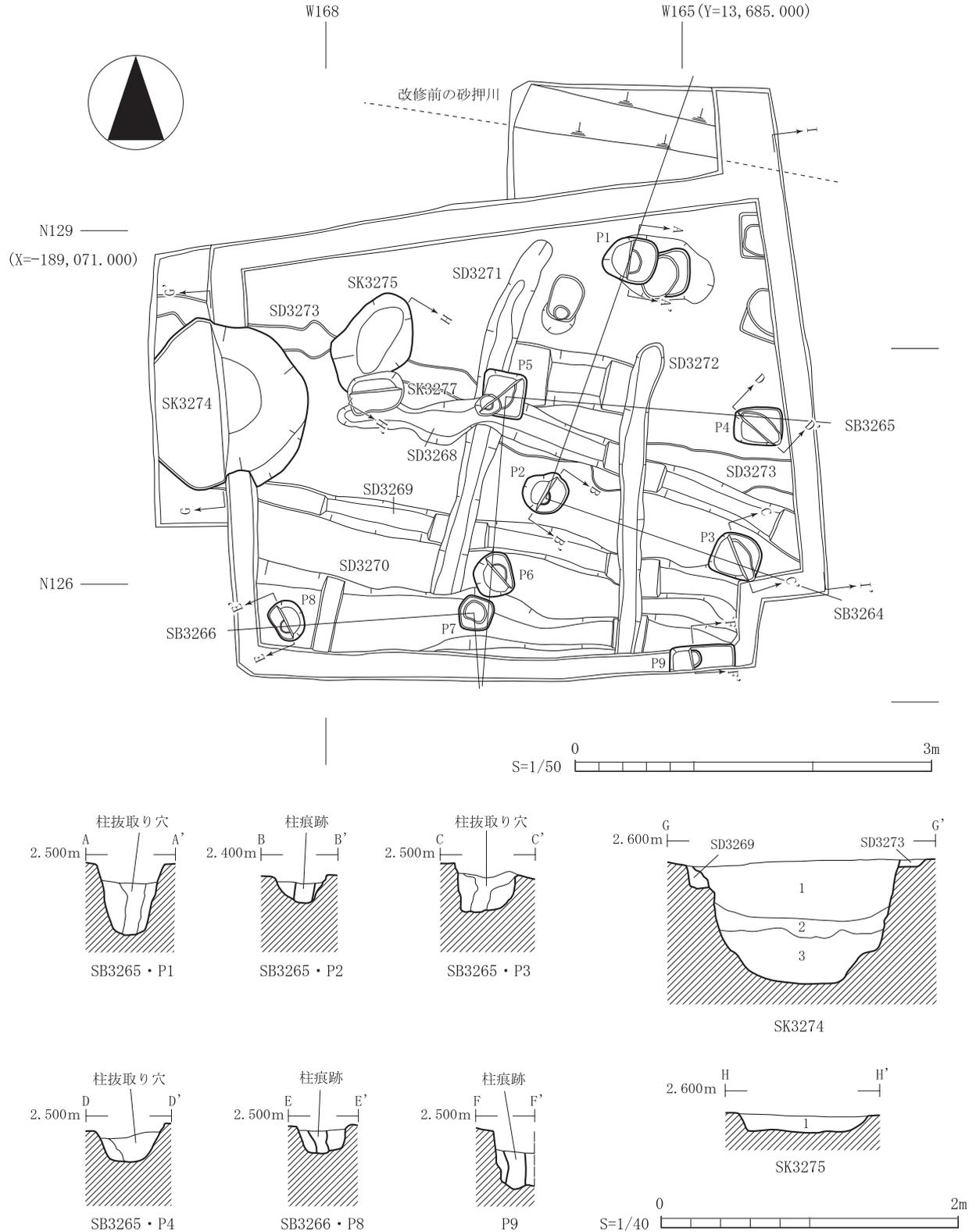
(註) 「柱のあたり痕跡を残す柱抜き穴」については、埋土に浅黄色砂質土（IV層）が多く混入していることから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考えられる。

埋土は黒色粘質土である。柱抜き穴は柱穴のほぼ中央にあり、埋土は黒色粘質土である。

遺物は出土していない。

S K 3274土壌

調査区西部で発見した土壌である。SD 3269・3273と重複し、それらよりも新しい。平面形は概ね円形であり、規模は直径約1.5m、深さ約0.9mである。壁は下方が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がるのに



第3図 遺構平面図・断面図

対して、上方はほぼ垂直である。埋土は3層に分けることができる。1層は褐灰色粘質土で、中位に酸化鉄の薄い層が認められる。2層は黄灰色粘土や浅黄色砂質土が多量に混入する黒褐色粘土、3層は砂粒や植物遺存体が混入する黒色粘土である。

遺物は、土師器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅱ類）・蓋・甕、丸瓦（Ⅱ B類）が出土している。

S K 3275土壙

調査区西部で発見した土壙である。S D 3273、S K 3277と重複し、それらよりも新しい。平面形は南北に長い楕円形であり、規模は長径0.9m、短径0.6m、深さ0.1mである。壁は北側が垂直気味であるものの、それ以外は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は浅黄色砂質土や炭化物が多量に混入する褐灰色粘質土である。

遺物は、土師器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器杯・瓶・甕が出土している。

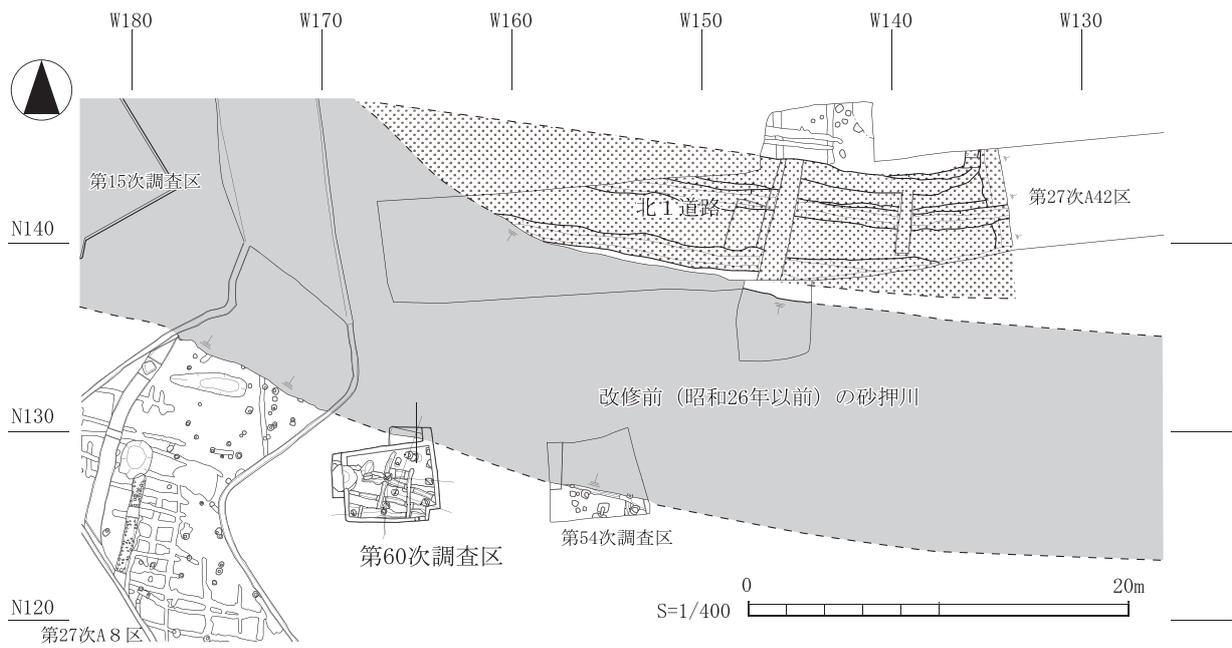
S D 3268～3273溝跡群

幅20～30cm、深さ10～15cmの小規模な溝跡である。南北方向のS D 3271・3272と東西方向のS D 3268～3270があり、南北方向のものが新しい。また、これらの溝跡は、今回検出した全ての柱穴よりも新しい。方向は南北方向のものが北で5～14度東に、東西方向のものが西で12～18度北に偏している。断面はやや凹凸が認められるものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面は起伏が多く平坦ではない。埋土は黒褐色粘質土であり、下方に浅黄色砂質土がやや多く混入している。

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕が出土している。

3. まとめ

今回の調査で発見した遺構には、掘立柱建物跡3棟、小規模な溝跡6条、土壙2基がある。これらは重複関係から掘立柱建物跡→小規模な溝跡→土壙という変遷が認められ、当該区における土地利用のあり方が変化していることを示している。それぞれの遺構の具体的な年代については明確にできないが、出土した遺物の中に土師器B類が含まれていることから8世紀後葉以降のものとすることができよう。下限については上面を覆うⅢ層に須恵系土器が含まれていないことや、遺構の埋土中に灰白色火山灰が認められない点を考慮すれば、10世紀前葉頃には廃絶していたものと推測される。なお、隣接する第27次調査A 8区でも東西・南北方向の小規模な溝跡を確認している。遺構の規模や方向などがS D 3268～3273と類似していることから、これらは一連の遺構と考えられよう。



第4図 第60次調査区と周辺地区遺構配置図



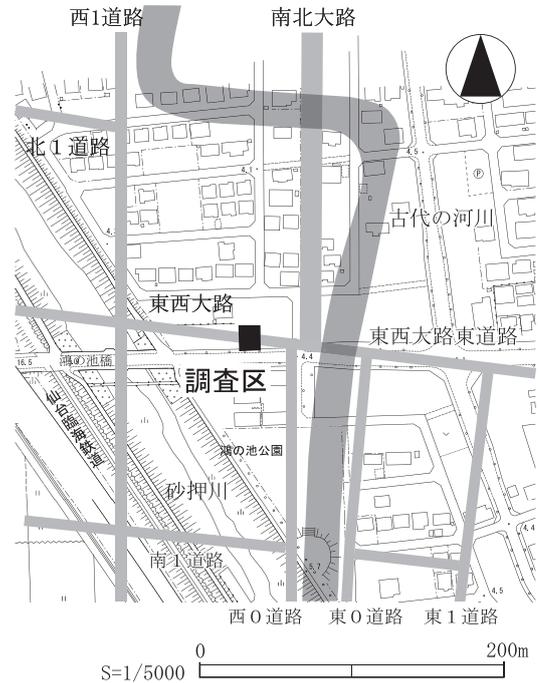
調査区全景（西より）

Ⅷ. 市川橋遺跡第61次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年9月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径60cm、長さ5.5mのコンクリート杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。その後、11月6日に地権者から発掘調査の依頼を受け、11月13日より調査を開始した。

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したため、対象面積の約7割の調査区を設定することができた。本調査区は位置的に東西大路の路面及び南側溝上にあ



第1図 調査区位置図

たることから、これら遺構の存在が期待された。しかし、15日より開始した検出作業の結果、路面は全てS X 3279河川跡によって破壊されていることや、南側溝も本調査区内では確認されないことが明らかとなった。16日からS X 3279の埋土掘り下げを行い、翌17日には調査区的全景写真を撮影し、光波測距儀によって遺構平面図を作成した。21日、調査区内の土層堆積状況を記録するため東壁断面図の作成を開始するとともに、東西大路南側溝の有無を確認するため土砂搬出用に設けたスロープ部分についてS X 3279埋土を一部掘り下げた。その結果、この下層よりSD 3278東西大路南側溝を確認したことから、直ちに検出状況の写真撮影及び平面図作成を行った。その後、調査区及び調査対象範囲の模式図作成などの補足調査を実施し、翌22日には調査器材の撤収を行う。24・25日にかけて重機により調査区内を埋め戻し、本調査の一切を終了した。

2. 調査成果

(1) 層序

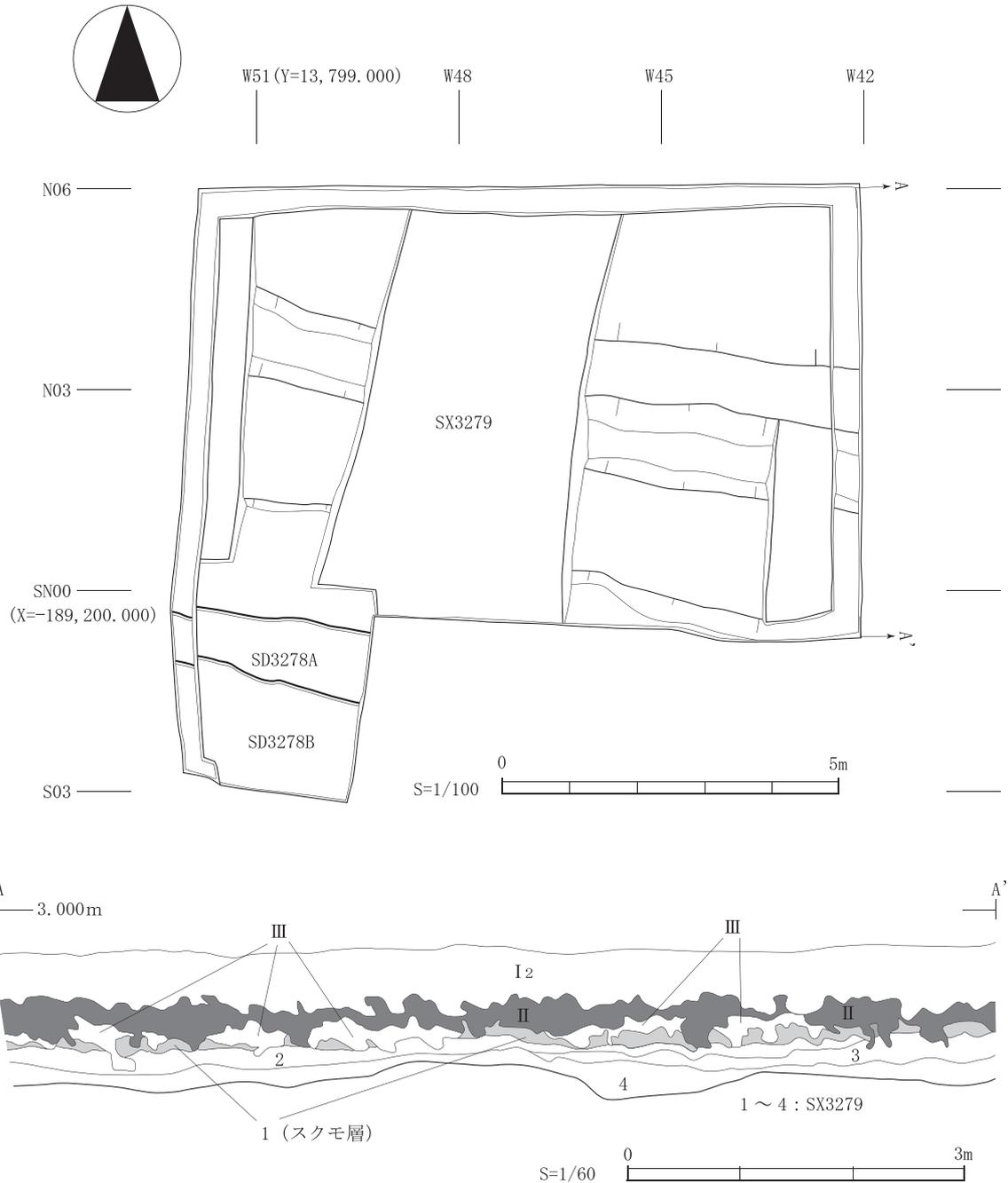
今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである

- I 1 層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは約1.8mである。
- I 2 層：区画整理前の水田耕作土で、厚さは30～40cmである。
- II 層：黒色粘土が多量に混入するオリブ黒色粘土層で、厚さは30～40cmである。底面の攪拌状況から判断して水田跡と考えられるが、時期は不明である。
- III 層：黒色粘土層で、厚さは約20cmである。
- IV 層：緑灰色砂層である。周辺の調査成果を総合すると、古代の最終遺構検出面である浅黄色砂質土や黄褐色砂質土・粘質土などの下層にある基盤層（古代以前の河川埋土）と判断される。

(2) 発見遺構と遺物

S D3278東西大路南側溝

S X3279埋土を掘り下げた後、IV層上面で検出した。調査対象区外であることから一部を検出したにすぎないものの、位置的に東西大路南側溝であることが明らかである。少なくとも2時期の変遷（a→b期）が認められ、a期埋土上位には灰白色火山灰が自然堆積している^(註)。



第2図 遺構平面図・断面図

(註) 東側で実施した第26・27次調査では東西大路南側溝に灰白色火山灰の自然堆積は確認されていないが、本調査区では火山灰が帯状に認められることから自然堆積と判断した。

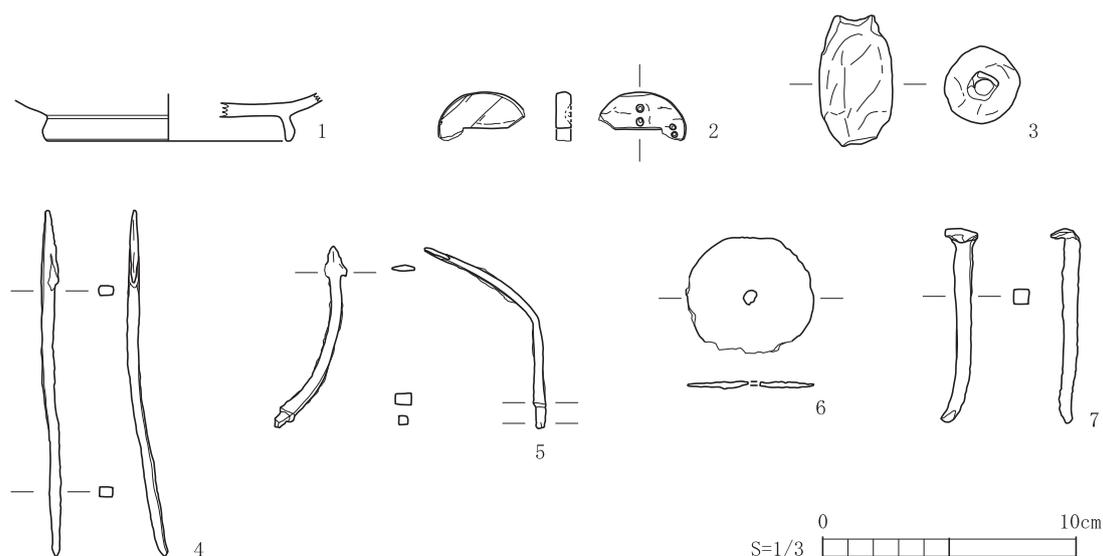
S X3279河川跡

Ⅲ層に直接覆われる河川跡である。調査区全域で確認しており、東西大路の路面全てを破壊している。底面には流水作用によって生じたと考えられる溝状の窪みが東西方向に認められ、西から東に向かって傾斜している。埋土は厚さ20~40cmであり、4層に分けることができる。1層は垂泥炭層（スクモ）層、2・3層は黒褐色粘土、4層は砂粒が多く混入するオリブ黒色粘質土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・瓶・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器椀・瓶、緑釉陶器椀、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、石帯（丸軋）、鎌、鉄鎌、鉄製紡錘車、鉄釘、土器片製円板が出土している。これらはいずれも小片であり、接合及び復元可能なものはほとんど認められない。

3. まとめ

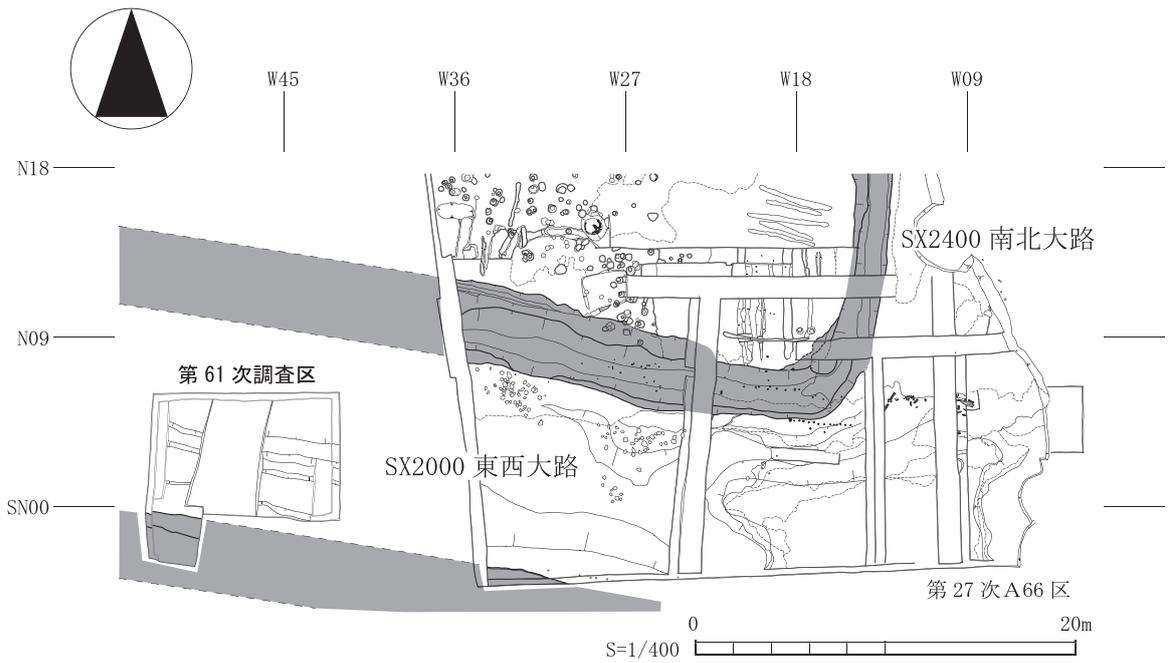
今回の調査では、SD3278東西大路南側溝と、それよりも新しいS X3279河川跡を発見した。年代については、SD3278a埋土上位に灰白色火山灰が自然堆積していることから、a期が灰白色火山灰降下以前、b期がそれ以降と考えられる。S X3279については、東西大路より新しい時期のものであることは明らかであるが、具体的な年代については不明である。しかし、出土した遺物が古代ものに限定されていることから、ここでは概ねその範疇に収まるものとしておきたい。



単位：cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	写真	備考
			外面	内面						
1	灰釉陶器・椀	2層	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	(9.6) 2/24	-	R1	-	黒笹90号窯式
2	石帯（丸軋）	2層	厚さ：0.6					R2	6	灰～黒色
3	土錘	2層	長さ：5.2、幅：最大3.0					R3	-	
4	鉄鎌	2層	長さ：13.8、幅：0.5、厚さ：最大0.2~0.6					R1	1	
5	鉄鎌	2層	長さ：9.5、幅：最大0.6、厚さ：0.2~0.4					R2	3	
6	鉄製紡錘車	2層	直径：5.0、厚さ：0.2					R3	2	
7	鉄釘	排水溝	長さ：7.7、幅（厚さ）：最大0.5					R4	4	

第3図 S X3279河川跡出土遺物



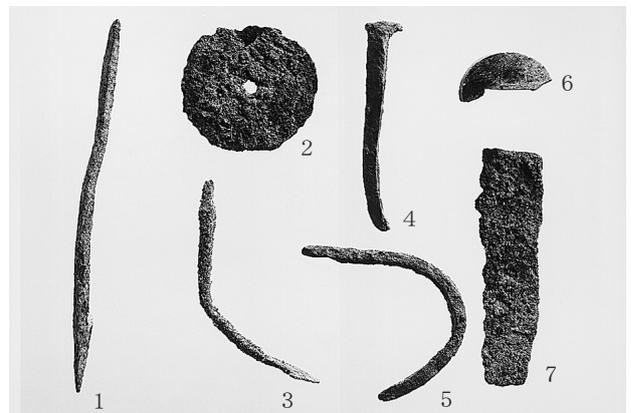
第4図 第61次調査区と周辺地区遺構配置図



調査区全景 (西より)



東西大路西側溝 (東より)
白く見えるのが灰白色火山灰



S X 3279出土遺物

IX. 新田遺跡第34次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年12月6日に地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。その計画内容は、基礎工事の際に直径60cm、長さ6mのソイルセメント杭を28本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。

これを受け平成18年3月27日、地権者より発掘調査の依頼を受け、4月6日から重機による表土（I層）

除去を行った。10日に遺構検出作業を行い、Ⅲ層上面においてSD1717～1719溝跡を発見した。11日に基準点の設定を行った。13日に遺構の埋土を除去し、写真撮影を行った。14日にⅢ層上面の調査区全景の写真撮影した後、作業員を動員して一部を深く掘り下げ、下層における遺構の有無を確認した。その結果、水田層と思われる黒色粘質土層を発見したことから、18日に再度重機を導入してⅢ層の除去を行い、Ⅳ～Ⅺ層の各層上面で遺構検出作業を行ったが、畦畔等を発見することはできなかった。19日にⅪ層上面の調査区全景を撮影した後、プラント・オパール分析をするための土壌サンプルを採取した。25日には重機による埋め戻しと器材の撤収を行い、現地発掘調査を終了した。

2. 調査成果

(1) 層序

I 1層：現代の盛土層で、厚さは約70cmである。

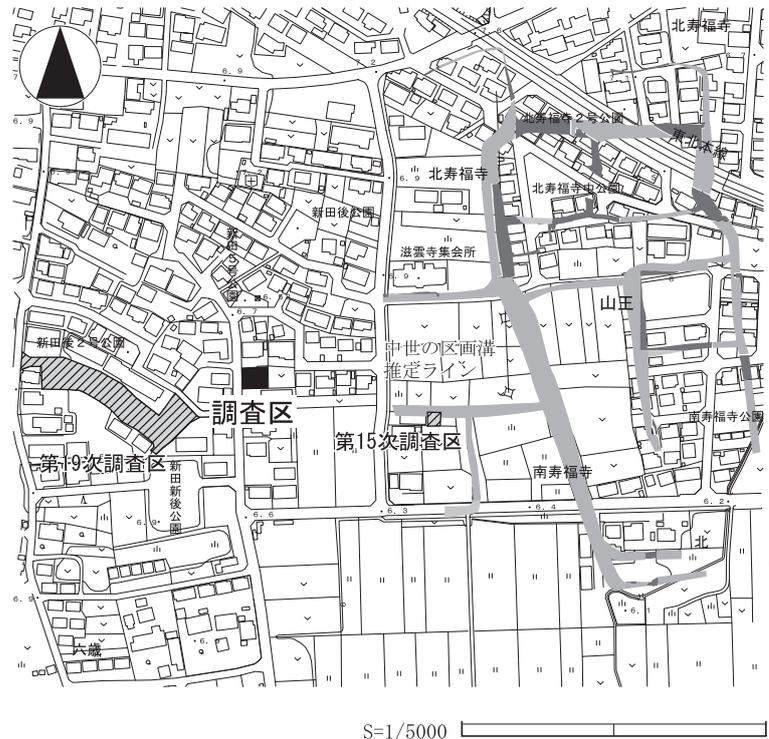
I 2層：現代の水田耕作土で、厚さは約65cmである。

I 3層：現代の水田耕作土で、黒色粘質土層をブロック状に少量含む。厚さは2～10cmである。

Ⅱ層：黒褐色粘質土層でⅢ層に起因する土をブロック状に少量含む。厚さは9～18cmである。

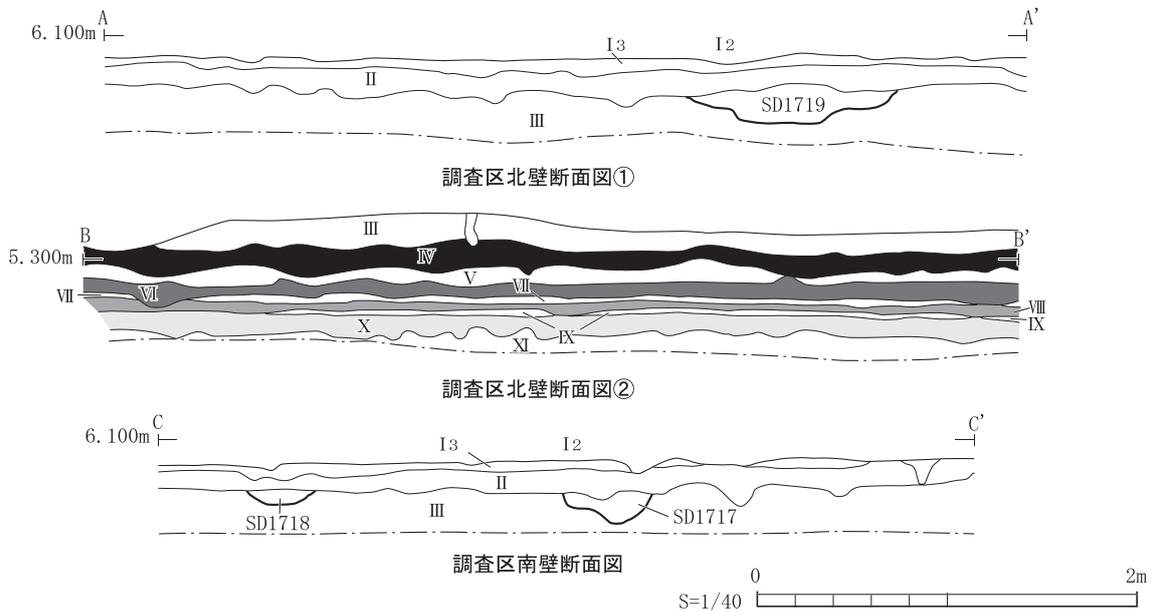
Ⅲ層：緑灰色砂層で、厚さは15～36cmである。この上面で古代の遺構検出面となっている。

Ⅳ層：黒色粘質土層で、厚さは6～18cmである。周辺の調査成果と分析の結果（附章1）から古墳時代の水田耕作土の可能性が考えられる。



第1図 調査区位置図

- V 層：灰黄色粘質土層で、厚さは3～12cmである。
- VI 層：灰オリーブ色粘土層で、厚さは4～13cmである。周辺の調査成果と分析の結果（附章1）から古墳時代の水田耕作土の可能性が考えられる。
- VII 層：灰白色粘土層で、厚さは2～5cmである。
- VIII 層：黒色粘土層で、厚さは2～7cmである。
- IX 層：浅黄色粘土層で、厚さは2～4cmである。
- X 層：黒色粘土層で、厚さは8～15cmである。
- XI 層：灰黄色粘土層である。



第2図 北壁・南壁断面図

(2) 発見遺構・遺物

SD1717溝跡 (第2・3図)

調査区西側で発見した北西から南東方向に延びる溝跡である。規模は、長さ4.4m以上、上幅21～36cm、下幅8～13cm、深さ4～15cmである。方向は北で約31度西に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、緑灰色砂に黒褐色粘質土をブロック状に多く含む。

遺物は土師器甕（B類）が出土している。

SD1718溝跡 (第2・3図)

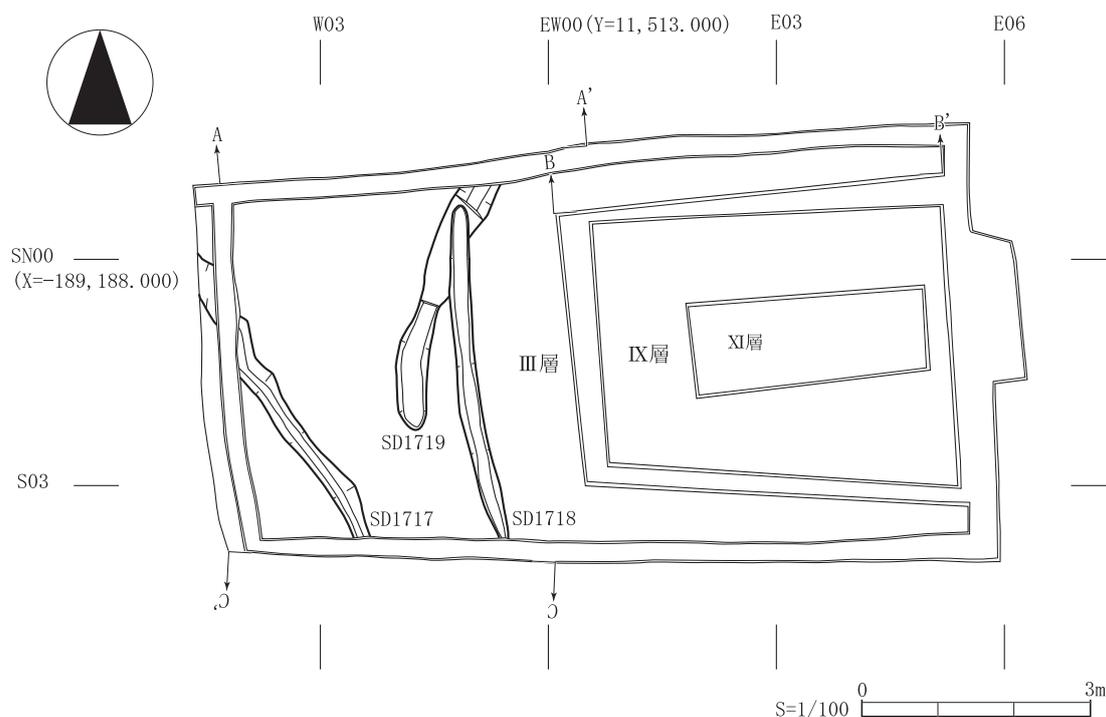
調査区やや西よりで発見した南北方向に延びる溝跡である。SD1719と重複しており、これより新しい。規模は、長さ4.4m以上、上幅11～25cm、下幅5～18cm、深さ4～8cmである。方向は北で約7度西に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、緑灰色砂に黒褐色粘質土をブロック状に少量含む。

遺物は出土していない。

SD1719溝跡（第2・3図）

調査区やや西よりで発見した南北方向に延びる溝跡である。SD1718と重複しており、これより古い。規模は、長さ3.3m以上、上幅25～51cm、下幅16～28cm、深さ2～9cmである。方向は北で約15度東に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、灰色砂に黒褐色粘質土をブロック状に多く含む。

遺物は出土していない。



第3図 遺構平面図

3. まとめ

今回の調査では、III層上面で3条の溝跡を発見した。年代については、SD1717から土師器甕B類が出土していることから8世紀後葉以降のものと見られるが、その詳細は不明である。SD1718・1719については遺物が出土していないが、SD1717と同様にII層に覆われていることや埋土の状況が共通することから、ほぼ同じ年代と考えておきたい。

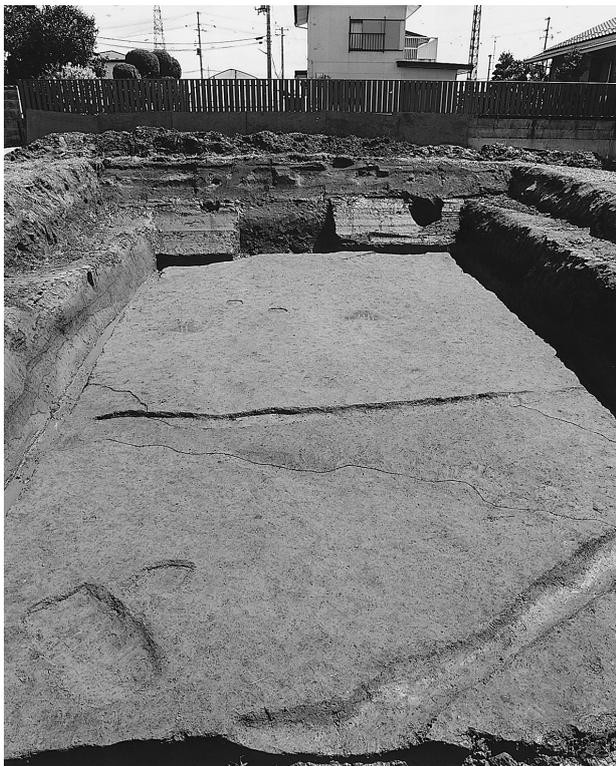
また、今回の調査では下層において灰～黒色の粘質土・粘土層（IV・VI・VIII・X層）を発見し、これらは古墳時代の水田層の可能性が考えられた。畦畔等の水田に伴う遺構を発見することはできなかったが、プラント・オパール分析を実施したところ、IV・VI層からは1,500個/g検出された。これは稲作の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを下回ってはいるが、これらの層の直上ではプラント・オパールが検出されないか、または検出されても少量であることから、水田耕作土の可能性が指摘できるという結果が得られた（附章1）。東側に位置する第15次調査区と西側に位置する第19次調査区では（第1図）、古代の遺構面の下層において古墳時代の水田跡を発見しており、その標高をみると第15次調査では標高5.56～5.62m、第19次調査では標高5.44mとなっている。今回発見したIV層は5.17～5.41m、VI層は5.04

～5.21m、Ⅷ層は4.99～5.09m、Ⅹ層は4.84～5.01mであった。これらのうちⅣ層が位置的に近接する第19次調査の状況に近いことから、Ⅳ層は古墳時代の水田層の可能性があると考えられる。Ⅵ層については、Ⅳ層よりも古い時期のものの可能性が考えられる。これまでの調査では山王遺跡から新田遺跡にかけての広範囲に古墳時代の水田跡が広がっていたことを確認しており、その一部では複数の時期が存在していたことが明らかとなっている。今回のⅣ・Ⅵ層についても同様なものと推定され、これらは古墳時代における水田跡と考えておきたい。なお、Ⅷ・Ⅹ層については第15・19次調査区で発見した古墳時代の水田層と比較して標高が低く、またプラント・オパールも全く検出されなかった。したがって、分析の結果から湿地であったと推定される。

ところで、今回の調査区の東側では、12世紀後半から16世紀にかけて存在した屋敷跡が発見されており(第1図)、青磁や白磁、無釉陶器をはじめとする多くの遺物が出土している。一方、今回の調査では中世の遺構・遺物が全く発見されず、その時期の様相については全く不明である。当該地周辺における中世の土地利用がどのようなものであったか、今後の調査で明らかにしていく必要がある。

参考文献

- (1) 『平成8年度 宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』 1998
- (2) 多賀城市教育委員会『新田遺跡 -第15・17・18次調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第43集 1997
- (3) 多賀城市教育委員会『山王遺跡 -第51・54・57次調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第81集 2006



Ⅲ層上面全景 (西より)



Ⅸ層、Ⅺ層上面全景 (南東より)

写真図版

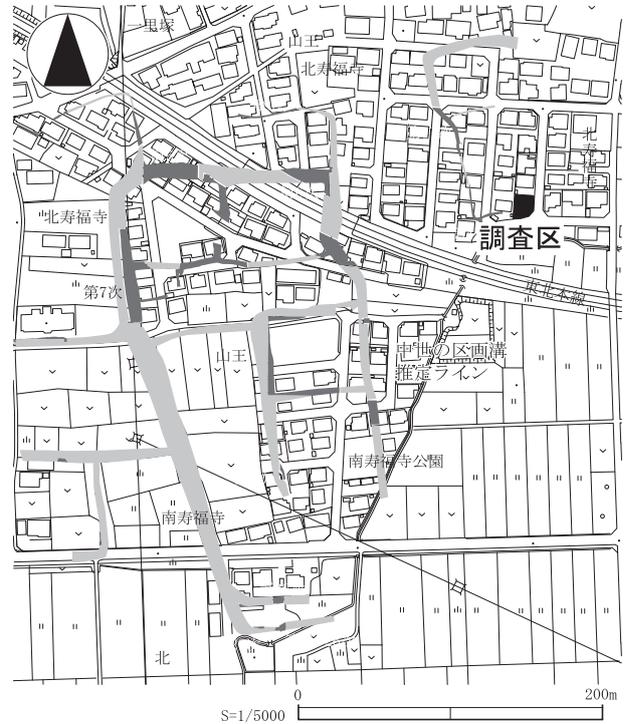
X. 新田遺跡第35次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。当該地は、新田遺跡の東端部に位置し、昭和59年度に発掘調査を実施した第4次調査区の南東側に隣接する。第4次調査においては、多数の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡からなる中世の屋敷跡が発見されている。

今回の住宅建設工事においては、口径20cm、長さ5mのコンクリートパイルを35本打ち込む杭基礎工法を採用することから、地下遺構への影響が懸念された。そのため、遺構の保存を計ることを目的に工法変更の協議を行ったが、基礎構造の強度を得るために必要不可欠ということで計画どおりの実施となった。この他については、地権者から全面的な協力が得られたことから、平成18年9月に承諾書及び依頼書の提出を受け、発掘調査の実施に至ったものである。

調査は、10月12日から開始した。はじめに重機により盛土及び表土の除去を行い、掘削した土は場外に搬出した。引き続き、遺構検出作業を実施し、調査区西側の堆積層Ⅲ層上面において南北方向に延びる大規模な溝跡（SD1721）を検出した。この溝跡については、掘り込み面等から中世のものと判断し、その検出状況を写真撮影した後、掘り下げを開始した。併せて、調査区東半部においてⅢ層を掘り下げ、続いてⅣ層上面における検出作業を行ったが、遺構は検出されなかった。溝跡については、10月31日までに掘り下げ、写真撮影、実測図作成までの一連の作業を終了した。その後、溝跡壁面で観察されたⅥ層が水田耕作土の可能性があったことより、調査区中央部で深掘りを行った。調査においては、Ⅵ層除去後における地形の凹凸の平面図作成、土層堆積状況の断面図作成を行い、さらに深掘区の2箇所ですべり採取した。これらの作業の後、重機による埋め戻しを行い、11月9日に調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序

I1層：灰オリーブ砂で、厚さは約80cmである。現代の盛土。

I2層：暗灰色粘質土で、厚さは約10cmである。現代以前の水田耕作土。

II層：灰色粘質土で、厚さは約5cmである。調査区南半部に分布する。

Ⅲ1層：黒褐色土で、厚さは5～10cmである。調査区北東部に分布する。黒色土を斑状に若干含み、さらに黄灰色砂質土を混入する。

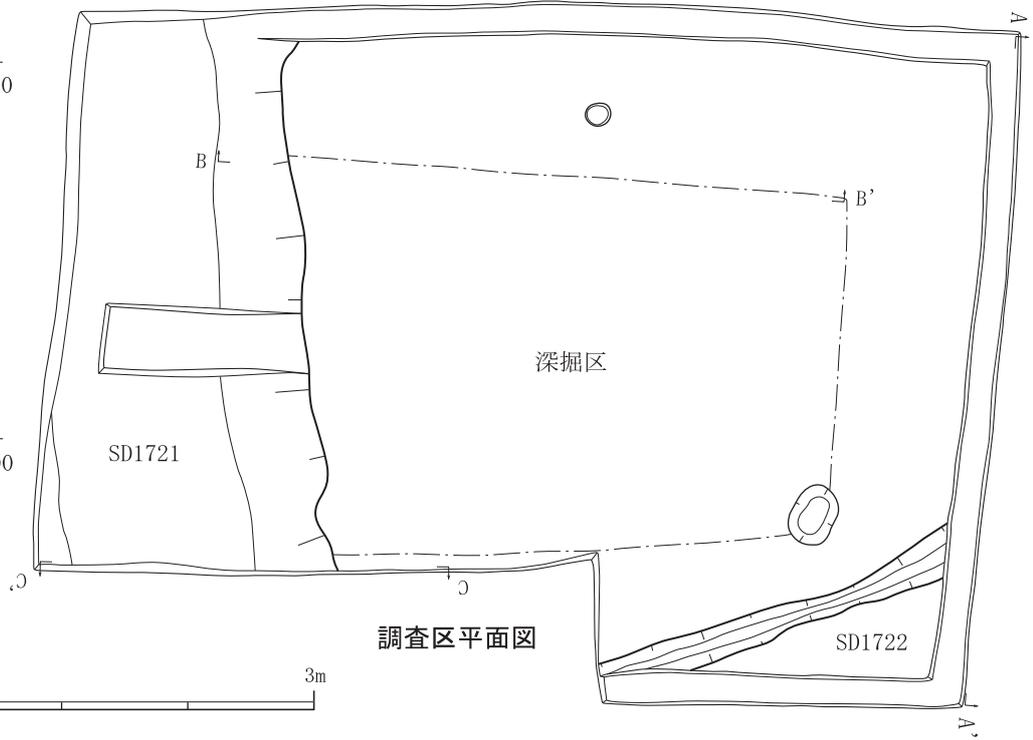


X=-189,045.000

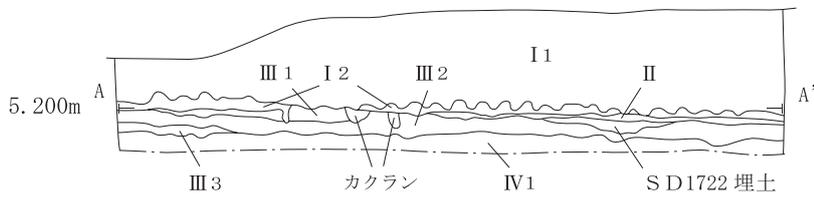
Y=11,936.000

Y=11,939.000

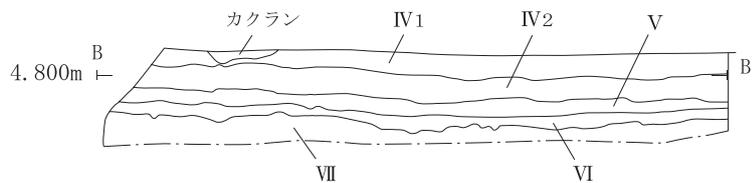
X=-189,048.000



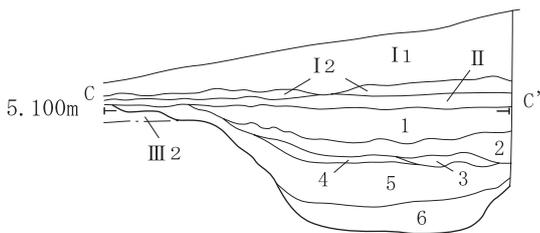
調査区平面図



東壁断面図



北壁断面図



SD1721 断面図

層位	土色・土性	備考
1	黒褐色土	オリーブ灰色砂質土を小ブロック状に若干含む。
2	黒褐色土	にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む。
3	黒褐色土	にぶい黄色砂質土と黒色土を小ブロック状に含む。
4	オリーブ灰色砂	下層付近で黒色粘質土を層状に含む。
5	黒色粘土	黒色砂質土と互層に堆積。下層との境に植物遺存体の薄い土層がみられる。
6	黒色粘土	黒色砂質土を混入。オリーブ灰色砂質土を斑状及び小ブロック状に含む。

第2図 遺構平面図・断面図

- Ⅲ2層：黒褐色土で、厚さは10～15cmである。調査区全域に分布する。黄灰色砂質土を混入し、さらに遺物を若干含んでいる。中世の遺構検出面。
- Ⅲ3層：黒褐色土で、色調はⅢ2層よりやや濃い。厚さは5～8cmである。調査区北側に分布する。にぶい黄色砂質土を混入する。また、下層との境付近に灰白色火山灰斑を若干含んでいる。
- Ⅳ1層：にぶい黄色砂質土で、厚さは15～20cmである。同色の砂及び酸化鉄斑を含んでいる。
- Ⅳ2層：にぶい黄色砂質土で、厚さは20cm前後である。同色の砂を含んでいる。また、上層との境に厚さ2～3cmの黄灰色粘質土層がみられる。
- V層：灰黄色粘質土で、厚さは10～15cmである。黒褐色粘質土と互層に堆積している。
- Ⅵ層：黒色粘質土で、厚さは5～12cmである。オリーブ灰色砂を斑状及びブロック状に若干含んでいる。
- Ⅶ層：オリーブ灰色砂で、厚さは30cm以上である。粗い粒の砂層。

(2) 発見遺構と遺物

S D1721溝跡

調査区西側のⅢ2層上面で検出した南北方向の溝跡である。調査区全域の約1/3を占めるが、西側が調査区外にかかるため全容は知り得ない。方向は、東端ラインでみると北で約5度西に偏している。規模は、上幅が調査区内では2.3mまで確認した。下幅は1.38～1.50m、深さは1m前後である。断面形は、逆台形を呈しているが、底面からの立ち上がりは比較的緩やかである。底面レベルは南側にわずかに傾斜するが、その比高は約5cmと非常に少ない。埋土は大きく2層に分けられる。上層はにぶい黄色砂質土等を含んだ黒褐色土、下層は黒色粘質土で、中程に植物遺存体を含む薄い土層がみられる。また、上層と下層はオリーブ灰色砂の薄い土層によって分けられる。遺物は、中世の無釉陶器甕、古代の土師器杯・甕、須恵器杯・瓶、甕、須恵系土器杯、瓦が出土している。すべて破片であり、全体の形状を復元できるものはない。

S D1722溝跡

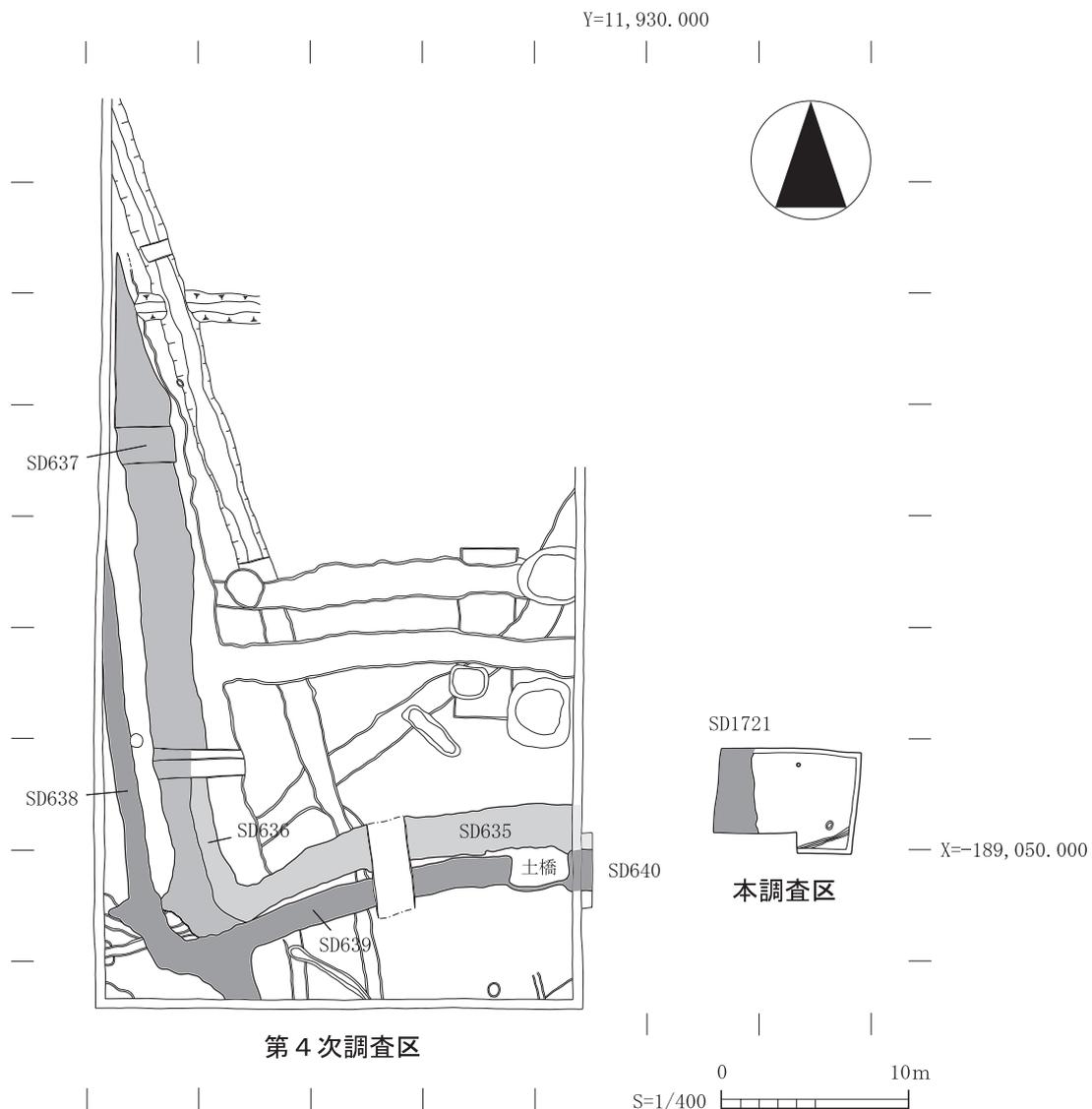
調査区南東部のⅢ2層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡である。方向は、東で約19度北に偏している。規模は、上幅16～34cm、下幅5～12cm、深さは約10cmである。底面は平坦に近く、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層で、黒色粘質土と黄褐色砂質土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

3. まとめ

今回の調査で発見した2条の溝跡は、検出面や出土遺物等からみて中世に属するものと考えられる。西側隣接地で実施した第4次調査においては、中世の屋敷跡が発見されており、掘立柱建物跡や井戸跡を囲んで溝跡が巡っている。調査区南半部では屋敷地の西辺と南辺を区画する溝跡が重複し、5時期の変遷が確認されている。このうち、南辺を区画する東西溝であるS D640(639)溝跡とS D635溝跡の延長線上に本調査区が位置する(第3図参照)。本調査区検出のS D1721溝跡は、位置関係や方向、規模等からみて、第4次調査区で発見した屋敷跡に関わる溝跡であると考えられる。次に、S D640溝跡は南辺区画溝のうち最も新しい時期のものであるが、本調査区では平面及び断面ともにその延長部が検出されない。このことより、S D1721溝跡はS D640溝跡と接続する一連の溝跡であると理解され、屋敷跡の東辺区画溝であ

る可能性が強い。また、SD640溝跡より古い南辺区画溝であるSD635溝跡についてみると、同様にSD1721溝跡の東側には延びてこないことが確認できることより、これもこの付近で南北溝に接続する可能性があると考えられる。なお、第4次調査における中世の遺構は、A期とB期の2つの時期に分けられる。SD640溝跡等はB期に属し、その年代はおおよそ15・16世紀と考えられている。したがって、本調査区検出のSD1721溝跡も同様の時期のものといえる。

このほか、今回の調査においては、堆積層のVI層について古墳時代の水田耕作土の可能性があったことから、深掘区の北壁西側と東壁南側の2箇所、上下の2層（V層とVI層）とともに試料を採取して土壌分析を行った。その結果、すべての試料でイネのプラント・オパールは検出されなかった（附章2）。VI層からはヨシ属が高密度で検出され、VI層堆積時の調査区付近はヨシ属が繁茂する湿地の環境であったとの分析結果が得られた。



第3図 本調査区及び第4次調査区溝跡配置図

遺構検出状況（東より）



S D1721掘り下げ状況（東より）



S D1721掘り下げ状況（北より）



附章1 多賀城市新田遺跡第34次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

新田遺跡第34次調査では、古墳時代とされる複数の層準で水田耕作土とみられる堆積層が認められた。そこで、これらにおける稲作の可能性を検討するために、プラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

分析試料は、土層断面において上位より、Ⅲ層 (古墳時代～古代, 試料No.1)、Ⅳ層 (古墳時代の水田層, 試料No.2)、Ⅴ層 (古墳時代の自然堆積層, 試料No.3)、Ⅵ層 (古墳時代の水田層, 試料No.4)、Ⅷ層 (古墳時代の水田層?, 試料No.5)、Ⅹ層 (古墳時代の水田層, 試料No.6)、Ⅺ層 (最終遺構検出面, 試料No.7) において採取された計7点の堆積物である。試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^{-5}g) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節型は1.16、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科 (メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、その他) および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネは、Ⅲ層、Ⅳ層およびⅥ層で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属はすべての層より検出されている。Ⅷ層では非常に高い密度であり、Ⅹ層でも高い密度である。ススキ属型はⅪ層を除く各層で検出されているが、いずれも低い密度である。メダケ節型は、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層およびⅩ層で、ネザサ節型はすべての層で、クマザサ属型はⅪ層を除く各層でそれぞれ検出されているが、いずれも低い密度である。

5. 考察

イネのプラント・オパールが検出されたのは、Ⅲ層、Ⅳ層およびⅥ層の3層準である。このうち、Ⅳ層とⅥ層は古墳時代の水田層と推定されている。プラント・オパール密度はⅢ層で500個/g、Ⅳ層とⅥ層ではともに1,500個/gであり、いずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを下回っている。ただし、Ⅳ層では直上のⅢ層に比べ若干高い密度でありピークが認められ、Ⅵ層については直上からはまったく検出されていないことから、いずれも上層からの混入の危険性は考えにくい。また、発掘調査において両層はともに層位的なものから古墳時代の水田層の可能性が考えられている。こうしたことから、Ⅳ層ならびにⅥ層については水田耕作土の可能性が指摘できる。なお、プラント・オパール密度が低いことに関しては次のような要因が考えられる。すなわち、1) 稲作の行われた期間が短かった、2) 稲藁の多くが耕作地から持ち出されていた、3) イネの生産性が低かった、4) 土層の堆積速度が速かった、などである。なお、古墳時代～古代の堆積層とされるⅣ層では、プラント・オパール密度が500個/gと低い値であることから、上層あるいは他所からの混入と思われる。

一方、同じく古墳時代の水田層とされたⅧ層とⅩ層からはイネのプラント・オパールは検出されていない。このことから、プラント・オパール分析の結果からはこれらの層で稲作が営まれていたことを積極的に支持することはできない。また、古墳時代の自然堆積層であるⅤ層、最終遺構検出面のⅪ層についても稲作の痕跡は認められない。

イネ以外の分類群の検出状況を見てみると、ほとんどの分類群が低密度である中、Ⅷ層とⅩ層でヨシ属が高い密度で検出されている。Ⅸ層は分析対象ではないため詳細は不明だが、少なくともⅩ層とⅧ層の堆積時は、調査地はヨシ属の繁茂する湿地であったと推定される。Ⅲ層～Ⅵ層でもヨシ属は多くはないが検出されていることから、これらの層準の時期も調査地はそれほど乾いた環境ではなかったと思われる。

表1 多賀城市新田遺跡第34次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅷ層	Ⅹ層	Ⅺ層
分類群 (和名・学名)	層位							
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	5	15		15			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	10	10	8	96	54	18
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	10	20	5	8	6	6	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	5	5	5			6	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	5	20	20	8	6	12	6
クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa)</i>	5	5	5	8	6	30	
その他	Others	5	5	10	8	6	6	12
未分類等	Others	95	141	100	143	132	114	90
プラント・オパール総数	Total	135	221	155	198	252	228	126
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0として算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.15	0.44		0.44			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.32	0.64	0.63	0.48	6.08	3.42	1.13
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.12	0.25	0.06	0.09	0.07	0.07	
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.06	0.06	0.06			0.07	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.02	0.10	0.10	0.04	0.03	0.06	0.03
クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa)</i>	0.04	0.04	0.04	0.06	0.05	0.23	

6. まとめ

新田遺跡第34次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、古墳時代の水田層とされるⅣ層とⅥ層においてイネのプラント・オパールが検出されたことから、両層において稲作が営まれていたことが確認された。ただし、プラント・オパール密度はやや低く、長期間にわたって安定した稲作が営まれていたかどうかは不明である。一方、同じく古墳時代の水田層とされたⅧ層とⅩ層からはイネのプラント・オパールは検出されず、これらの層で稲作が行われた可能性を認めることはできなかった。なお、Ⅷ層とⅩ層の堆積時の調査地はヨシ属の繁茂する湿地であったと推定された。

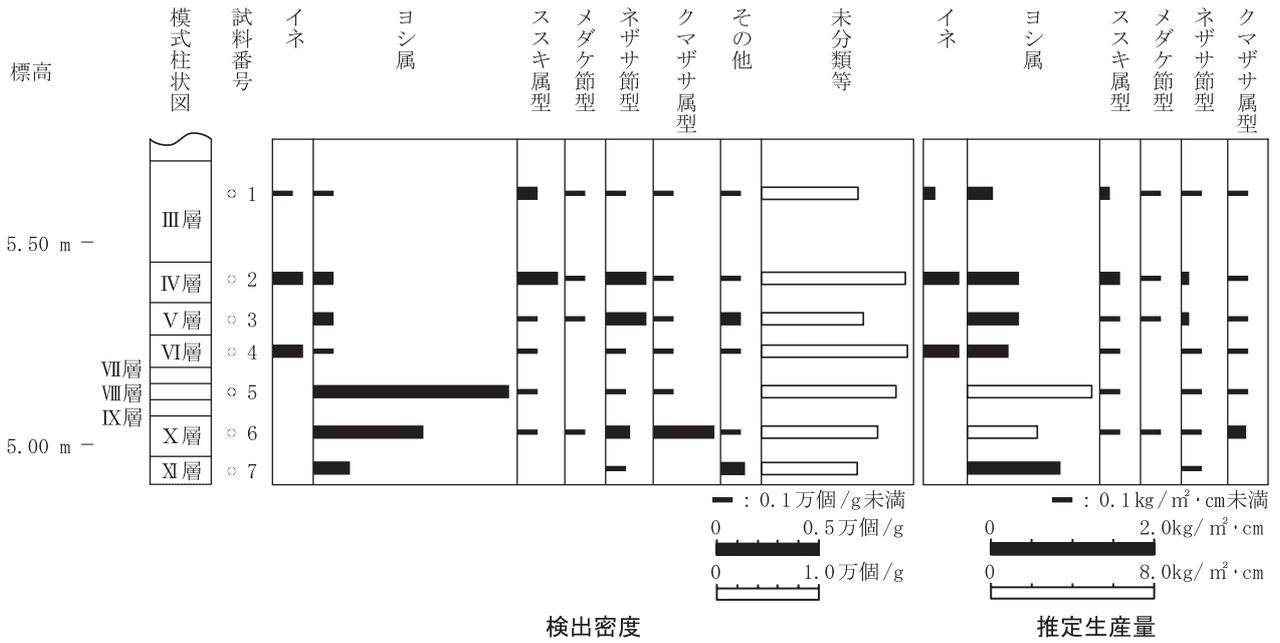
文献

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.

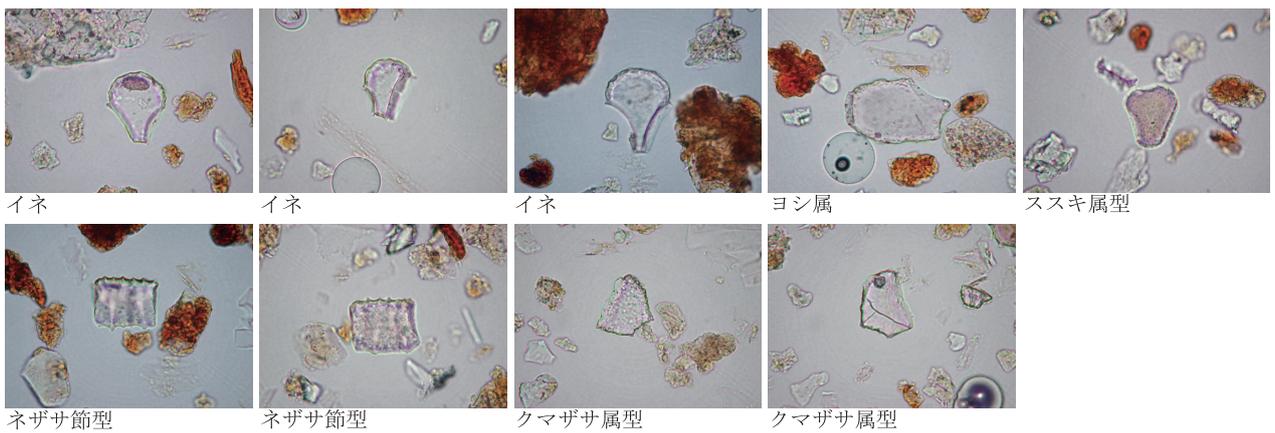
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.



第1図 新田遺跡第34次調査のプラント・オパール分析結果



プラント・オパールの顕微鏡写真

附章2 多賀城市新田遺跡第35次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

新田遺跡第35次調査では、堆積層のVI層において当時の水田耕作土の可能性が推定された。そこで、プラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討することになった。

2. 試料

調査対象は、深掘区の北壁西側 (A地点) と東壁南側 (B地点) の2箇所である。分析試料は、両地点とも上位よりV層 (灰黄色粘質土)、VI層 (黒色粘質土)、VII層 (オリーブ灰色砂) において採取された6点である。試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^{-5}g) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である (杉山, 2000)。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科 (メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他) および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

(1) A地点

V層とVI層では、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が、VII層では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型の各分類群が検出された。プラント・オパール密度は、V層でチマキザサ節型がやや高い以外はいずれも低密度である。

(2) B地点

V層では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型が、VI層では、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が、VII層では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型の各分類群が検出された。VI層でヨシ属が非常に高い密度である以外はいずれも低い密度である。

5. 所見

水田跡の可能性が考えられていたVI層からは、A地点、B地点ともにイネのプラント・オパールは検出されなかった。また、その直上のV層および直下のVII層でもイネのプラント・オパールは認められなかった。こうしたことから、VI層において稲作が営まれていた可能性を積極的に肯定することはできない。さらに、V層とVII層についても稲作が行われた痕跡は認められない。

なお、B地点のVI層からはヨシ属が高密度で検出されており、他のプラント・オパールは低密度である。したがって、VI層堆積時のB地点一帯は、ヨシ属の繁茂する湿地の環境であったと推定される。

その他の分類群はいずれも低密度であることから、調査地の植生を反映するものではなく周辺からの混入と判断される。

文献

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表 1 多賀城市新田遺跡第35次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		A地点			B地点		
分類群(和名・学名) \ 層位		V層	VI層	VII層	V層	VI層	VII層
イネ科	Gramineae (Grasses)						
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	18	18			60	6
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	12	24	6	12	18	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	12	6	12	12	18	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	24	12	6	24	24	6
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	72	36	24	24	30	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	6	6			6	
その他	Others	12	12	6	12	6	6
未分類等	Unknown	179	180	109	132	174	54
植物珪酸体総数	Total	335	294	163	216	336	90
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出							
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.13	1.14			3.78	0.38
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.15	0.30	0.07	0.15	0.22	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.14	0.07	0.14	0.14	0.21	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.11	0.06	0.03	0.12	0.12	0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.54	0.27	0.18	0.18	0.22	0.09
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.02	0.02			0.02	

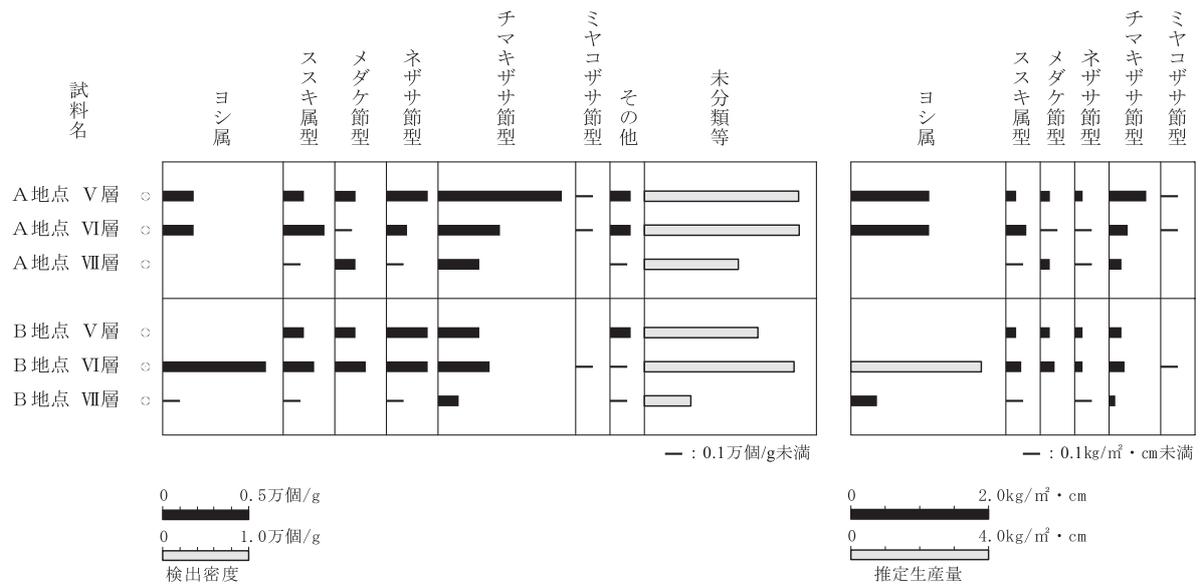


図1 プラント・オパール分析結果



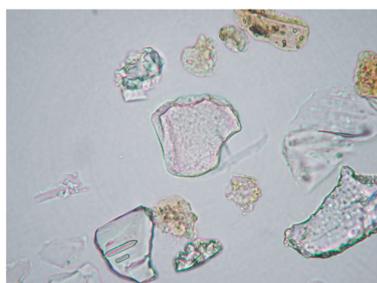
ヨシ属



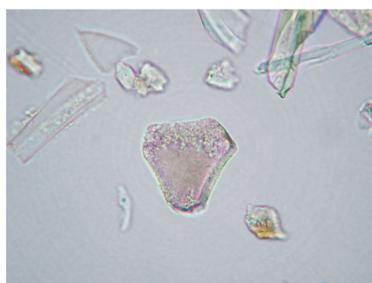
ヨシ属



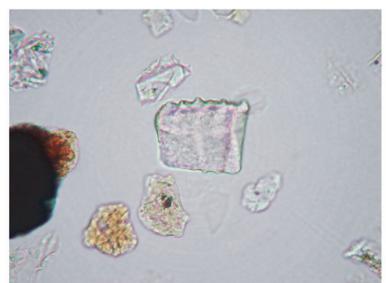
ヨシ属



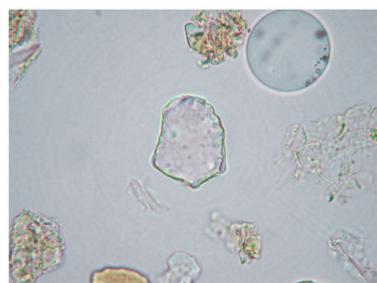
ススキ属型



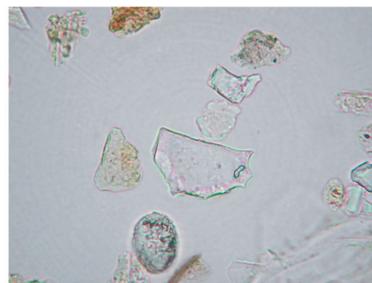
ススキ属型



ネザサ節型



チマキザサ節型



チマキザサ節型



チマキザサ節型

50 μm

プラント・オパールの顕微鏡写真

XI. 西沢遺跡第14次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年3月28日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。今回の開発計画は基礎工事に柱状改良杭を31本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、申請された工法で実施することに決定した。これにより、平成18年6月12日、地権者より依頼書及び承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。なお、本調査地点は、市営住宅新築に伴う試掘調査区や第7次調査区に隣接していることから、湿地的な土壌環境が当初より



第1図 調査区位置図

予想された。調査は6月20日から開始し、はじめに重機を使用して盛土(I層)及び古代以降の堆積層(II・III層)の除去を行い、湿地堆積土であるIV層上面を検出した。22日からは作業員を動員して平面プランの検出を行い、湿地の輪郭を確認した。26日からは堆積土の掘り下げと並行して調査区際に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。27日、平面・断面での土層観察の結果、東側に傾斜する落ち際の部分で、堆積土中に灰白色火山灰を確認したことから、概ね平安時代には埋まったものと考えられた。29日までには、基盤層のX層まで掘り下げ、調査区全景および土層断面の写真撮影、平面・断面図の作成を行い、翌30日には埋め戻しを行って一切の調査を完了した。

2. 調査成果

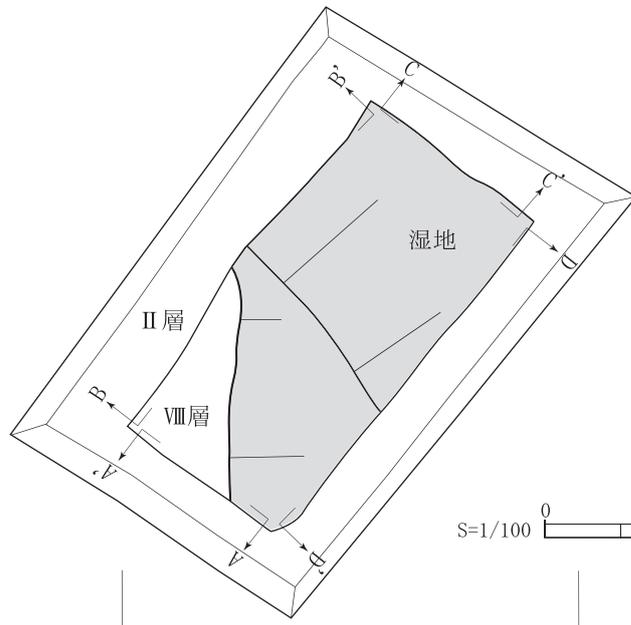
(1) 層 序

今回の調査区で確認された層序は以下の通りである。IV～VII層は湿地堆積土。

- I 層：現代の盛土層で、厚さは50～90cmである。
- II 層：青灰色粘土で、調査区西端ではみられないが、東に向かって厚くなっていき、東端では最大約50cmを計る。上面は攪乱溝の掘り込み面である。
- III 層：褐灰色粘質土で、厚さは5～35cmである。調査区の西半部に分布する。
- IV 層：にぶい褐色粘質土で、厚さは20～40cmである。酸化しており、マンガン粒を多量に含む。
- Va 層：灰白色粘質土で、厚さは10～25cmである。均質。
- Vb 層：灰白色火山灰土で、厚さは2～10cmである。標高の高い方はブロック状、低い方は面的に堆積する。下面には凹凸がある。
- Vc 層：灰白色粘土で、厚さは5～20cm。均質。下面には凹凸がある。

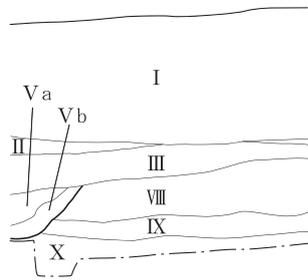
X=-188,464.000

Y=14,249.000

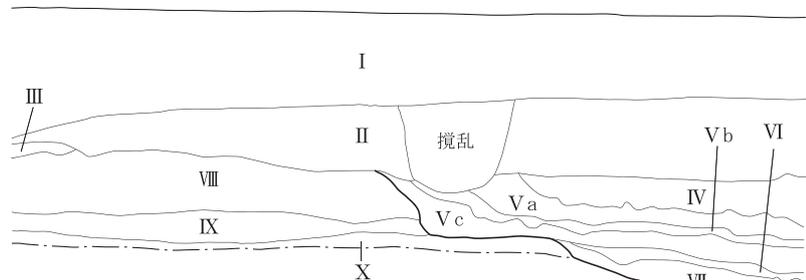


平面図

A 5.000m A' B 5.000m B'

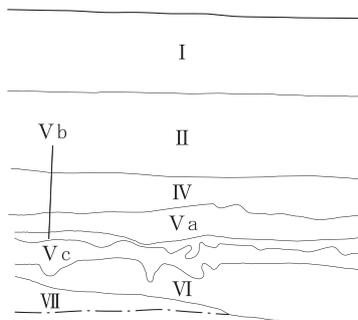


西壁断面図

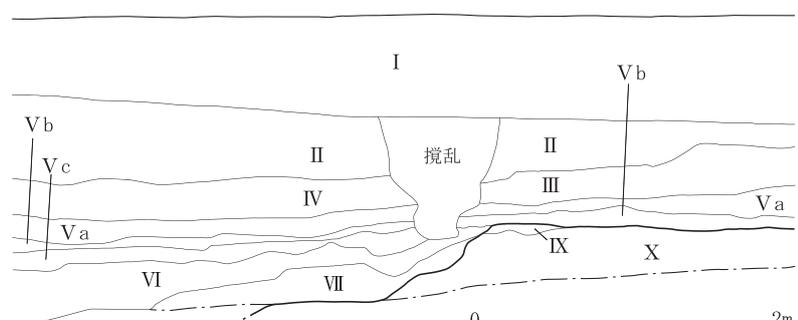


北壁断面図

C 5.000m C' D 5.000m D'



東壁断面図



南壁断面図

S=1/50 0 2m

第2図 調査区平面・断面図

VI 層：黒褐色泥炭土で、厚さは10～40cmである。未分解の植物遺体、木片を含むいわゆるスクモ層である。

VII 層：灰白色粘土で、厚さは30cm以上である。均質で小礫を含む。

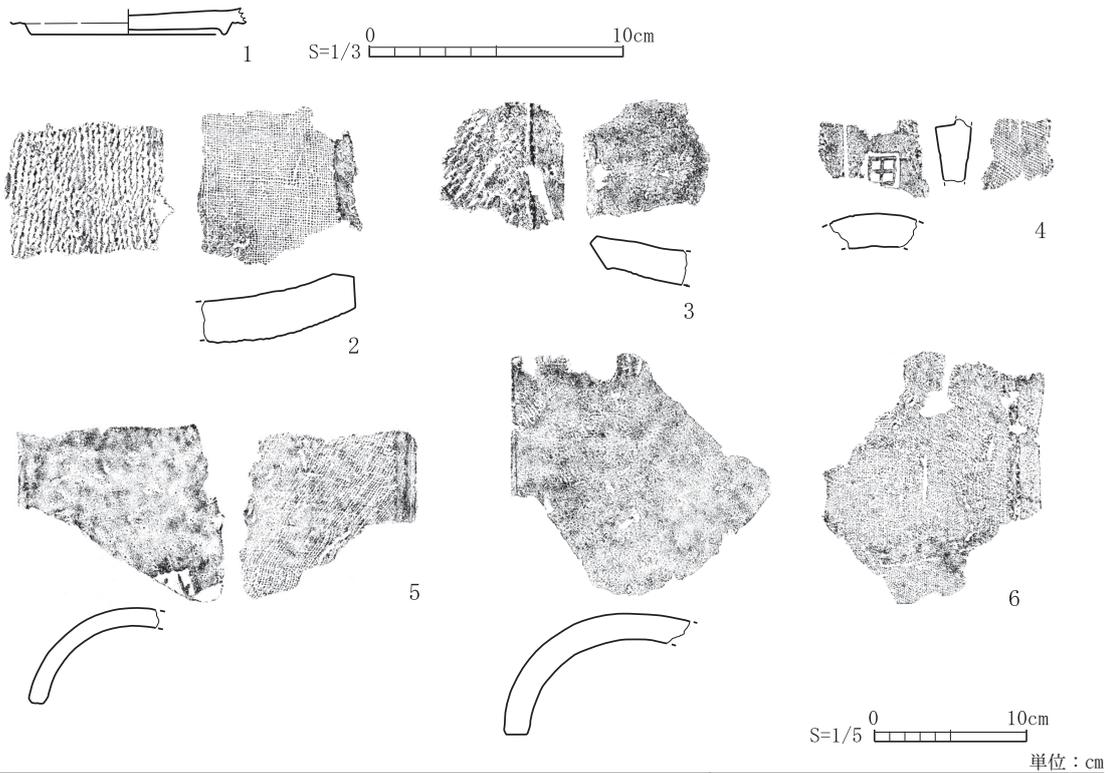
VIII 層：にぶい褐色砂質土で、厚さは25～40cmである。均質でマンガン粒を多量に含む。

IX 層：黄灰色粘土で、厚さは5～20cmである。均質。

X 層：明黄褐粘質土（基盤層）で、厚さは30cm以上である。小礫を多量に含む。

(2) 出土遺物

I 層より土師器杯、須恵器鉢・甕、須恵系土器杯、施釉陶器皿、平瓦・丸瓦、II 層より土師器、須恵器杯・盤、平瓦・丸瓦、IV 層より土師器甕、須恵器甕、平瓦・丸瓦、Va 層より土師器甕、平瓦・丸瓦、Vb 層より土師器杯、須恵器蓋・甕、平瓦・丸瓦、Vc 層より土師器杯、須恵器杯・甕、平瓦・丸瓦、VII 層より須恵器甕が出土した。いずれも破片であるが、なかでも瓦の出土量が最も多い。



番号	種類	層位	特徴		登録番号	備考
			外面(凸面)	内面(凹面)		
1	施釉陶器・皿	I	底部:回転ヘラケズリ		R 1	底径:(7.8) 円錐ピン痕 瀬戸・美濃窯
2	平瓦	Va	縄叩き	布目	R 2	II C 類
3	平瓦	IV	縄叩き	ナデ	R 3	II B 類-b
4	丸瓦	IV	ロクロナデ	布目	R 5	II B 類-a 刻印「田」
5	丸瓦	IV	ロクロナデ	布目	R 6	II a 類 刻印「伊」カ
6	丸瓦	IV	叩き目→ロクロナデ	布目	R 4	II B 類-a

第3図 出土遺物

3. まとめ

今回の調査地点は、多賀城跡外郭東辺に隣接し、地形的には西から東へと傾斜する丘陵の裾にあたる。隣接する市営住宅新築に伴う試掘調査区や第7次調査区では、スクモ層や粘土の互層が堆積するなど湿地的な土壌環境が確認されていた。調査の結果、隣接調査区と同様の堆積状況が確認され、10世紀前葉に降下したとされている灰白色火山灰の自然堆積層もみられたことから、古代においても、丘陵から沖積地に移行する場所であることが判明した。



調査区遠景（南東より）



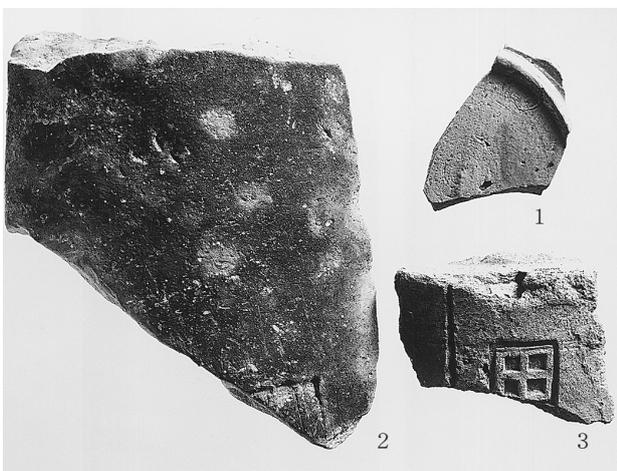
湿地検出状況（北東より）



調査区東壁断面



湿地完掘後の状況（南より）



- 1 施釉陶器皿（第3図1 R1）
- 2 丸瓦（第3図5 R6）
- 3 丸瓦（第3図4 R5）

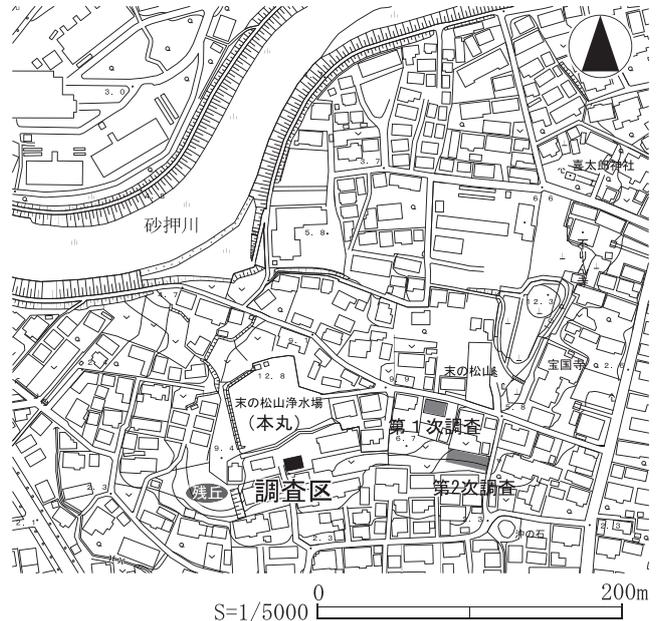
XII. 八幡館跡第3次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成18年11月2日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについて協議書が提出された。今回の開発計画は基礎工事に鋼管杭を37本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、申請された工法で実施することに決定した。これにより、平成18年11月20日、地権者より依頼書及び承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は11月30日から開始し、はじめに重機を使用してI層～IV層の除去を行った。12月1日、作業員を動員して遺構検出作業を行い、V層上面で東西方向の溝状プランを検出した。

4日からはこの遺構の規模を知るため調査区東・南壁際に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。平面・断面での土層観察の結果、東西方向にのびる大規模な溝跡であることが判明した。6日からは埋土の掘り込みを開始し、遺物が散発的に最下層（4層）の北壁際において出土する傾向があることから、7日には重機によって4層上面まで掘り下げを行い、さらに西側へ調査区の拡張を行った。翌日、完掘した後、調査区全景および土層断面の写真撮影を行った。11日には平面・断面図の作成を行い、12～13日にかけて埋め戻しを行って一切の調査を完了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層 序

今回の調査区で確認された層序は以下の通りである。なお、V a層とV b層は同一層の可能性はあるが、直接の関係がつかめないため分離した。

I 1層：現代の盛土層及び攪乱層で、厚さは3～55cmである。

I 2層：現代の表土層で、厚さは3～20cmである。

II 層：にぶい黄褐色砂質土で、厚さは2～45cmである。

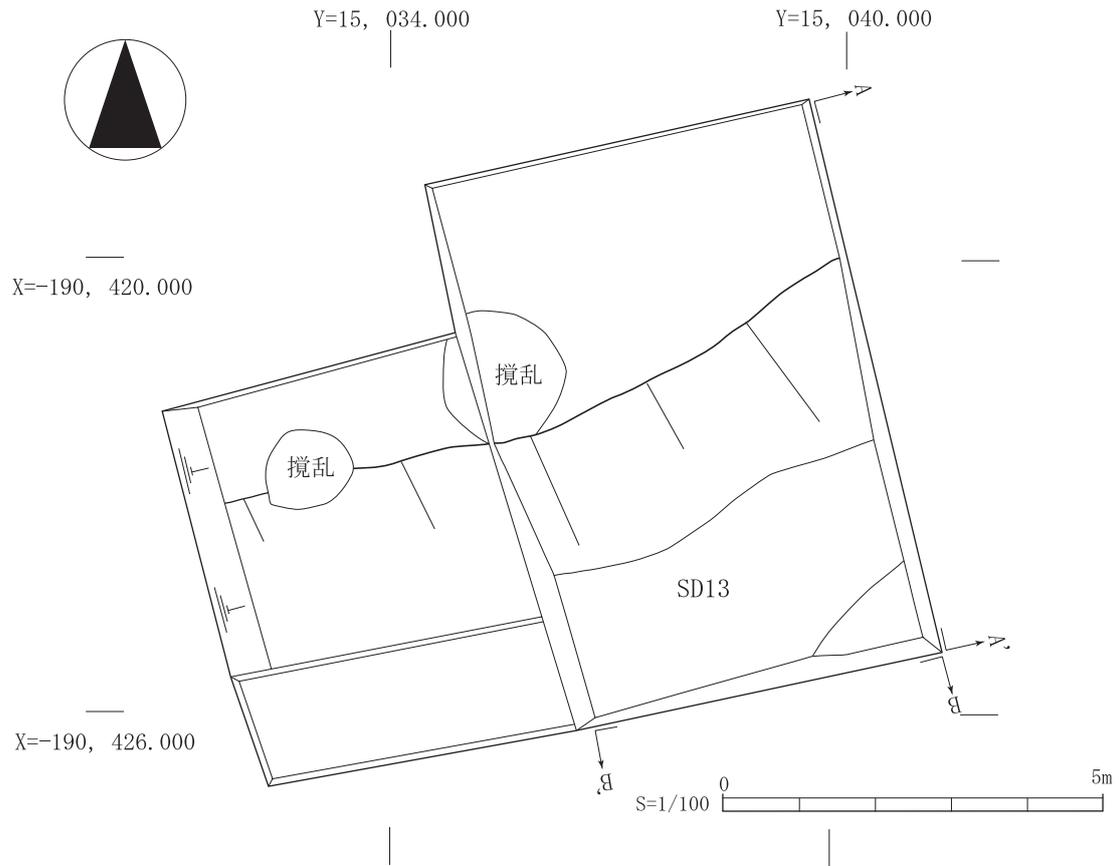
III 層：灰黄褐色砂質土で、厚さは2～40cmである。

IV1層：灰黄褐色砂質土で、厚さは2～50cmである。

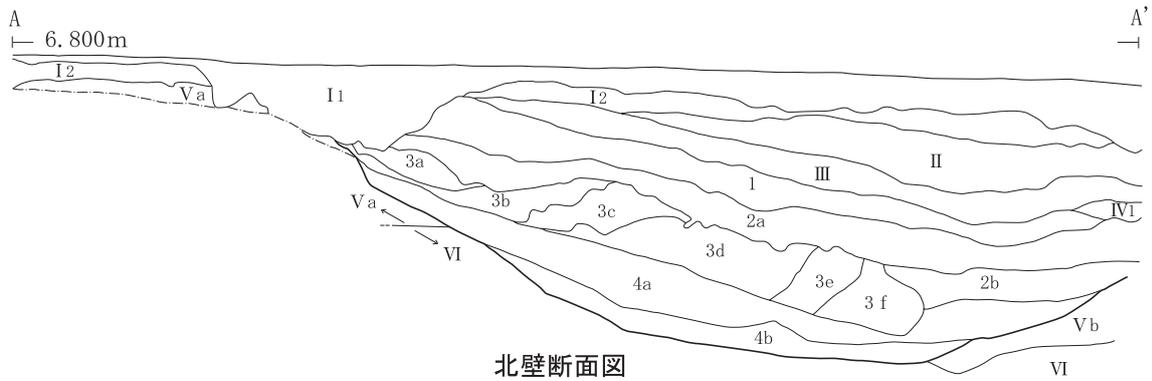
IV2層：灰黄褐色砂質土で、厚さは2～40cmである。大小礫が多量に混入する。

V a層：地山の黄橙色砂で、厚さは約1mである。

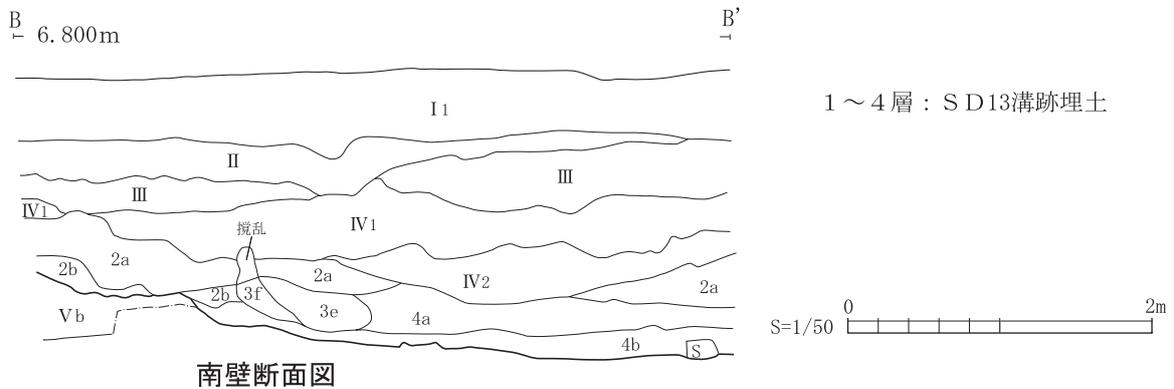
V b層：地山の黄灰色砂で、厚さは40cm以上である。ややグライ化する。



平面图



北壁断面图



南壁断面图

1~4層：SD13溝跡埋土

第2图 遺構平面・断面图

VI 層：地山の岩盤層である。

(2) 発見遺構と遺物

SD13溝跡

調査区南半で検出した東西方向の溝跡である。Ⅲ・Ⅳ層によって全面を覆われている。Ⅴa・Ⅴb層及びⅥ層を掘り込んで構築している。規模は、長さ8.7m以上、上幅4.6m以上、下幅2.3m、深さ1.9mを計る。底面は北側よりやや傾斜するが、ほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は大別4層に分けられる。1層が明黄褐色砂質土、2a～2b層が黒褐色粘質土～褐灰色粘質土である。3層は6層に細分され、橙色粘土塊と灰黄褐色砂質土塊が互層となる。調査区東端部で部分的に認められた。4層は黄褐色砂質土で2層に細分される。下層には大小の礫が多量に混入する。いずれの層も北側より南側に向かって堆積している。

遺物は4層より古代～中世にかけてのものが出土している。中世のものには、かわらけ、白磁皿、施釉陶器瓶子、無釉陶器甕、瓦質土器火鉢があり、古代のものは小片で、土師器杯、須恵系土器小型杯がある。この他、1層から瓦質土器挿鉢が出土した。第3図1・3は常滑産とみられる無釉陶器甕の口縁部破片である。1は縁带上端部が口縁上端部より突き出していることから、常滑窯編年の9型式に比定され15世紀前半にあたる^(註1)。3は縁帯部が頸部に密着し、その位置が折り返し頂部より下位にあることや口縁部内側に窪みが認められることから、11型式に比定され16世紀前半にあたる。4は施釉陶器瓶子の肩部破片で、外面に灰釉が施されており、古瀬戸編年の後期に位置づけられる。年代的には14世紀後半～15世紀と考えられている^(註2)。5は瓦質土器火鉢の内弯する口縁部破片である。口縁直下にS字文、2条の突帯の間に雷文のスタンプが押捺される。6は瓦質土器火鉢の底部付近の破片で、1条の突帯がみられる。上部の割れ口には、漆による接着痕がある。7は瓦質土器挿鉢の口縁部破片で、口縁部上端に水平面を作り外側に細く張り出す。内面には6本単位の太い筋目が直線的に入る。東北地方では15世紀頃に出現するとされている^(註3)。8は白磁皿の破片で、所謂端反り皿である。中国の明代のもので、16世紀を中心とした年代が与えられている^(註4)。この他に、埴塼、鉄釘があるが、古代～中世のものとしておく。

3. まとめ

- (1) 今回発見したSD13溝跡は、北側に隣接する通称「本丸」(末の松山浄水場敷地)と呼ばれている方形の台地を囲むような方向性を見せていることや、大規模な造り、遺物の年代観より、中世城館八幡館に付随する施設(空堀)と考えられる。
- (2) SD13溝跡最下層(4層)より出土した遺物は、施釉陶器瓶子が14世紀代までさかのぼるものの、他はいずれも15～16世紀の特徴を有しており、それ以降のものは含まれていない。このことから本溝跡は、16世紀代には埋没し始めたものと考えられる。天正18年(1590年)、留守政景が黒川郡大谷

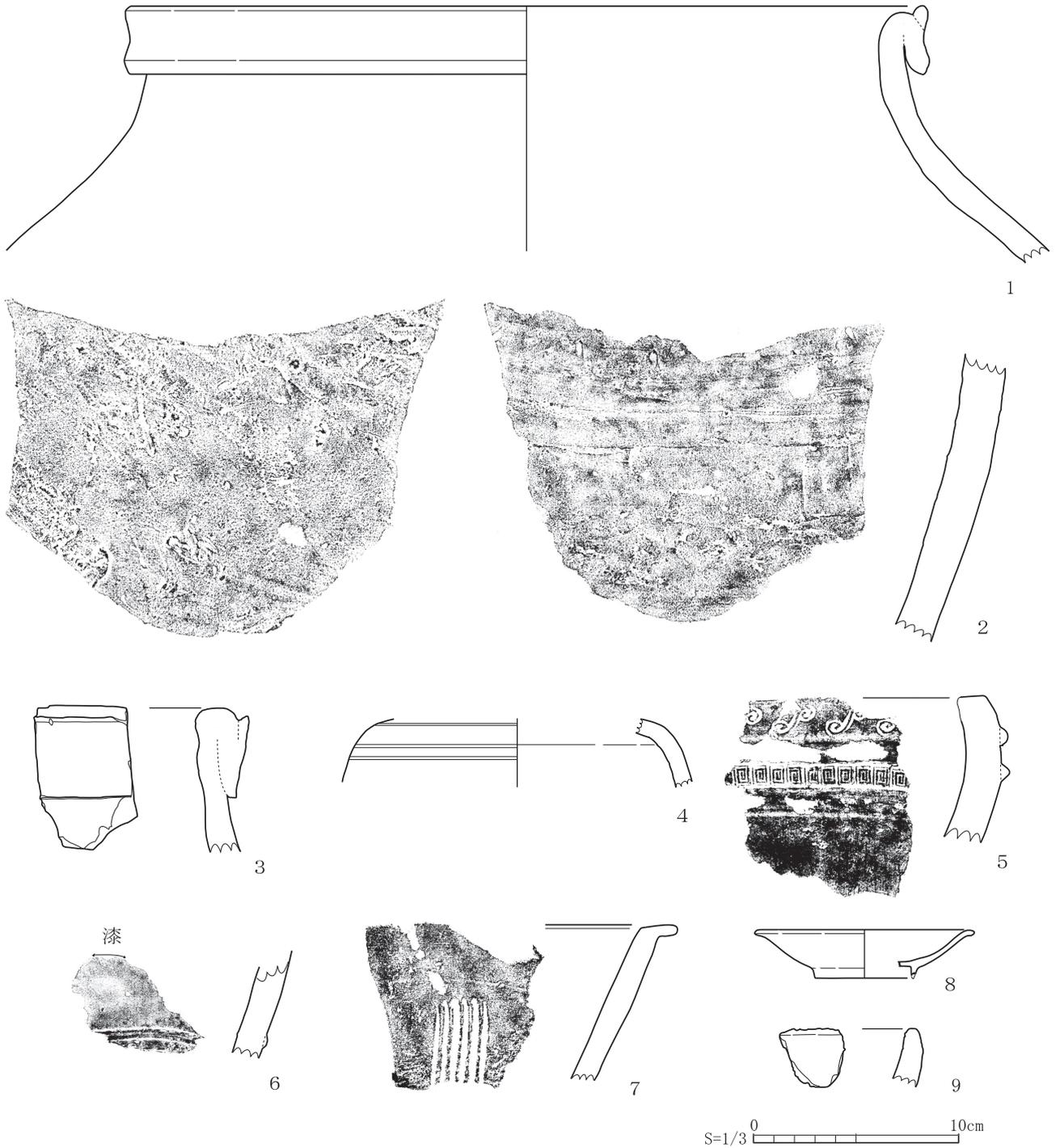
(註1) 中野晴久「生産地における編年について」全国シンポジウム『中世常滑焼をおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994

檜崎彰一・青木 修「常滑窯研究報告1 ～天神第4号窯跡・平井口第1号窯跡の調査から～」『研究紀要』第7号 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1999

(註2) 藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合研究—学融合を目指した新領域創生—」 2005

(註3) 高桑弘美「5 瓦質土器」『中世奥羽地方の土器・陶磁器』東北中世考古学会 2003

(註4) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会 1982



番号	種類	層位	特徴	口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	無釉陶器・甕	1-4	内・外面：ヨコナデ	(39.0) 3/24	-	-	4-5	R4	常滑
2	無釉陶器・甕	1-4	内・外面：ナデ	-	-	-		R3	在地
3	無釉陶器・甕	1-4	内・外面：ヨコナデ	-	-	-	4-1	R5	常滑
4	施釉陶器・瓶子	1-4	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ→灰釉	-	-	-		R2	体部最大径 (17.0)
5	瓦質土器・火鉢	1-4	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ→ミガキ スタンプ文	-	-	-	4-3	R6	S字文、雷文、2条突帯
6	瓦質土器・火鉢	1-4	内・外面：ナデ→ミガキ	-	-	-	4-2	R7	1条突帯、割れ口に漆付着
7	瓦質土器・搗鉢	1-1	内面：ナデ 外面：ヨコナデ→ミガキ 筋目 (6本)	-	-	-	4-6	R8	
8	白磁・皿	1-4		(10.8) 3/24	(4.9)	(2.4)	4-4	R1	中国 (明)
9	埴埴	1-4		-	-	-		R10	内外面に溶解物の付着

第3図 S D 13溝跡出土遺物

(大郷町)に所替えになり、八幡氏もこれに従って移転するので、この頃に八幡館も廃止されたとみられている^(註5)。八幡館の廃絶時期については、今回の出土遺物によっても概ね裏付けられたと言えよう。

- (3) SD13溝跡埋土3層の特徴としては、粘質土塊と砂質土塊が互層になるもので、一般的に言う人為的に埋め戻した状況とも異なっている。3層が人為的に運ばれたものかあるいは自然に流れ込んだものかは判断できかねたが、空堀の北側に存在した土塁等の構築物の一部であったとみておきたい。
- (4) 今回の調査では、八幡館に伴う明確な遺構を発見した。これは第1次調査における南北方向の空堀の発見に次ぐもので、当該地域周辺に八幡館関連遺構が残存している見通しを得た。

(註5) 藤沼邦彦「八幡館」『日本城郭大系』 第3巻 1981



調査区全景（西より）



S D13溝跡完掘状況（南西より）



調査区東壁断面



調査区南壁断面

XIII. 山王字山王五区・高崎字花の木地区試掘調査

1. 調査に至る経緯と経過

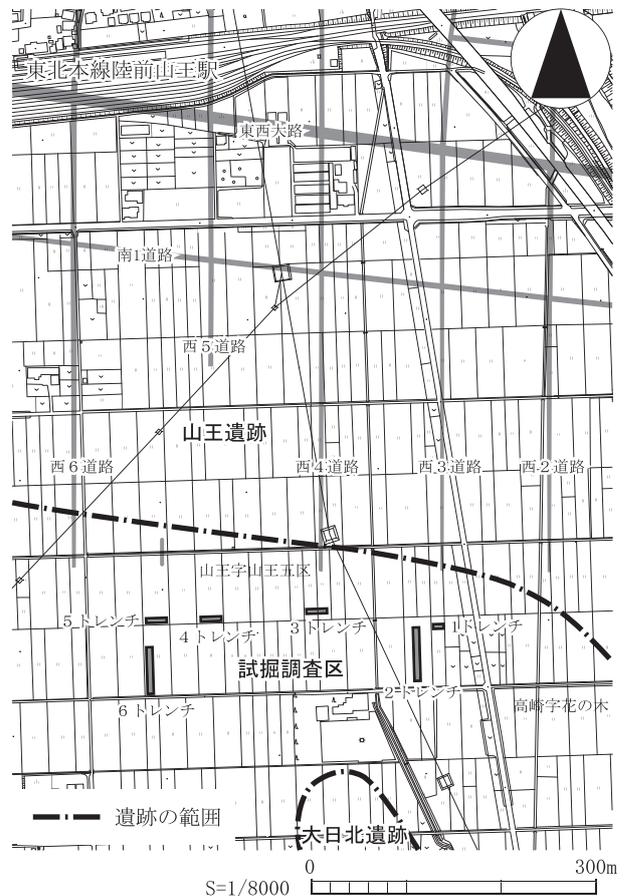
山王字山王五区・高崎字花の木地区は山王遺跡の南東側に隣接する水田域であり、農業振興地域に指定されている。近年、山王遺跡南端部においては農業用排水溝の整備が継続的に実施されており、特に当街区周辺ではこの整備に伴う発掘調査の成果から、遺跡の範囲がさらに南側に広がる可能性が高くなっていた。また、農業用排水溝については遺跡の範囲を超えて南側に延長する計画がすでに示されていたことから、早急に山王遺跡の南限を確定することが課題となっていた。このようなことから、本件は整備計画が示されている当該区を中心に、山王遺跡の南側の範囲を確認する目的で実施したものである。

調査に際しては、山王遺跡で確認される方格地割りのうち、西3～5南北道路跡及び西5・6間南北道路跡の延長部分の有無を確認することで古代の遺構の広がり把握することと、調査対象区の東・西端において中世以前の七北田川^(註)を確認することにより山王遺跡の南限を確定することに主眼を置き、合計6カ所のトレンチを設定することとした(第1図)。

12月14日、地権者の了承を得た地点から調査を開始し、18日には予定した全ての調査区についての表土除去・遺構検出作業及び平面図の作成が終了した。この結果、西4南北道路延長線上でSX1295道路跡、西3・5道路延長線上では道路側溝もしくは区画溝と考えられるSD1296・1298溝跡を確認し、古代の遺構が本地区周辺に広がっていることが判明した。一方、旧七北田川の流路についての明確なラインを探すことはできなかったものの、西端部に設定した南北トレンチ(6トレンチ)では、中央から北側で古代の遺構検出面と近似する浅黄色砂質土層、南半部ではそれよりも新しい河川埋土と考えられる粗砂層を確認した。粗砂層には灰白色火山灰が二次堆積する地点も認められることから、古代以降の河川が6トレンチ南端部を東流していたものと推測された。19・20日に調査区の埋め戻しと調査器材の撤収を行い、試掘調査の一切を終了した。

2. 調査成果

今回の調査では、現代の水田耕作土の直下で道路跡、溝跡を確認した。また、各トレンチにおいて少量



第1図 調査位置図

(註) 現在は本市西部を南流し仙台市若林区蒲生を経て太平洋に注いでいるが、中世以前は新田周辺から東に向きを変え砂押川と合流し、七ヶ浜町湊浜へ流れていたとされている。

ではあるものの土師器、須恵器、須恵系土器が出土している。調査面積が小範囲であったことや上面での検出にとどめたため、遺構の規模や年代についての詳細は明らかでない。

S X 1295道路跡 (第3図)

3トレンチで発見した道路跡であり、西4道路の延長と考えられる。東西両側に素掘りの側溝を伴っており(東側溝:SD1293、西側溝:SD1294)、このうち東側溝で2時期の変遷が認められる(a→b期)。また、b期では路面を横断するような東西方向の溝跡も確認している。埋土はいずれも褐灰色砂質土が主体であり、b期には浅黄色砂質土、a期には灰白色火山灰が混入している。

S D 1296溝跡 (第3図)

1トレンチ東端部で発見した南北方向の溝跡である。西3道路の延長線上に位置していることから、西3道路の西側溝あるいは区画溝と考えられる。規模は上幅約3.4mであり、埋土は浅黄色砂質土が多量に混入する灰黄褐色砂質土である。埋土上面より須恵系土器杯の小片が出土している。

S D 1297溝跡 (第3図)

4トレンチの全域で発見した東西方向の溝跡である。埋土は褐灰色砂質土が主体であり、中位には灰白色火山灰が自然堆積している。トレンチ西側では南側に延びる様相も認められることから、道路の交差点または区画溝になる可能性も考えられる。

S X 1298溝跡 (第3図)

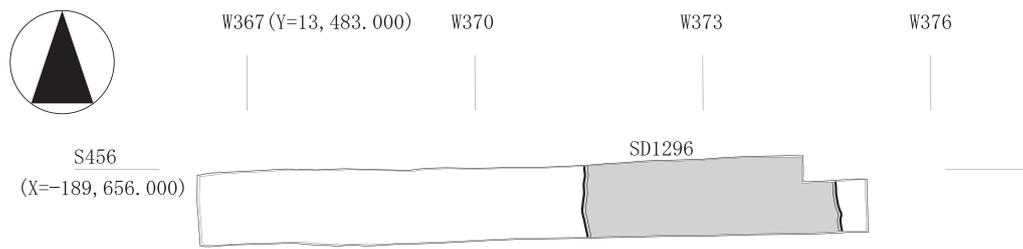
5トレンチで発見した南北方向の遺構である。灰白色火山灰の自然堆積層を覆うにぶい黄色砂質土上面で検出しており、埋土上面より肥前産の磁器皿が出土している。埋土は黒褐色粘土が主体であり、下層に炭化物層が薄い層状に堆積している。なお、6トレンチ中央部においても埋土が類似する南北方向のS X 1299溝跡を確認していることから、一連の溝跡もしくは堀跡であると推測される。



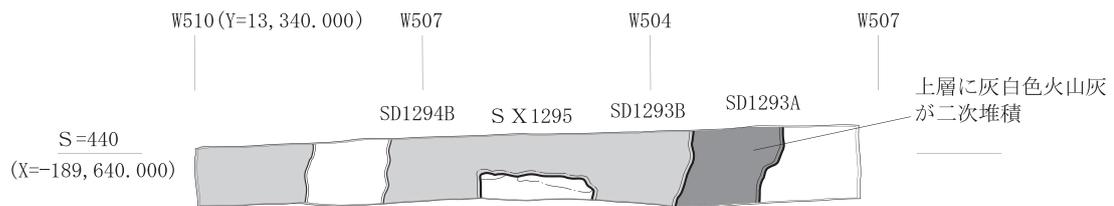
第2図 調査区全体図

3. まとめ

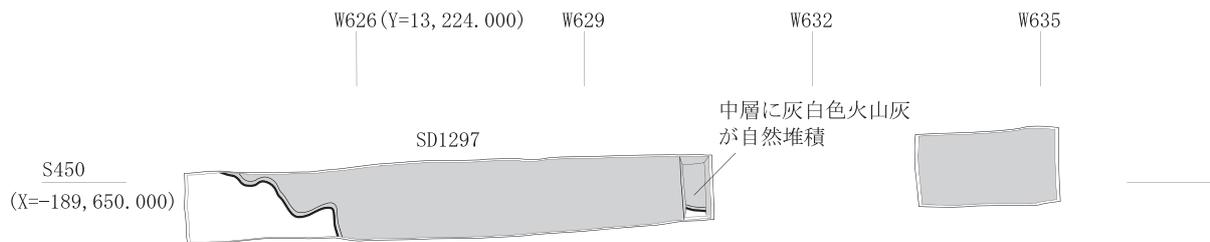
道路跡、溝跡を発見した。このうち、灰白色火山灰が二次堆積するS X1293 b西4道路東側溝は10世紀前葉以降、埋土中位に灰白色火山灰が自然堆積するSD1297溝跡は10世紀前葉頃と考えられる。一方、旧七北田川については、流路を明確にすることはできなかった。しかし、6トレンチでは北側に古代の遺構検出面と近似する細砂層、南側に灰白色火山灰が二次堆積する粗砂層が認められ、2トレンチ南側の農業用排水溝の底面でも類似した粗砂層を確認している。この粗砂層については河川の埋土もしくはその氾濫によって形成された可能性が高いことから、本地区南端部周辺が古代以降の旧七北田川に近接した位置にあるものと考えられる。



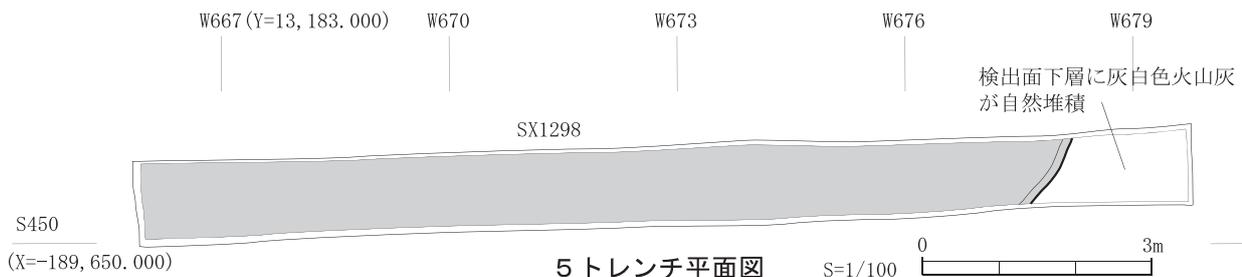
1 トレンチ平面図



3 トレンチ平面図

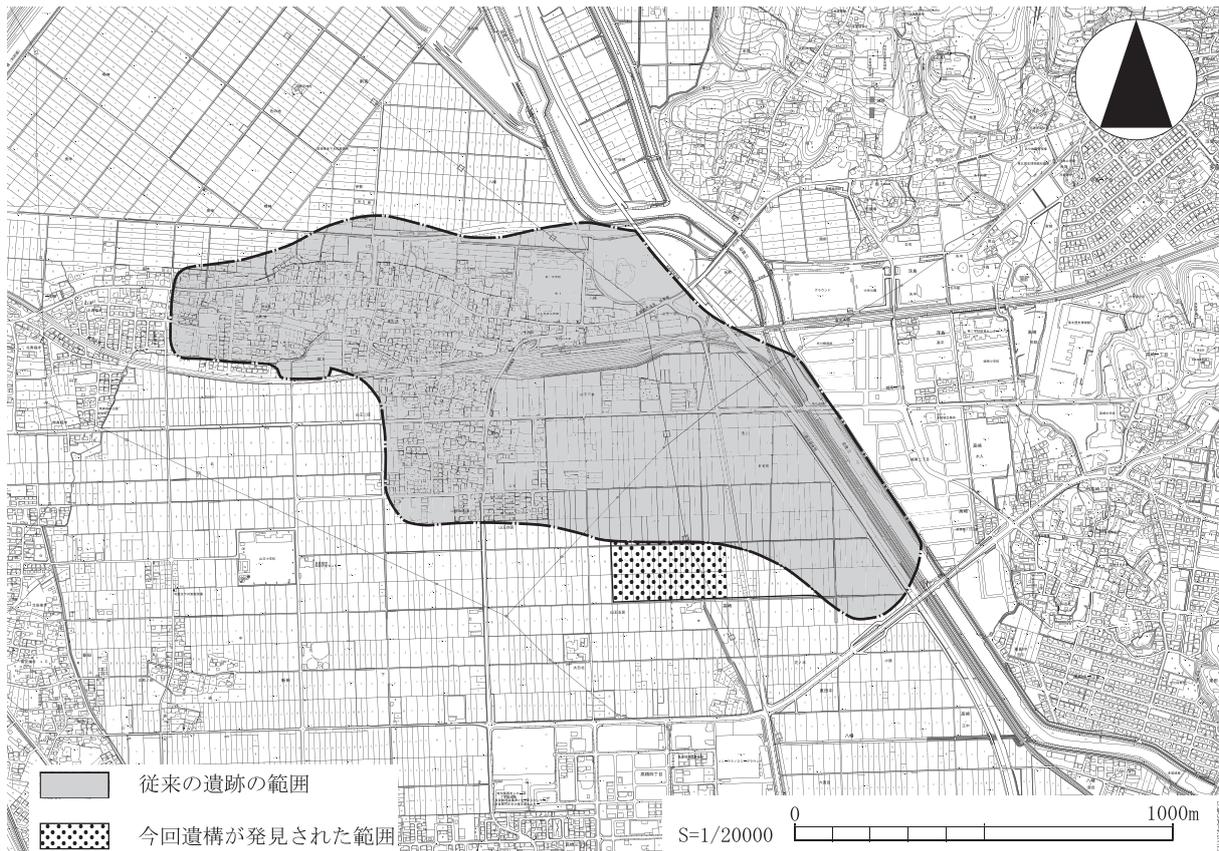


4 トレンチ平面図



5 トレンチ平面図

第3図 各トレンチ遺構平面図



第4図 山王遺跡の範囲



1 トレンチ・S D1296 (南西より)



3 トレンチ全景 (西より)



4 トレンチ全景 (西より)

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき							
書名	多賀城市内の遺跡 2							
副書名	平成18年度発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	石川俊英・島田 敬・相澤清利・武田健市・村松 稔							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦2007年3月23日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちかわはし 市川橋遺跡 (第55次調査)	宮城県 多賀城市 城南二丁目20-1	042099	18008	38度 17分 31秒	140度 59分 37秒	20060410 20060419	19㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第56次調査)	宮城県 多賀城市 城南二丁目5-2	042099	18008	38度 17分 38秒	140度 59分 33秒	20060510 20060607	26㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第57次調査)	宮城県 多賀城市 城南一丁目2-4	042099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 24秒	20060517 20060526	33㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第58次調査)	宮城県 多賀城市 城南二丁目20-10	042099	18008	38度 17分 29秒	140度 59分 39秒	20060703 20060707	20㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第59次調査)	宮城県 多賀城市 城南一丁目8-8	042099	18008	38度 17分 45秒	140度 59分 28秒	20060911	18㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第60次調査)	宮城県 多賀城市 城南一丁目3-1	042099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 23秒	20061004 20061016	24㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 (第61次調査)	宮城県 多賀城市 城南一丁目6-8	042099	18008	38度 17分 42秒	140度 59分 28秒	20061113 20061125	74㎡	個人住宅 建設
にいだ 新田遺跡 (第34次調査)	宮城県 多賀城市 新田字 新後14番7	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 57分 53秒	20060406 20060425	58㎡	個人住宅 建設
新田遺跡 (第35次調査)	宮城県 多賀城市 山王 字 北寿福寺53-7	042099	18012	38度 17分 48秒	140度 58分 11秒	20061012 20061109	36㎡	個人住宅 建設
にしざわ 西沢遺跡 (第14次調査)	宮城県 多賀城市 浮島字 沢前20-2	042099	18017	38度 18分 06秒	140度 59分 46秒	20060620 20060630	31㎡	個人住宅 建設

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八幡館跡 (第3次調査)	宮城県 多賀城市 八幡二丁目378-6	042099	18021	38度 17分 04秒	141度 00分 19秒	20061130 20061213	58m ²	個人住宅 建設
山王字山王五区 高崎字花の木地区 (試掘調査)	宮城県 多賀城市 山王5区4-1・ 5・12・13・16・ 17・100 高崎字花の木 3-1・5・6・7	042099	18013	38度 17分 28秒	140度 59分 07秒	20061214 20061220	7m ²	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市川橋遺跡 (第55次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	土壇	土師器・須恵器 砥石				
市川橋遺跡 (第56次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	道路・溝・ 柱穴	土師器・須恵器 須恵系土器・瓦 墨書土器・環頭 大刀		南I東西道路とその建設に伴う整地層を発見した。また、その整地層から環頭太刀の柄頭が出土した。		
市川橋遺跡 (第57次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	河川	土師器・須恵器				
市川橋遺跡 (第58次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	溝	須恵器		古墳時代・古代		
市川橋遺跡 (第59次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代						
市川橋遺跡 (第60次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	掘立柱建物 溝・土壇	土師器・須恵器				
市川橋遺跡 (第61次調査)	集落・都市	古墳時代・ 古代	東西大路	土師器・須恵器 鉄鏃				
新田遺跡 (第34次調査)	集落・屋敷	古墳時代・ 古代・中世	溝	土師器				
新田遺跡 (第35次調査)	集落・屋敷	古墳時代・ 古代・中世	溝	無釉陶器		中世の屋敷に伴う区画溝を発見した。		
西沢遺跡 (第14次調査)	集落	古代・中世		土師器・須恵器 瓦		多賀城東面に広がる湿地を発見した。		
八幡館跡 (第3次調査)	城館・散布 地	古代・中世	堀	施釉陶器瓶子、 無釉陶器・甕・ 瓦質土器播鉢・ 火鉢		八幡館に伴う空堀を発見した。		
山王字山王五区 高崎字花の木地区 (試掘調査)		古代・近世	道路・溝	土師器・須恵器 須恵系土器		古代の都市空間が、山王遺跡のさらに南側に広がることが判明した。		

多賀城市文化財調査報告書第87集

多賀城市内の遺跡 2

—平成18年度発掘調査報告書—

平成19年3月23日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022)368-1141

印刷 有限会社 工 陽 社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話 (022)365-1151
